
魔法少女リリカルなのは～よみがえりし大地の神～

天の道を行く妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜よみがえりし大地の神〜

【Nコード】

N0889Q

【作者名】

天の道を行く妄想者

【あらすじ】

人類を救うため自らワームとして消滅した男……小日向貴大。しかし彼の前に髭面の爺さん（神）が現れ「世界を守ってほしい」と貴大をリリカルなのはの世界に送ってしまう……。果たして貴大は世界を守ることが出来るのか！

※現在大型修正中！！〜現在第1話まで〜

はじめに

これが僕の処女作です。文才マイナスで自己満足のご都合主義&全体的にキャラ崩壊している可能性がございます。苦手な方はご遠慮ください。後この作品は作者の文才の都合で台本書きで書いております。

更にこの作品はテンプレート上等（本人自覚なし）な作品ですのでご了承ください。あとこれは魔法少女リリカルなのはと仮面ライダーカブト（設定のみ）のクロスオーバーです。

もしご感想やご意見ご指摘などありましたら仰っていただければ幸いです。

プロローグ

NO Side・・・

2006年クリスマス……この日普通ならお祭りムードで盛り上がるのだがこの世界ではへwormと呼ばれる地球外生命体とへZ^ゼE^{クト}CTと呼ばれる人が作った対worm組織が死闘を繰り広げえられていた。

「カブトオオオオオー！ー！ー！」

カマキリを模したworm……へマンティスwormが叫びながらカブトムシを模した戦士……へカブトハイパーフォームへに向かって行く。

「ふっ！」

カブトはマンティスwormの攻撃をかわし裏拳を入れた後、腰の左側にある銀色のカブトムシ……へハイパーゼクターの角……へゼクターホーンを倒す。

『Maximum Rider Power』

「うおおおおおおお！！！」

マンティスwormが再び突撃、だがまたもカブトはそれを避け今度は回し蹴りを叩き込み手に持っていた黄金の剣……へパーフェクトゼクターの刀身の根元にある四つのスイッチを押していく。

『Kabuto Thebee Drake Sasword P

「クッ……ここは？」

俺が目を覚ますとそこは何も無い真っ白な世界だった。

「確か俺は死んだはずだが……」

それにしても感覚があるんだが。

「確かにおぬしは一度死んでおる」

そこに現れたのは髭面の爺さんだった。

「誰だアンタ？」

「儂は神じゃ！」

は？ 神だと……って死んでるんだからおかしくないか。

「んで……神とやらが俺に何のようだ？」

疑問に思った事を聞いてみると。

「実はおぬしに頼みたい事があってきたんじゃよ」

「頼みたい事？」

神様とやらが俺に頼みたい事ねえ……。俺は少し疑問に思いつつ聞き返してみると。

「そうじゃ、お主はもう一度人の世で生きる気は無いかの？」

「どういう事だ？」

俺は質問の意図が分からず聞く。

「ふむ、最近とある世界に本来居るはずのないヘイレギュラー」という奴らが現れてのお、そこで仮面ライダーカマード……君に奴等の掃除をたのみたいのじゃ」

「……仮面ライダー？」

「仮面ライダーとは世界の平和のために悪と戦う者の事じゃ」

成る程……。

「因みに拒否権は？」

「無い！ それじゃあ、がんばってのお」

神の持っていた杖が光を放ちだした。

「ちょ、おま！」

そう言い終わらないうちに俺は再び意識を失った。

（病院）

目覚めて一番最初に見たのは真っ白な天井だった。

「ここは、何処だ？」

俺は体を起こし確認する、どうやら病院のようだ。

「やあ、気がついたかい？」

声をかけてきたのは若い男性だった。

「ええ、貴方は？」

「俺か？ 俺の名は高町士郎だ。君の名は？」

「俺は小日向貴大です」

特に隠す必要も無いのでここは名乗っておく。

「ところで君みたいな子供があんなところで何をしていたんだ？」

ん、子供？ そう疑問に思いながら手を見てみると確かに小さい。
俺は嫌な予感がしたので。

「すみません、鏡を見ても良いですか？」

「ああ構わないよ」

その言葉を聞き俺は鏡のある場所に立つとそこには5歳ぐらいの俺が映っていた。

「……………」

あれ……………うそだろ……………マジで？ 俺は驚きのあまり声が出ない。

「どうかしたのか？」

心配そうに声をかけてくれる士郎さんに俺は。

「いえ、何でもないです」

あの爺……なんてことをしてくれたんだ！ 心の中で爺に恨み言を
念仏のように唱えていると。

「震えているけど大丈夫か？」

「大丈夫です……」

あまり心配させても悪いので爺への恨み言を思うのを止め士郎さん
のほうを向く。

「ところで君はあんなところで何をしていたんだ？」

「あんなところ？」

「ああ君は山の中に倒れていたんだ」

「山の中？」

全く身に覚えの無い俺は首をかしげる。

「覚えていないのか？」

「ええ全く」

本当に心当たりがない……と言うか爺、アンタは俺が嫌いなのか？

「……親は？」

「いません」

こっちの世界に居る筈はないしそもそも向こうの世界でも既に親は死んでるしな。

「今までどうしていたんだ？」

「適当に生きてきました」

本当の事は話せない……でもまああながちまちがいでもないからなあ。

「……君はこれからもそうやって生きていくのか？」

「まあ……そうするしか……」

「……それじゃあうちの子にならないかい？」

いきなり過ぎないか……？

「えっ、でも……良いんですか？」

俺が戸惑いながら聞くと。

「妻や子供達にはすでに話してあるし。何より君みたいな子供を放

っておくことは出来ないよ」

ずいぶん器のでかい人だな……。行くあてもないし……。好意に甘えておくか。

「それじゃあ、よろしくお願いします」

「それじゃあ行こうか」

「はい？」

ん？ 俺は今、入院中のはず……。

「実はお医者様にはすでに許可を貰ってるんだよ」

「……」

マジかよ……。最初っから家に連れて帰るつもりだったとは……。

「ん？ どうした？」

「……なんでもないです」

この人の行動力には驚かされてばかりだな……。

「それと家族になるんだから敬語は辞めてくれ」

「ん、分かった」

それから俺たちは土郎さんの家……。高町家に向う事になった。

〽高町家〽

「へえ、ここが……」

「ああ、ここが俺たちの家だ」

目の前の家は豪邸とは言えないがそれなりに大きい家だった。

「おとうさんおかえりなの」

そう言いながら俺と同じ年ぐらい（あくまで肉体だけ年齢だが）の少女が玄関から出てきた。

「ただいまなのは。貴大、この子が末っ子のなのはだ」

「はじめまして、たかまちなのはです！」

「小日向貴大だ、よろしくな！」

「こちらこそなの！」

そうして俺の高町家での暮らしが始まった。

〽半年後〽

この半年色々あった。母親の桃子さんと一緒に料理を作ったり。長女の美由紀にお風呂に引きずりこまれたり……。長男の恭也には何故か「俺と戦え！」って迫られたり……。なのはが俺のベット潜り込んだり……。そんな騒がしくも平和な日々はある事件をきっかけ

に崩れ去った。父親である士郎さんがとある事故に巻き込まれた。そのせいで桃子さんや恭也や美由紀は大忙しらしい。そして問題がもう一つ起きた、なのはが全く笑わなくなった。いや……笑うのは笑うのだが自然に笑うことが無くなった。そんななのはが心配で俺はずっとそばに居たのだが……。

「ねえ……たかひろくん」

「ん？どうした？なのは？」

「もうなのはにかまわなくてもいいよ、なのははひとりでもへいきだから」

「おいおい……何言ってるんだ？」

「なのははひとりでもへいきなのだからたかひろくんも好きなことやってもいいの」

なのは……お前は……。そう思うのと同時に俺はなのはを抱きしめていた。

「悲しいこというなよ……。俺は嬉しかったんだぜお前に甘えられてもらえて、ずっと一人だったからだから桃子さんと料理する事も、美由紀と風呂に入ったことも、もちろんお前が甘えてきた事も全部……全部俺にとっては初めてで嬉しくて……。だから一人で平気だなんて寂しい事言うなよ……。」

俺はいつの間にか泣いていた。

「たかひろくん……あまえていいの？」

「ああ……」

「いっぱいめいわくかけるかもしれないよ?」

「そんなモン迷惑のうちには入るかよ」

「さ、さびしかったの! ずっとさみしかったの!」

この後俺たちは小一時間ほど泣き続けた。

〽病院〽

俺は今、病院に潜入している。潜入といってもマンティスワームに変化してクロックアップを使っただけなんだが……。そして俺は今、士郎さんの病室の前にいる……。ライダーベルトを持って。

「さて……これはかなり分の悪い賭けだがな……。やらないよりはマシか……」

さて俺が何をしようとしているか説明しよう、ライダーベルトの装着者に対する治癒機能を使って士郎さんを治そうとしている。まあ資格者以外に使えるか分からんから賭けなんだが……。まあそういう事で取りあえず部屋に入り士郎さんにライダーベルトを装着するとライダーベルトと士郎さんが光だしその数分後士郎さんが目を覚ました。そして士郎さんに説明は後日すると言い残り足早に病院をクロックアップで去った。

〽後日〽

俺は退院した士郎さんを含めた高町家のみんなに自分の事を話した。自分が転生者であることやヘイレギュラーのこと、転生前の世界……ワームやマスクドライダーの事、俺がそのワームと人間のハーフであることなどを話したがみんな信じられないようだ。

「しかし、信じられんな」

「まあ……そうだろうな、俺だって記憶が無ければ信じないさ」

恭也の言葉に俺は少なからず同意する。

「でも事実なんだろう？」

「ああ……」

俺は士郎さんの言葉に頷きながらマンティスワームに変化して見せた。

「「「「!?!?!?!」」」」」

当たり前と言うべきか……全員が驚いてる。

「まあこれで証明になったかな？」

俺は元に戻りながら訊ねる。

「ああ……」

「それじゃあ俺はこの辺で」

俺は立ち上がり玄関に向おうとする。

「何処に行く気なの？」

「出て行くのさ……正体をばらした以上此処には居られない、みんなだって化け物と一緒に住むなんて嫌なはずだ」

美由希の言葉に俺はそう返し出て行こうとすると。

「いっちゃだめなの！」

なのはが俺にしがみついてくる。

「そうだよ！人とはちょっと違うだけでしょ？なら問題ないよ」

「そうだぞ！それにお前と一回も戦ってないのに出て行くなんて許さないぞ」

美由希の言葉に感動しつつ恭也の言葉と僅かな殺気に少しびびる。

「俺が怖くないのか？」

「怖い訳ないだろ、どんな姿をしていてもお前はもう家族なんだから」

士郎さんは俺の一言を否定する。

「俺はここに居て良いのか？」

「もちろんよ」

俺の疑問に桃子さんは即答してくれる。

「……グス、……ありがとう」

俺は感情を抑えきれずに泣き出した。これが俺が高町家の本当の家族になった瞬間だった。

〽数時間後〽

「たかひろくんはなきむしなの」

なのはの言葉に確かにこの世界に来て涙腺が緩んでるなと思いつつ。

「ところでヘイレギュラー〽ってなんなんだ？」

「さあ？ 知らん」

恭也の疑問に俺は首をかしげながら答える。

「知らんって……」

苦笑いする美由希。

「俺も名前しか聞いてないからな……」

あの爺め、最低限の知識ぐらい用意しろよな……あいつは本当に俺が嫌いなのか？

「まあ……時が来れば分かるだろ」

「いい加減だな」

恭也よそれは十分承知している。

「まあ、それまでは今までどおり普通に生活するさ」

そんな会話をしながらこの出来事は幕を閉じた。

プロローグ（後書き）

小説を読んでいただきありがとうございます。
いかがでしたでしょうか？感想やご意見があれば幸いです。

設定

小日向貴大

年齢（カブト本編） 18↓（プロローグ） 5↓（リリカルなのは本編） 9

カマードの資格者。カブトによって消滅し死亡するが髭面のじーさん（神）によってリリカルなのはの世界に転生する。

魔力ランクはB。性格は普段は優しいがキレると怖くなる。マンティスワームに変化が可能。料理が得意。ワーム（ネイティブ）と人間のハーフである。

レアスキル〈虫の知らせ〉……視覚、聴覚、嗅覚、第六感、危機感知能力が常人の数倍。

仮面ライダーカマード

小日向貴大が変身するマスクドライダー。モチーフはカマキリ（マスクドフォームは蛹）。基本カラーは緑、複眼の色は赤色。誕生の詳細を知る者からは、「自然を支配せし大地の神」と呼ばれる。なお容姿は頭部とゼクターと色以外はカブトと共通。

ツール

カマードゼクター

カマキリ型昆虫コア。腰部に装着したライダーベルトにセットすることで変身し、その状態から頭部のゼクターホーンを右側に展開することでキャストオフする。色とゼクターホーン以外カブトゼクターと共通。リリカルなのはの世界に来てから会話と魔法の使用が可能。

ライダーベルト

カマードの変身ツール。ZECT^{ゼクト}により開発されたものをNECS^{ネクス}がコピーしたものである。変身時の出現・装着過程は不明。

カマードブレイガン

カマードが標準携行している武器。ガンモードとブレイドモードに変形可能。

形状イメージはガンモードがデルタフォンの上にファイズポインタ^{ポインタ}が付いた者、ブレイドモードが刀身はファイズエッジの持ち手がカマードブレイガン^{ブレイガン}へガンモード^{ガンモード}、チャージレバーはファイズポインターの部分。

カマードエクステンダー

カマード専用の強化特殊バイク。通常時はガソリンによる走行も可能だが、緊急時はECR放電におけるプラズマ生成でイオン加速による超スピード走行が可能。カマードの意思により無人での自動走行も可能。エクスマードは前輪と後輪が伸びて二つに別れ上にあがってホバーみたいになる。

形状イメージは緑色のカブトエクステンダー。

マンティスワーム

カマキリをモチーフにしたワーム。ワーム（ネイティブ）と人間のハーフのため擬態能力は無いがクロックアップは可能。

NECS^{ネクス}

人々が平和で暮らすという目標を掲げる、カマードを中心とした組織。

第1話 『イレギュラーと吸血鬼 〱カマード再誕〱』

〱5年後〱

「……朝か」

俺は何時も通りに目を覚ます。その時刻は午前6時俺は隣で寝ているのはを起こさないようにベットを出る。何故なのはがいるかと言うと5年前のあの事件以来週3日のペースで一緒に寝ている（というより潜り込んでくる）。まあそんな話はさておき俺はジャージに着替え。毎朝恒例のジョギングを始める。何故そんなことをしているかというと簡単に言えばヘイレギュラー〱対策だ。この5年イレギュラーもカマードゼクターも全くといっていいほど見かけない。そのことに疑問を感じつつもいつ来るか分からないイレギュラーに對しての準備のために体を作っている。まあ体が子供のためあまり成長を妨げると困るから程々にしているが……。なんて考えているうちに予定のコースを走り終え家に到着する。

「あら、お帰りなさい、悪いけどなのはを起こして来てくれるかしら？」

桃子さんがキッチンから出てくる。

「うい〱」

俺は適当に答えなのはのもとに向う。

〱貴大自室〱

「おーい、なのは起きろ！」

最初は優しく揺らしながら起こす。

「Z Z Z Z Z Z……」

「おい、起きろー！」

少し強めに布団を引っぺがしながら。

「Z Z Z Z Z Z……」

貴大「起きろって言ってんだろーが！」

最後はシーツをテーブルクロス引きのように引く。

ただしシーツを引くとなのはも落ちるが……。

「にゃ！」

落ちた衝撃でなのはが起きる。

「ようやく起きたか……この寝ぼすけめ」

「ひ、酷いよ貴大君……」

なのはが恨めしそうな目で俺をみるが……。

「うるさい、2回目で起きないお前が悪い！それより朝飯だどつと着替えて来い」

「はい」

なのはは返事をしながらなのはは自分の部屋へ戻っていった。

くリビングく

シーツを直した俺はリビングに下りた。

「士郎さんおはよう」

「おはよう貴大」

「ところで二人は？」

士郎さんに朝の挨拶をし恭也と美由希の2人について聞くと。

「まだ道場のほうだな」

「なのはもまだだし……俺が呼んでくるわ」

「それじゃあ任せたぞ」

俺は道場へと足を向けた。

「道場」

道場に入ると美由希と恭也が剣術の稽古をしていた。

「おーい二人とも朝ごはんだぞ」

「もうそんな時間か……今日はここまでだな」

「はーい」

俺は道場にいた二人と共にリビングに戻った。

「通学路」

その後朝食を摂った俺となのは通学バスに乗るためバス停に向って走っている。

「おいなのは！早くしないとバス行っちゃまうぞ！」

「貴大君、待ってよ〜!」

「うるせえ! 大体何でお前は二度寝してんだよ!」

今走っている原因は何となのはが自分のベットで二度寝をしていたからだ。

「だって気持ちよさそうだったの」

「だってじゃ無いだろ!」

「う、ごめんなさい……」

ちきしょうこのままなのはに合わせてたら間に合わない……こうなったら。

「暴れんなよなのは!」

と俺はなのはの元に戻りなのはを米俵のように担いで走り出した。

「ふ、ふえええ〜……」

なのはの顔が真っ赤になっているが気にしている余裕は無い。そのまま全速力で走りバスに滑り込んだ。

「ゼエ……ゼエ……」

俺は息を荒げながらなのはを降ろす。

「相変わらず二人は仲が良いわね」

俺と同じ年ぐらいの金髪の少女……へアリサ・バニングス〓が後ろの席から声をかけてきた。

「うる……せえぞ……アリ……サ……」

俺はアリサに文句を言いながら後ろの席に座る。

「貴大君、大丈夫？」

アリサの隣に居た紫の髪の少女……へ月村すずか〓が俺を心配してくれた。

「おう、大丈夫だ」

そんな会話をしていたらバスが動き出した。

放課後……

「んゝ、やっと終わったか……」

俺は背を伸ばし欠伸をする。

「終わったかって……アンタずっと寝てたじゃない」

「ちゃんと授業受けようよ……」

俺はアリサとすずかの言葉を。

「たりに」

の一言で返す。

「たりに……ってアンタねえ……」

「んな事より帰るぞなのは」

アリサのジト目を軽くスルーしながらカバンを持ち、帰る準備を始める。

「うん！わかったの」

どうやらなのははすでに帰る準備を終えていたようだ。

「あ！待ちなさいよ！」

帰ろうとするとアリサが追ってくる。

「みんな待ってよ」

その後ろからすすずかもついてきた。

「ところでお前ら今日はどうするんだ？」

俺が今後の予定を聞くと。

「私は家の用事ね」

とアリサが答え。

すずか「私は図書館に行こうと思ってるの」

ふむ、すずかも図書館か。

「奇遇だな俺も図書館に行こうと思ってたんだ」

「それじゃあなのはも……」

「お前は店の手伝いだろ？」

俺はなのはの意見をバツサリと切り捨てる。

「むううう……」

なのはが頬を膨らまして唸っているが気にしない。

「んじゃ今日はここで解散か？」

校門前でみんなに聞いた。

「そうね、それじゃあねすずか、なのは、ついでに貴大も」

「俺はついでだよ」

若干落ち込みながらアリサに突っ込みを入れる。

「もうアリサちゃんたら……それじゃあねアリサちゃん、なのはちゃん」

苦笑いするすずか。

「うんまた明日ねすずちゃん、アリサちゃん……あと貴大君はあまり遅くなっちゃダメだよ！」

「へいへい……」

こうして俺たちはそれぞれの場所に向った。

〃図書館〃

「……んあ？もうこんな時間か……そろそろ帰らないとな」

俺はすずかのもとに向おうと歩いていたら。

「ん〃取られへん……」

車椅子の少女が手を伸ばして本をとろうとしていた。

「ん？　これか」

少女では届きそうに無かったので俺は本を取ってあげた。

「ありがとうな」

「いや別に……んじゃ俺は急いでるんでな」

そう言って俺はその場を立ち去った。

・・・

「すずかそろそろ帰らねーか？」

俺は図書館に入ってから分かれていたすずかと合流し問いかける。

「えっ？ あっ、もうこんな時間……そろそろ帰らなきゃ」

どうやらすずかも時間を気にしていなかったようだ。

「送っていくよ」

「えっ、でも……」

「ついでだから構わん」

「そ……それじゃあ……お願いしようかな」

「おう！任せとけ」

俺とすずかは図書館を出た。

・・・

帰る途中、俺は尾行してくる男に気付いた。

「すずかちょっと走るぞ」

そう言って俺はすずかの手を取って走り出した。

「この辺で良いか」

しばらく走った後、俺は走るのを止める。

「いきなりどうしたの？」

すずかは尾行に気付いていなかった様だ。

「後をつけられてたから振り切った」

と言って警戒を緩めた瞬間チーターの顔をしたモノクロの怪人が8体襲い掛かってきた。

「くそっ！」

俺はすずかを屈ませ飛び掛ってきた1体に蹴りを入れる。

「……こいつ等がイレギュラーって奴か」

状況分析をしているとさっきの男も追いついたようだ。

「やっと見つけたぜ……月村の譲ちゃん！」

「すずかに何のようだ？」

俺はすずかを庇うように立つ。

「おいおい坊主、何でそんな奴を護るんだ？……いや知らないだけかなら教えてやるよ、そいつはな！」

「い、いや……やめて！」

すずかの怯え方が異常だ。何かあるのか……。

「そいつはな！バケモンなんだよ！」

「い、いやあああ————！！！」

「……」

成る程な自分が普通じゃないって言う劣等感がすずかの怯えの正体か……。

「そいつはな！テメエ等をだまして生きてきたんだよ！分かったならそいつを渡せ！」

「……それがどうした」

「ああ？」

「確かにすずかは人間とは違うかもしれない、だがそんなことは俺には関係ない！大切なのは人かどうじゃない、大切なのは心だ！笑って泣いて怒って喜べる心だ！そんなことも分からずにすずかを傷つけようとするのなら……この俺がテメエ等をぶっ倒す！」

「貴大君……」

少し怯えた様子で俺を見るすずか。

「くっくくくくくく……おいおいこの数をどうやって倒すんだクソガキ！」

「こうやってさー！　はああ……」

俺がマンティスワームに変化しようとした瞬間、空間を切り裂き緑色のカマキリを模した機械……ヘカマードゼクターが飛んでくる。

「はっはっ……なんつータイミング……」

俺はカマードゼクターを掴み。

「変身！」

俺はカマードゼクターを腰に出現したライダーベルトに装着すると。

『H e n s h i n 』

電子音が鳴りヒビロノカネの鎧を纏い俺は、銀色の戦士……仮面ライダーカマードヘマスクドフォームに変身した。

「さあ……行くぜ！」

俺はまず、腰の右側に付いているカマードブレイガンヘガンモード（以後ブレイガン）を手に取りすずかの後ろにいるイレギュラーにけん制しすずかの退路を空けすずかを逃がそうとする。

「すずか、逃げろ」

「えっ、でも……」

すずかは突然の事で戸惑っている。

「俺なら大丈夫だ」

安心させるためすずかの頭を撫でながら言う。

「う、うん分かった……」

すずかは若干不安そうだったがイレギュラーの包囲網から離れていた。

「にが……」

「行かせねーよ！」

すずかを追いかけようとしたイレギュラーを掴み反対方向に投げる。

「あれは放っておけ今は奴を倒すぞ！」

「おう！」

イレギュラーは俺を敵と見なし襲い掛かってくる。

「やれるもんならやってみろ！」

俺はブレイガンへソードモードに変えイレギュラーに向かって進み1体を斬る。

「グア……」

ダメージに耐え切れなかったのか斬られた1体は消滅する。

「「ウオオオオオ——」」

イレギュラー2体が俺に向って来るが……。

「遅え！」

俺は攻撃をブレイガンで受け流しながら1体の腹部に蹴りを入れ更にもう1体をブレイガンで斬りつけ消滅させる。

「やっぱりこれがしつくりくるぜ」

ブレイガンをへガンモードで切り替えエネルギー弾を後ろに居た2体に当て……。

「グギャー……」

「グガッ……」

当たった2体は消滅した。

「まさかこれほどとは……」

「クッ……ここはひ……」

「逃げられると思うなよ！」

俺は逃げよう足したイレギュラーに即座に追いつきブレイガンへブレイドモードで切り裂く。

「グウ……ここまでか」

斬られた一体が消滅する。

「後はお前らだけだ」

「「う……うおおおおお！！」」

3体が一気に襲い掛かってくる。それを俺はすれ違いざまに斬り裂き最後の三体を消滅させる。

「さて……すずかの所へ行かないとな」

俺はそのまますずかのもとへ向った。

すずかSide・・・

貴大君に逃がしてもらった私は必死に走っていた。さっきお姉ちゃんに連絡を取ったので助けに来てくれるだろうが心配なのは貴大君だ姿が変わったとはいえあんな異形に囲まれて無事である保障は無い……なんて考えているうちに私の前を人影がさえぎった。

「へっへっへようやく見つけたぜ」

私を狙ってきた人が銃を持ってこっちに向ってくる。

「い、いや……」

私は思わず尻餅をついてしまう。

た、助けて貴大君……。私は祈るように目を瞑る。

「そろそろ死ねや！」

男の人は弾丸を放った……。しかし私に衝撃は無く代わりに金属がぶつかり合う音が聞こえた。

貴大Side・・・

俺がすずかを探していると犯人が銃をすずかに向けているところを見つけた。俺は咄嗟にすずかの前に出てブレイガンで弾丸を弾く。

「……え？」

「な、何でお前がここにいるんだよ。あ、あいつらはどうした！」

「倒したに決まってるだろ……。それよりお前すずかに手を出すってことはそれ相応の覚悟があるって事だよな！」

俺は犯人に近づいて行き拳を振りかぶり。

「ひいっ……！」

そのまま振り下ろす。

……但し犯人の顔面すれすれを狙って。すると犯人は気絶してしま
ったようだ。俺は変身を解除しすずかの元へ向う。

「大丈夫かすずか？」

俺は尻餅をついているすずかに手を伸ばす。

「う、うん……ありがとう」

すずかは顔を赤くしながら俺の手を取った。

「いやあしかし、少し見ない間にいろんなフラグを立てたもんだな」

「誰だ！」

俺は辺りを見回すが誰もいない。

第1話

『イレギュラーと吸血鬼　くカマード再誕く』

(後書き)

小説を読んでいただきありがとうございます。
ご意見や感想待っています。

第二話

『誘拐事件と超高速戦闘〜キャストオフ〜』

(前書き)

今回は特に説明などがグダグダになっておりますあらかじめご了承ください。

あと作者はバトルサイドの脳内BGMはFULL FORCEのサビのつもりです。よければ脳内で流していただければ幸いです。

第二話 『誘拐事件と超高速戦闘／キャストオフ』

月村邸・・・

あの後俺たちはすずかのお姉さん・・・〈月村忍さん〉と恭也に保護？され、すずかの事・・・〈夜の一族〉について説明を受けた。

貴大「へえ、この世界にはそんなのまで居るんだな、てっきり俺は人外なんて俺とイレギュラーだけだと思ってたが……」

（全く世の中分らんものだ）

忍「それってどう言う事？」

貴大「恭也や高町家のみんなは知っているんだが俺はワームって言う地球外生命体と人間のハーフなんだ」

忍「！」

貴大「まあ……信じられないかもしれないけどな」

（まあこんな話信じられる奴の方が凄いがな）

忍「……いえ、信じるわ」

貴大「……そうか」

（こいつは意外だな。）

忍「それでね、夜の一族には掟って言うのがあってね……一族の事

を知られたら記憶を消すかすずかと契約するか選ばなければなら
ないの」

貴大「契約？」

忍「まあ簡単に言う友達になるか恋人になるかね」

貴大「なるほどねえ……」

忍「それで貴大君の答えは？」

貴大「答える必要はあるのか？」

忍「どういうことかしら？」

貴大「だってそうだと俺はすずかを既に友達だと思っている……向
こうがどう思っているのかは分からんがな」

忍「それじゃあすずかと契約するってことで良いの？」

貴大「ああ、この先関係が進むかもしれんが今の所は変えるつもり
は無い」

忍「あら、進む可能性があるの」

貴大「無いとはいいきれんだろ、まあそういう事でこの話はこれで
いいか？」

忍「ええ、構わないわ」

恭也「しかし、それがお前の言っていた奴か？」

貴大「ああ、そうだが……」

カマZ「俺はカマードゼクターって言うんだ宜しくな！」

貴大「しかし何でカマードの大きさが前のままだったりお前がしゃべったりしてるんだ？」

カマZ「俺がしゃべれるのは神様の粋な計らいって奴さ、んで大きさについては魔法を使ってるんだぜ」

貴大「魔法？」

カマZ「魔法とは大気中に漫然と満ちている魔力素という原素をリンカーコアによって吸収、エネルギーとして加工したものを使用し呪文というプログラムを使い発生させる現象の事だ」

貴大「……魔法って言うより超科学だなそりゃ、んでどんな魔法が使えるんだ？」

カマZ「えーっと確かさっき使った変身魔法……これはカマードに変身して無くてもライダーベルトさえ付けていれば使えるぜ、あとは飛行魔法にバインドに認識妨害だな」

貴大「飛行魔法や認識妨害はともかくバインド？」

カマZ「バインドって言うのは敵を拘束する時に使うもんだ」

貴大「へえ」

なるほど……こいつは便利だな。

カマZ「あと神様からの伝言なんだが……さっき戦った奴をへダミ
ーイレギュラー」(以後、ダミー) って言うことに決定したそうだ」

貴大「なるほど了解」

(名称があつたほうが呼びやすいしな)

カマードZ「あと、言い忘れてたがイレギュラーは人の悪意を食っ
て成長または分離するそうだ」

貴大「かなり厄介だな……」

カマZ「ああ、それとカマードエクステンダーもこっちの世界に送
ってもらってるぜ」

貴大「そいつはホントか!」

カマZ「ああ」

恭也「それでカマードエクステンダーって何なんだ?」

貴大「俺専用のバイクだ」

忍「バイクって貴方9歳なんじゃ……」

貴大「諸事情で9歳まで肉体年齢が下がってるが本当は18……い
や4年たったから22歳なんだ」

忍「なんか出鱈目ね」

貴大「自覚はしてる」

こうしてずずかと夜の一族に関する事件は終わりを告げた……。

かに見えたが……。

数日後・・・

放課後俺は目が覚めると誰もいなかった。

貴大「たく……あいつら俺を放って帰りやがって……」

俺が帰り支度をし校門まで出ると不審な車にアリサとすずかが押し込められ走り去っていった。

貴大「クソ！」

犯人を追いかけようとしたその時、携帯が鳴った。

貴大「はい！こちら小日向ですが」

忍「貴大君！昨日捕まえた男だけど……」

貴大「仲間が居たんだろ」

忍「どうしてそれを！」

貴大「目の前で二人が攫われたからな」

忍「何ですって！」

貴大「今から追いかける！後からGPSで追いかけてきてくれ！」

そう言って俺は携帯を切り昨日教えてもらった念話でカマードゼクターに連絡を取る。

貴大《カマードゼクター今すぐ認識妨害と変身魔法をかけてくれ》

カマZ《分かった既にカマードエクステンダーは校門を出たところに置いてある》

貴大《サンキュー》

俺はすぐさまライダーベルトを装着しカマードゼクターに認識妨害と変身魔法をかけてもらいカマードエクステンダーに乗り追跡を始める。

アリサSide・・・

私とすずかは柱にロープで縛られている。

アリサ「あんた達どういうつもり！」

子分1「うるさいガキだなボス！ちょっと痛めつけて良いですか？」

ボス「そっちは辞めとけ大切な商品だ……だがもう片方の化け物なら構わんぞ」

（すずかの事を化け物ですってふざけるんじゃないわよ！）

アリサ「あんた達！ふざけるんじゃないわよ！」

そう私が叫ぶと同時に一台のバイクが外から突っ込んできた。

貴大Side・・・

俺がバイクで突っ込むとそこには犯人2人とロープで縛られたアリサとすずかが居た。

子分2・3「何事ですかボス！」

隣の部屋から二人の男が入ってくる。

（ふむ、仲間がいたのか……）

ボス「てめえ！何モンだ！」

（……ってお決まりの台詞だな……）

貴大「お前ら相手なら正義の味方で十分だろ」

ボス「正義の味方だと……オメェらやっちゃまえ！」

子分達「「ヘイ！」」

子分と思われる三人がこっちに向ってる。

（うわぁ……ベタ過ぎるだろ……）

一人目……突っ込んできた奴の腹を殴り腰を折らせた後、首に手刀をいれる。

二人目……今度は突っ込んできた奴を日取り足を軸に回る事で避け、そのままの勢いで回し蹴りを喰らわす。

三人目……銃を撃ってきたのでカマードゼクターに銃弾を弾かせ

てから一気に距離を詰めアップercutで吹っ飛ばす。

この間約30秒の出来事である。

ボス「ひいひいひい……」

後退る男。それに詰め寄ろうとするが一瞬の違和感を感じバックス
テップで回避すると一秒前に頭のあった場所は鋭い爪が通っていた。

？「ほう……あれを避けるか……」

声を発したのはチーターの頭を持ったイレギュラー……へチーター
イレギュラー（以後、チーター）だった。そのチーターは2体、
更にダミーを5体引き連れている。

恭也「大丈夫か！二人とも」恭也がやってくる。

貴大「グッドタイミングだぜ恭也」

恭也「お前貴大か？」

俺の正体に気付いたらしい。

貴大「ああそうだ、それより恭也、二人を頼んだぞ」

恭也「分かった」

そう言って恭也は二人を連れてその場を離れた。三人が離れたのを
確認した俺は。

貴大「行くぜ相棒！」

俺はカマードゼクターを手に取り。

カマZ「おうよ！」

貴大「変身！」

そのままライダーベルトに装着し。

『Henshin』

電子音が鳴りヒビロノカネの鎧を纏い俺は仮面ライダーカマード
へマスキドフォームへに変身した。

バトルSide・・・

カマードは腰の右側にあるブレイガンへガンモードへを手に取りダ
ミーを牽制しながら向って行き……。

カマード「はああ！」

カマードは即座にブレイガンをへブレイドモードへに切り替えダミ
ー2体を切り裂き消滅させる。

ダミー1「クソ！」

向かってきたダミーを回し蹴りで吹っ飛ばし、ブレイガンをへガン
モードへに切り替え残り2体にエネルギー弾を放ち倒し、後ろから
向かってきた最後の1体に後ろを見ずにエネルギー弾を放ち倒す。

カマード「後はお前達だけだぜ」

チーター1「貴様は何者だ！」

カマード「正義の……いや、俺は……仮面ライダーカマードだ！」

チーター2「カマード……貴様を倒す！」

そういった瞬間、2体のチーターは目にも留まらぬ速さで動き出す。

カマード「クロックアップ並みの速さか……厄介だな」

チーター達のあまりの速さにカマードは為す術なくダメージを受けていき転がってしまう。

カマード「くっ……あれを使うしかないか……」

そう言うとカマードは立ち上がり左手でカマードゼクターの角……へゼクターホーンを浮かせる。するとカマードを覆っていた銀色の装甲が浮き上がり……。

カマード「キャストオフ！」

カマードはゼクターホーンを反対側に倒す。

『Cast Off』

電子音が流れ銀色の装甲をパージし緑色の装甲が現れる。更にマンモスの牙のような状態になっている鎌のような角……カマードホーンが回転し定位置に止まると。

『Change mantis』

電子音と共に目が光り仮面ライダーカマードへライダーフォームへに変身が完了した。

カマード「クロックアップ！」

カマードがベルトの左側にあるスラップスイッチを押すと……。

『Clock Up』

電子音と共にカマードは姿を消した。

クロックアップSide・・・

時が止まったかのような空間に三つの影が交差する。

カマード「ふっ、はあ！」

カマードはチーターイレギュラーの攻撃を左手で防ぎ右手でカウンターを入れ、もう1体の攻撃を右手で受け流しながら背中に蹴りをいれる。

一回、二回、三回、通常の世界では一秒にも満たない攻防だが回数を重ねていくごとにボロボロになり高速戦闘が維持できなくなったチーターたちが通常空間へと戻ってくる。

『Clock Over』

チーターに合わせるようにカマードも戻ってくる。

カマード「そろそろ決めるぜ！ライダーチャージ」

カマードはブレイガンへブレイドモードのチャージレバーを引くと。

『R i d e r C h a r g e』

電子音と共にブレイガンにタキオン粒子が集まっていく。

カマード「はぁ！」

カマードはチーターの一体をブレイガンで切り裂く。

チーター2「グオオオオオ……！」

切り裂かれながらチーターは消滅した。

チーター1「き、貴様！」

向かってくるチーターイレギュラーを回し蹴りで吹っ飛ばし。カマードは三つあるフルスロットルスイッチを順番に押していく。

『o n e t w o t h r e e』

押し終わったカマードはゼクターホーンを一度元に戻し……。

カマード「ライダーキック！」

再びゼクターホーンを倒すと……。

『Rider Kick』

電子音が鳴り一度カマードホーンにタキオン粒子が流れ今度は右足に集中する。

チーター1「うおおおおお!!」

後ろから向かってきたチーターに……。

カマード「はあっ!」回し蹴りを喰らわす。

チーター1「こ、これが……カマードの……力……か」
チーターはそのまま消滅する。

カマード「ふう……これで終わったか……」

貴大は変身を解除し三人のもとへ向うのだった。

第二話 『誘拐事件と超高速戦闘／キャストオフ』 (後書き)

作者「後書きのコーナー!! ども、作者です」

貴大「何なんだこれは、主人公の貴大だ」

作者「いろんな小説を見てやってみたくなった」

貴大「パクリかよ!」

作者「まあ……それはともかく……この小説を3話も(初めにや設定を入れると五話)を呼んでいただきありがとうございます」

貴大「ご意見やご感想などがありましたら作者を育てると思って是非よろしくお願いします」

作者「次回からは無印に入る予定です」

貴大「予定かよ!」

二人「それではこの辺で」

貴大「……んでこの小説は続くのか?」

作者「俺の心やるぽがブロークンしない限りは」

貴大「オイオイ……」

第三話 『魔砲少女と不思議なフェレット』（前書き）

英語の部分を半角にしました。デバイスの英語部位分は間違ってる
かもしれませんので間違っていたらご指摘お願いします。

後、ライ様にご指摘を受け修正しました。こんな感じでどうでしょう
か？

あと台本書きは自分の文才ではキャラが分からなくなるのであえて
残しましたご了承ください。

それではどうぞ。

第三話 『魔砲少女と不思議なフェレット』

翌日・・・

俺は不思議な夢を見た、その夢は変な異形と少年が出てくる夢だった。何か分からないが嫌な予感がする。そう思いつつも起きない訳には行かないのでなのはを起こさないように起きつつ部屋を出た。

・・・

貴大「変な夢？」

なのは「そうなの、なんか変な怪物と男の子が出てくるの、貴大君はどう思う？」

（なのはも見たのか……なのはを危険にさらしたくないな……）

貴大「そんなもん詮夢だろ？ あんま気にするなよ」

なのは「うん……分かったの」

俺の答えに納得がいていないような顔をしたのはだった。

昼休み・・・

アリサ「ちよつといい？」

昼休みアリサとすずかがやってきた。

貴大「昼飯か？それなら……」

アリサ「昨日のことよ」

（また厄介なことになったな）

貴大「……すずか、なのはを頼むわ」

すずか「うん……わかった」

俺とアリサは人気のない場所に向った。

・・・

貴大「それで……何が聞きたいんだ？」

（メンドイから手短に済まそう）

アリサ「全部よ」

貴大「……時間がないから絞れ」

アリサ「……それじゃあ何であんたが大きくなったのかと、アンタが変身した緑色の奴は何？」

（なんか不満そうだな、てか俺の事ばっかだな……）

貴大「まず俺が大きくなったのは魔法という超科学のおかげだ」

アリサ「魔法？」

貴大「ああ……俺も一昨日知ったばかりなんだが……この世にはそんなもんがあるんだとさ」

アリサ「ふくん、でアンタが変身した緑色のは何よ？」

貴大「ありゃ……仮面ライダーカマードだ」

アリサ「仮面ライダーカマード？」

貴大「ああ、とある組織が開発したマスクドライダーシステムっていうのが正式名称だな」

アリサ「とある組織って何よ？」

貴大「悪いがそれは言えん」

（この世界にはない組織だしな）

アリサ「んで、何でアンタはすずかを置いてきたのよ？」

貴大「三人で離れたらなのはに感ずかれるじゃねーか、それにすずかは全部知ってるから改めて言う必要はない」

アリサ「アンタ、なのはに言う心算はないの？」

貴大「今のところはな、機会をみて話そうとは思ってる」

アリサ「そう……」

（なんかシメっぽくなったな……。）

貴大「さて！この話はこれで終わりだ！さっさといかないと昼休み終わっちゃうぞ！」

俺はなのはたちが待つ屋上へ向った。

アリサ「ちょっと待ちなさいよ！」

その後ろをアリサが追ってきた。

・・・

貴大「確かこの辺だったはずだが……。どうだカマードゼクター？」

俺は今、夢に出てきた怪物を搜索中だ。……と言ってもあまり手がかりは無い為適当に見回っているだけだが……。

カマZ「全く反応なしだぜ……。ただの夢じゃないのか？」

貴大「そうだと良いんだが……。なのはと同じ夢を見たってのが気になる」

そう……。俺だけの問題なら構わないのだが、なのはが絡むと別だ。

カマZ「お前もすっかりシスコンだな」なんだと……。

貴大「お前……」

シスコンの何処が悪い！」

シスコン最高！

カマZ「……言い切りやがったよコイツ」

呆れ気味だが構うもんか！シスコン最高！大事なことなので二回言いました。

数十分後・・・

貴大「収穫なしか……時間も時間だし切り上げるか……」

カマZ「そうだな」

こうして俺たちは切り上げる事にした。……まさかこの選択があんな結果になろうとは……。

夜・・・

なのはがいきなりフレットを飼いたいと言い出した。俺は嫌な予感しかしなかったが回りは賛成だったので押し切られる形になった。

貴大「！」

（この感覚……魔法か！）

カマZ「おい貴大！」

貴大「分かってる、行くぞ！」

カマZ「おう！」

俺たちは魔力を感知して飛び出した。

・
・
・

魔力を感知した場所に向かってみると夢に出てきた丸い異形とコスプレ？をしたなのはが対峙し異形がなのはに触手？を伸ばしていた。

貴大「あぶねえ！」

俺は咄嗟になのはに飛びつき抱きかかえながら転がるように回避する。

なのは「貴大君！」

なのはが驚いているように声をあげる。

貴大「大丈夫か？」

なのは「う、うん……でもなんでここに？」

貴大「魔力を感知してたらここにたどり着いた」

？「貴方は何者ですか？」

フェレットがしゃべっているが気にしない。

まずやらなければならない事がある。俺は異形と退治する。

貴大「……おいその丸いの、人の家族に手を出しやがって、叩き潰してやる！来い！カマードゼクター！」

カマZ「おうよ！」

カマードゼクターが俺の手に収まる。

貴大「変身！」

俺は予め巻いておいたライダーベルトにカマードゼクターを装着する。

『Henshin』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身した。

バトルSide・・・

カマード「行くぜ！」

カマードが丸い異形（以降、丸いの）に殴りかかるが柔らかい体にダメージはなかった。

カマード「なんだコイツ！」

カマZ「コイツは何らかの核を中心に魔力が集まってるだけだ、通常攻撃は聞かんぞ！」

カマード「それを先に言え！」

カマードがカマードゼクターに突っ込んでいる間に丸いのが触手を伸ばしカマードに絡まってきた。

カマード「うお！気持ち悪！」

カマードは触手を引き離すためにゼクターホーンを掴む。

カマード「なのは、伏せてろ！キャストオフ！」

カマードはなのはが伏せたのを確認するとゼクターホーンを反対側に倒す。

『Cast Off Change mantis』

装甲が弾けカマードは〈ライダーフォーム〉に変身完了した。

丸いの「Guooooooooo」

丸いのは核が装甲に当たり吹っ飛んだ。

カマード「これで決める！ライダーチャージ！」

カマードはブレイガン〈ガンモード〉のチャージレバーを引く。

『Rider Charge』

ブレイガンにエネルギーとタキオン粒子が集まっていく。

カマード「はあっ！」

カマードはチャージしたエネルギー弾を放ち丸いのに直撃する。

カマード「やったか？」

カマZ「いや、まだだ！」

核を破壊できなかったのか丸いのは再生を始めた。

カマード「なら直接ライダーキックを……」

カマードが構えようとした時。

なのは「リリカルマジカル！」

なのはが言葉を紡ぎ出した。

貴大Side……

なのは「リリカルマジカル！」

？「封印すべきは、忌まわしい器、ジュエルシード！」

なのは「ジュエルシード封印！」

杖『Sealing mode setup』

その言葉が聞こえた後なのはが持っていた杖は形が変わりピンクの光を出して丸いのを絡め取る。そして丸い額の……？と言う文字が浮かび上がる。

杖『stand by ready』

なのは「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル21。封印！」

杖『sealing』

杖から伸びた光が丸いのを貫き丸いのは消滅した。

？「これが……ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのはが核に杖……へレイジングハートで触れると。

『receipt number XXI』

丸いものの核……へジュエルシードへがレイジングハートに吸い込まれた。

貴大「……」

俺は変身を解除する。それと同時になのはの服も普通に戻った。

なのは「貴大君……」

不安げな表情でしゃべりかけてくる。

貴大「……とりあえず、この場を離れるぞ」

サイレンの音お聞き俺たちはこの場を離れた。

（公園）

さっきの場所を離れた俺たちはお互いのことについて話すことにした。

なのは「貴大君さっきのあれなんなの？」

貴大「あれは昔にも話したことがあるがマスクドライダーシステム……仮面ライダーカマードだ」

なのは「仮面ライダーカマード……」

貴大「ああ……俺は話したぞ次はなのはの番だ」

なのは「うん……あれは魔法って言うんだって」

(やっぱりか……)

？「う、ん」

どうやら元凶が目を覚ましたようだ。

なのは「あっ目を覚ましたの！」

？「こ、ここは……」

貴大「ここか海鳴公園だそれより……」

俺は元凶を掴み持ち上げ握り締める。

？「！……グッ……ハッ」

なのは「貴大君！」

なのはが慌ててるようだが気にしない。

貴大「俺はな……大切なものを傷付ける奴は許さない！……お前も例外じゃないぞ！」

俺は感情を殺し握る強さを強めながら言う。

カマZ「落ち着けバカ野郎！手がかりを持ってるのはそいつだけだぞ！」

貴大「ちっ！」

俺は渋々元凶から手を放す。

？「ゲホゲホ……」

貴大「今は生かしておいてやる……全てが終わったら覚悟しとけ！」

俺は感情を殺したまま言い放った。

なのはSide……

貴大「俺はな……大切な奴らを傷付ける奴は許さない！……お前も例外じゃないぞ！」

（貴大君がすごく怖いの……）

カマZ「落ち着けバカ野郎！手がかりを持ってるのはそいつだけだぞ！」

緑色のカマキリさんが喋ってるけど気にしてる場合じゃないの。

貴大「ちっ！」

貴大君は舌打ちをした後フェレットさんを下ろしました。

? 「ゲホゲホ……」

(咳き込んでる可哀想なの……)

貴大「今は生かしておいてやる……全てが終わったら覚悟しとけ！」

貴大君はそう言ったきりそっぽを向いてしまいました。

なのは「フェレットさん大丈夫？」

? 「はい……心配してくれてありがとうございます」

この後フェレットさん……ヘユーノ・スクライア君に色々お話を聞かせてもらったの。

ユーノ「なのはさん……」

なのは「どうしたのユーノ君？」

ユーノ「レイジングハートを返してくださいやっぱり僕一人で……」

貴大「ふざけんじゃねーぞ！」

そう言ってユーノ君の声を遮ったのは貴大君だったの。

貴大 side・・・

ユーノ「なのはさん……」

なのは「どうしたのユーノ君？」

ユーノ「レイジングハートを返してくださいやっぱり僕一人で……」

貴大「ふざけんじゃねーぞ！」

俺は元凶の戯言を遮った。

ユーノ「えっ？」

貴大「お前は今回の唯一の情報源だ！お前に拒否権はない！俺の大切な奴らを守るのを手伝え！」

折角の情報源だ、それにただで許す気はない。

ユーノ「良いんですか？」

貴大「……お前に拒否権はないと言ったはずだが？」

ユーノ「分かりました！よろしくお願いします！」

貴大「フン……、それでなのは……」

なのは「私も手伝うの！」

（やっぱりか……）

貴大「却下だ！」

なのは「関係ないの！それに貴大君は選択だけは自分でしろっていつも言ってるの！だから私は手伝う事を選ぶの！」

（決意の籠った目……流石に説得は無理か……）

貴大「しゃーないな……但し無茶はするなよ？」

なのは「うん！分かったの！」

こうして俺達の物語は幕を開けた。

・
・
・

なの・貴「「すいませんでしたー!!」」

帰って士郎さん、桃子さん、恭也の三人のお説教を喰らったのはま

た別の話……。。

第三話 『魔砲少女と不思議なフェレット』（後書き）

作者「どーも作者です！」

貴大「主人公の貴大だ」

作者「よ！ロリコン！」

貴大「ロリコンの……って違うわー！」

作者「シスコンの癖に」

貴大「シスコンではあるがロリコンではない！」

作者「マジかよー」

貴大「マジじゃ！ボケー！」

作者「はいはい」

貴大「コイツは！……まあいい。この作品を読んでいただきありがとうございます！ご意見や感想などがありましたら作者を育てると思って是非よろしくお願いします」

二人「それではこの辺で」

第四話 『狼男とジュエルシード』 (前書き)

今回は文字数が少なめです。

それではどうぞ

第四話 『狼男とジュエルシード』

帰った俺達に待ってたのは三人（士郎さん、桃子さん、恭也）のお説教だった。まさか……2時間も続くとはな、それでお説教の後俺たちは今後のことを話すために俺の部屋にいるのだが……。

貴大「何でお前はパジャマで俺のベットに入ってるんだなの？」

なのは「エヘヘ♪」

貴大「エヘヘ、じゃねーよ全く……んでジュエルシードって何なんだ？元凶」

ユーノ「ちょっとその呼び方は……」

貴大「うるさい……お前なんて元凶で十分だ」

そう俺はコイツ（ユーノ）を元凶と呼ぶ事にした。

ユーノ「ジュエルシードって言うのは……」

それから俺たちは元凶にジュエルシードや魔法の事を詳しく聞いた。正直カマードゼクターの説明は本質の10%にも満たなかったことが分かった。

なのは「貴大君……」

貴大「どうしたなの？」

なのは「眠いの……」

貴・ユ「「……」」

なのはの突拍子も無い台詞でその場がしらけ、今日のところは寝ることになった。

（神社境内）

なのは「ユーノ君、本当にここにあるの？」

ユーノ「うん、間違い無いよなのは」

貴大「本当か？元凶」

ユーノ「いい加減止めてくれないか？」

貴大「却下」

ユーノ「酷い……」

貴大「テメエの行いに比べりゃマシだ」

ユーノ「グッ……」

カマZ「目の前に目標がいるのに余裕だなお前ら」

カマードゼクターが指した先には狼の顔を持ったイレギュラー……
へウルフイレギュラー（以降、ウルフ）が立っていた。

ウルフ「G u u u u u u ……」

貴大「来るぞなのは！セットアップしろ！」

なのは「えーとどうやるんだっけ？」

（おいおい！）

ユーノ「使命をからはじまる起動パスワードを！」

なのは「そんなの覚えてないよ」

ウルフ「G A A A A A A A A A ! !」

戸惑っているなのはにウルフが襲い掛かる。

貴大「くそ！変身」手早くカマードゼクターを引っ掴みライダーベルトに装着する。

『H e n s h i n』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身した。

バトルSide・・・

カマードはなのはとウルフの間に立ちウルフの攻撃を受け止める。

カマード「ガッ！……なんてパワーだ……」

カマZ「奴はおそらくジュエルシードを取り込んでるぞ！」

カマード「!……厄介だな!」

カマードは腰の右側についているブレイガンの〈ガンモード〉を取りエネルギー弾を撃ち出してウルフを引き離す。

カマZ「どうする? 防ぐのは得策じゃないぞ」

カマード「それなら手早く攻める!」

カマードはゼクターホーンに手をかけ……。

カマード「キャストオフ!」

ゼクターホーンを反対側に倒す。

『Cast Off Change Mantis』

装甲が弾けカマードは〈ライダーフォーム〉に変身完了する。

カマード「行くぜ!」

ウルフ「G A A A A!」

カマードとウルフはお互い駆け出しカマードはブレイガン〈ブレイドモード〉を、ウルフは右腕をぶつけ合う。

カマード「はあ!」

ウルフ「G A A A A!」

一回、二回、三回……回数を重ねていくことにお互い傷つき合うがウルフは傷ついた箇所が瞬時に修復され、カマードはどんどん押され始める。

カマZ「どうする？このままじゃジリ貧だぜ」

カマード「分かってるよ……はっ！」

カマードは腹にダメージを負うが気にせずウルフを殴り飛ばし距離を開ける。

カマード「ハア……ハア……これで！」

カマードはフルスロットルスイッチを順番に押す。

『one two three』

カマードはそのままゼクターホーンを元に戻し……。

カマード「ライダー……キック！」

そのままゼクターホーンを反対側に倒す。

『Rider Kick』

電子音と共に一度カマードホーンにタキオン粒子が集まり今度は右足に集まる。

カマード「これで……決める！」

カマードはウルフに走り出しそのままの勢いで。

カマード「はああああっ!!」

飛び蹴りを喰らわす。

ウルフ「GUUUU!」

ウルフは耐え切れず大ダメージを負い転がる。

カマード「どうだ!」

カマZ「いやダメだ……」

ウルフは再び修復を始めるが……。

なのは「リリカルマジカル!」

なのはが呪文を唱え始めるのだった。

貴大Side・・・

なのは「リリカルマジカル!」

なのはが呪文を唱えているのを聞き俺は

(クソ……また……)

内心かなり悔しかった。自分だけでは何も出来ない……。

(結局はなのはに頼らなければならない、俺は……)

無力だ……)

カマZ Side・・・

なのはがジュエルシードを封印している時、貴大はずっと俯いてやる。

カマZ「おい……どうした？」

カマード「……」

貴大は返事をしない。

(聞こえてないだけか?)

貴大はかなり悔しそうだった。

(まあ……守りたい奴を危険に晒さなきゃいけないってのは正直きついだろうがな)

なんて考えているとどうやらジュエルシードの封印は終わったらしくなのはがこっちに近づいてきた。

なのは「終わったよ貴大君」

カマード「ああ……」

そう言って貴大が変身を解除した瞬間……かなりのダメージを負っ

ていたのだろう貴大は倒れた。

なのはSide・・・

今私は貴大君に膝枕をしている状態なの。

（とってもうれ・・・じゃなくてとっても心配なの・・・。）

あちこちに傷はあるし・・・右腕なんてパンパンに腫れてお腹には大きな痣が出来てたの。それに・・・。

貴大「俺は・・・俺は・・・」

なんて寝言を言いながらうなされているの・・・。

貴大Side・・・

気がつくと俺の頭の下に柔らかい物があつた。

（なんだ？）

俺は疑問に思い目を開けるとそこにはなのはの顔があつた。

なのは「やっと気付いたの！」

貴大「・・・俺は一体？」

カマZ「お前は変身を解除した途端に倒れたんだよ」

貴大「そうだったのか・・・」

（この程度で倒れるなんて情けない……）

なのは「貴大君……一人で頑張らないで……私もいるから」

貴大「……」

俺はなのはに言葉を返せなかった。

・
・
・

貴大「すいませんでしたー!!」

ボロボロで帰ってきた俺が再び三人の説教を受けたのは言うまでも無い。

第四話 『狼男とジュエルシード』（後書き）

作者「どうも！作者です！」

カマZ「貴大の代わりのカマードゼクターだぜ」

作者「それにしても大変な事になったよな」

カマZ「ああ……あんな貴大始めて見たぜ」

作者「うむ最初はこんなはずじゃなかったんだけどな……」

カマZ「オイオイ……」

作者「まあそれはともかく」

二人「遅くなりましたがライ様ご感想とアドバイスありがとうございます。」

「ご意見や感想などがありましたら是非お教えいただければ幸いです」

二人「それでは～また次回お会いしましょう！」

第五話 『悲劇の大樹と二人の決意』 (前書き)

短めですご了承ください。

第五話 『悲劇の大樹と二人の決意』

なのはSide・・・

三つ目のジュエルシードを封印してから数日、私たちは二つのジュエルシードを封印しましたが貴大君はずっと俯いています。今日は元気になってもらおうと思いお父さんがコーチをしているサッカーチーム・・・〈翠屋JFC〉の試合を見に来ていますが……。

貴大「……」

この通りずっと俯いて終始無言です。

すずか「貴大君……」

貴大「……」

なのは「貴大君……」

貴大「……」

アリサ「ちょっと!」

貴大「……何だ?」

貴大君はようやく気付いたようです。

アリサ「アンタのお父さんが呼んでるわよ」

貴大「……土郎さんが? ちょっと言ってくる」

そう言って貴大君はお父さんのところに行きました。

貴大 Side・・・

貴大「どうしたんだ士郎さん？」

士郎「すまないがレギュラーの子が怪我をしましてね……代わりに試合に出てくれないか？」

貴大「補欠は？」

士郎「なぜか全員調子が悪いらしくてね……」

（嘘だな……でもまあ……気晴らしには良いか……）

貴大「分かった、やるよ」

士郎「そうか助かるよ」

こうして俺はサッカーをやることになった。

・・・

結果は4－0でうちのチームが勝った。俺はあんまり活躍できなかったけどな。そして今は翠屋で打ち上げ？をしている最中。

アリサ「アンタいつまでそうしてんのよ？」

俺は今テーブルに頭をこすりつけ唸っている状態だ。

貴大「気が済むまで」

アリサ「邪魔よ!」

貴大「ひでえ」

(もう俺のハートがブロークンだぜ……。ハア……。調子が出ない、走ってこよう)

そう思い俺は立ち上がった

なのは「どうしたのいきなり?」

貴大「俺、走ってくるわ」

俺は山に向って走っていった。

カマZ Side・・・

俺は今、貴大を追って山の中にいる。

カマZ「おいおい……。こんな所に来てどうするつもりだ?」

貴大「別に……。何でも良いだろ……」

カマZ「よくねーよ……。お前まだ引きずってやがるのか?」

貴大「……」

カマZ「肯定と受け取るぞ……」

……ッたくコイツはいつまでも……。

カマZ「力が無いのがそんなに嫌か？」

貴大「ああ……」

カマZ「お前……なのはを巻き込むのがそんなに嫌か？」

貴大「当たり前だ……」

カマZ「じゃあ聞くがお前は今まで一人だったか？」

貴大「……！」

俺は貴大の勘違いを打ち砕く事にした。

貴大Side……

カマZ「じゃあ聞くがお前は今まで一人だったか？」

貴大「……！」

カマZ「お前は天道や加賀美と一緒にだったから守れてたんじゃねーか？」

貴大「……」

（確かにその通りだ……）

カマZ「お前は一人で出来るほど強かったかよ？」

(そうだ俺は……)

貴大「……そうだな、俺はいつも誰かに助けられてたな……忘れ
てたよ……俺みたいなのが一人で出来るなんて事考える自体おこが
ましい事だよな」

カマZ「ああ……そうだ」

貴大「俺自身の事を思い出したよありがとうカマードゼクター、俺
はかつこ悪くたって無力だって構わない……出来ることをやる事
をやれば良い、出来ない部分は助けてもらえば良い、俺はそういう
人間だったな」

カマZ「そういう事だ……ジュエルシードが発動しているみたいだ
からなとつと行こうぜ！」

貴大「おう！」

俺たちはジュエルシードのある方へ向った。

・
・
・

街についた俺が最初に目に付いたのは大きな木だった。

貴大「何だあれ？」

カマZ「あれが今回のジュエルシードみたいだぜ」

貴大「なのははどこだ？」

カマZ「なのはならあそこのビルの屋上だ！」

カマードゼクターが指した場所には確かになのはがいた。

貴大「カマードゼクター、行くぞ！」

カマZ「おう！」

俺はカマードゼクターを手に取り……。

貴大「変身！」

そのままライダーベルトに装着すると。

『Henshin』

電子音が流れ俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身する。

カマード「キャストオフ！」

俺はそのままゼクターホーンを掴み、反対側に倒す。

『Cast Off Change Mantis』

装甲が弾け俺は〈ライダーフォーム〉に変身し飛んできたカマードエクステンダーへエクスマードに乗る。

カマード「行くぞ！」

俺はそのままなのは元に向った。

なのはSide・・・

どうしよう……私のせいだ……私があの時気のせいだなんて思ったから……。

カマード「大丈夫か、なのは！」

なのは「貴大君！」

カマード「なのは、封印を頼む！俺は封印に邪魔な奴らを蹴散らす！」

貴大君はなんか吹っ切れたみたい、いつもみたいに私を助けてくれます。私も頑張らなきゃ！

なのは「うん！分かった！」

カマード「それじゃあ行くぜ！ライダーチャージ」

貴大君は腰の右側にあったブレイガンへガンモードをを持ってチャージレバーを引きます。

『Rider Charge』

電子音と共にブレイガンにエネルギーとタキオン粒子が集まってい

きます。

カマード「もう一回！ライダーチャージ」

貴大君は更にもう一回チャージレバーを引きます。

『R i d e r C h a r g e』

ブレイガンに更にエネルギーとタキシオン粒子が溜まっていき……。

カマード「これで！」

貴大君は引き金を引き、もう砲撃と言っても過言ではないくらいのエネルギー弾を放ち斜線上の根っこや枝を次々と消し飛ばしました。

カマード「後は任せたぜ！」

なのは「うん、分かったの！リリカルマジカル！」

私は呪文を唱えていき……。

なのは「ジュエルシード！シリアル10、封印！」

ジュエルシードに光が飛んでいき……。

レイ『S e a l i n g』

私たちはジュエルシードを封印しました。

貴大Side・・・

俺たちはお互い変身やバリアジャケットを解除し屋上でたたずんでいた。

なのは「いろいろな人に迷惑かけちゃったね……」

ユーノ「何言ってるんだ！なのはちゃんとやってくれてるよ」

なのは「私気付いていたんだ……あの子がジュエルシードを持っているのを、……でも気のせいだって思っちゃって。」

そう言っただのははうずくまった。

貴大「……誰だって間違いや失敗はする、俺だって間違えた」

なのは「えっ！」

貴大「大事なのはその後だ」

なのは「うん」

貴大「だから言う、俺は一人ではジュエルシードをどうにか出来そうにない……だからなのは……俺の大切なものを守るのを手伝ってくれないか？」

なのは「私決めたから自分の意志でジュエルシードを集めるってだからこちらこそよろしくお願いしますなの！」

俺たちはこうして互いに決意を固めた。

第五話 『悲劇の大樹と二人の決意』（後書き）

天「どうも作者です！」

貴大「どうも！吹っ切れた主人公、貴大だ！」

天「いやぁ良かった良かった」

貴大「全くだ」

天「一時はどうなるかと思ったが……」

貴大「一真が言ってたな、嘆いても何も変わらないって、だから俺は嘆くのを止めて出来ることをやる！まぁ俺自身も強くはなりたくないけどな」

天「安心しろお前は強くなれる」

貴大「じゃないと困るって……」

天「さて次は例の金髪の美少女が出て来る予定だ」

貴大「予定かよ！」

天「最後になりましたがライ様ご意見とご感想ありがとうございます！こんな感じで良いでしょうか？」

貴大「これからもこの小説を読んでアドバイスをいただけたら幸いです」

二人「それでは」

第六話 『獣人と金髪の少女』 (前書き)

多少強引かもしれませんがご了承ください。

それではどうぞ。

第六話 『獣人と金髪の少女』

俺達は今、月村邸でお茶会をしている。なのはたちは元凶をいじりながらおしゃべりをしている、それで俺はと言うと……。

貴大「フシャー！」

猫を威嚇していた……。

アリサ「やめんか！」

アリサが何処から出したのかハリセンでぶん殴って来る。

貴大「グブツ……何しやがる」

アリサ「アンタ！何、猫を威嚇してんのよ！」

貴大「悪いか！」

アリサ「悪いわよ！」

俺とアリサがケンカ（と言う名のスキンシップ）をしているといきなり肩を掴まれ振り向くとなのはが笑顔で

なのは「……あんまりそういう事しちゃだめなの」

……一瞬背筋に悪寒が走った。猫を威嚇したからか？……違うような気がする。と言うか最近寝るときになると危機を感じる、それなのはにいつてみると……。

なのは『何でそんな事言うのかな？』

と笑顔で言われた。その瞬間俺は怖くなって涙が出そうになってそれで……。

貴大『いや……何でもない忘れてくれ』

と言ってしまった。それ以来、夜だけでなく昼にも危機を感じるころがある。……どうすれば良いですかねえ？

なのは「……聞ってるの？ 貴大君」

貴大「すいませんでしたー！」

俺は今、土下座状態です。あっ他の二人の顔が引きつってる……。それから一時間は震えが止まりませんでした。

一時間後……

ようやく震えは止まり紅茶を飲んだとジュエルシードの気配がした。

ユーノ《貴大！ なのは！》

貴大《分かっている！ お前達は先に行け！》

ユ・な《分かった（の）》

念話を終えてまずは元凶がそれを追いかけるようになるのがジュエルシードへ向った。少ししてから俺は立ち上がる。

アリサ「どうしたのよ？」

貴大「あいつらが心配になったから様子見てくるわ」

すずか「いつてらっしゃい」

俺はなのは達を追うことにした。

・・・

そして現場に行ってみるとそこには気絶しているなのはと金髪の少女、それに様子がおかしい強大な猫がいた。

貴大「どういう事だこれは？」

ユーノ「それがなのははいきなり転んで気を失っちゃったみたいで……」

転んで気絶って……運動音痴恐るべし。

ユーノ「それからあの子が猫に攻撃したらあんな状態に……」

猫「G A A A A A A A A A ! ! ! ! !」

(……猫の目が赤色に輝いてやがる)

いきなり猫が光だし光が収まるとそこにはライオン頭のイレギュラー……
へライオンイレギュラー(以降、ライオン)が立っていた。

（厄介なことになったな）

なんて考えているといきなり金髪の少女が攻撃してきた。もちろんかわすが……。

貴大「かわいい顔してやることは過激だな」

？「かわ……／＼／＼それより邪魔をしないでください」

（邪魔してんのはそっちだと思うが……）

呆れながら言葉を飲み込み提案する。

貴大「ジュエルシードはくれてやる！……その代わりあいつを倒すのを手伝え！」

？「本気ですか？」

貴大「当たり前だ！残念ながら俺じゃあ封印できないんでね、このままだとあいつらにまで被害が及ぶ」

アリサやすずに手を出さす訳にはイカン。

？「……分かりました」

貴大「ん……それであんた名前は？」

？「フェイト……フェイト・テストロッサ、……貴方は？」

貴大「俺か……俺は小日向貴大だ、フェイトか良い名前だな」

フェイト「……ありがとう／＼／」

（何で顔が赤くなってんだ？……まあいいか）

貴大「んじゃ行くとしますか……来い！カマードゼクター！」

カマZ「おうよ！」

俺はカマードゼクターを掴み……。

貴大「変身！」

そのままライダーベルトへ装着する。

『H e n s h i n 』

電子音と共に俺は仮面ライダーカマードへ変身し……。

カマード「キャストオフ」

ゼクターホーンを反対側に倒し……。

『C a s t O f f C h a n g e M a n t i s 』

装甲が弾け俺は〈ライダーフォーム〉に変身した。

バトルSide……

ライオン「G A A A A ! ! !」

『Rider Kick』

タキオン粒子がカマードホーンに一度集まっていきその後下に流れ今度は右足に集まっていくな。そして迫ってきたライオンに……。

カマード「はあ！」

飛び回し蹴りを喰らわしライオンは大ダメージを受け、転がっていく。

カマード「いまだフェイト！」

フェイト「はい！バルディッシュ！」

バル『Sealing mode setup』

カマードは後のことをフェイトに任せることにした。

貴大Side……

カマード「いまだフェイト！」

フェイト「うん！バルディッシュ！」

バル『Sealing mode setup』

フェイトの杖……へバルディッシュの形が変わっていくそして。ライオンからジュエルシードが出てきて……。

フェイト「ロストログア……ジュエルシードシリアル14……封印

「！」

バル『Yes sir……Sealing』

フェイトとバルディッシュがそういうと空から光の雨がライオンに降り注ぎ。いつの間にかライオンは子猫に戻っていた。そしてフェイトはジュエルシードに近づいていき……バルディッシュを近づける。すると。

バル『Captured』

ジュエルシードはバルディッシュに吸い込まれていった。

貴大「終わったか」

俺は変身を解除しフェイトのほうへ向う。

フェイト「はい、ありがとうございました」

貴大「別に構わん、それと敬語じゃなくても良いぞ」

フェイト「それで……あの……」

貴大「ん？」

フェイト「貴方……貴大もジュエルシードを集めるの？」

貴大「そういうことになるな」

フェイト「そう……」

貴大「だが正直ジュエルシードなんてどうでも良いんだよ」

フエイト「え？」

貴大「俺は大切な奴らを守ればそれで良いからな、だから特にジュエルシードに興味はないからわざわざ奪う気も無い……まあ相手が悪人なら話は別だが……お前は悪人じゃないよな？」

フエイト「ち、ちがうよ！」

貴大「なら良い……んじゃ俺はコイツを連れて行かなきゃならないんでね」

俺はなのはを担ぎその場を後にした。

フェイトSide・・・

貴大『かわいい顔して……』

貴大『良い名前だ……』

貴大にまた会えるかな……

？「フェイトそんな顔して良いことでもあったのかい？」

フェイト「なんでもないよ■■■■」

？「そうかい？」

貴大ともっと色々お話したいな……

第六話 『獣人と金髪の少女』（後書き）

天「どうも作者です」

貴大「……どうも最近寝不足の主人公……貴大だ」

天「なのはとおさか……」

貴大「違うわ！　と言うかテメエなんでなのはをあんなふうにしやがった！」

天「ノリだ！」

貴大「テメ……」

天「あっなのはだ」

貴大「ぎゃーーーーーーー……」

貴大が逃走しました。

天「冗談なのに逃げちゃったよ……」

なのは「何の話をしてるのかな？」

天「うお！　びっくりした！」

なのは「失礼なの！……ところで最後のはなんなのかな？」

天「フラグだが？」

なのは「ちよつと頭冷やそうか……」

天「クロックアップ！」

なのは「逃がさないの！」

作者が逃走……なのはが追撃を始めました。

カマZ「……全員いなくなったらダメだろ……とりあえずなのはが
気絶した理由につきましては作者曰く『フェイトと共同戦線を張り
たいがフェイトがなのはを撃破したら難しいしライオンなら殺しか
ねないだろ？』と言う理由ですのでご了承ください」

貴大「ご意見やご感想がございましたらいただけると幸いです」

二人「それでは」

カマZ「戻ってきたか」

貴大「ああ……」

第七話

『ヤンデレ回避のために……貴大VSなのは』 (前書き)

それではどうぞ。

第七話 『ヤンデレ回避のために……』 貴大VSなのは』

突然だが俺は今なのはと対峙している。何故そんなことになったかと言うと数時間前までさかのぼる。

数時間前……

俺となのははアリサやすずかと昼食を取っていたのだが……。

貴大「このから揚げいただき」

俺はアリサのから揚げを強奪する。

アリサ「あ！ちょっと返さないよ！」

貴大「うん！無理！」

そういつて俺はから揚げを食べる。

アリサ「そっちがその気なら！」

そう言つてアリサは俺の玉子焼きを奪つて食べた。

貴大「あー！俺の玉子焼きがー！」

アリサ「あんたが悪いのよ！」

こうして俺達はいつもどおりケンカ（と言う名のスキンシップ）を始めようとした時。

なのは「……いい加減やめてくれないかな？」

二人「「ビクッ」」

すずか「なのはちゃん……」

なのは「すずかちゃんもだよ……貴大君の事ばかりずっと見て……」

貴大「おいなのは！お前ちょっとおかしいぞ！」

なのは「おかしいのは貴大君だよ！何で他の女の子ばかり見てるの！」

これは流石にまずい……。

貴大「……なのは話がある……ちょっとついて来い」

アリサ「ちょっと！」

貴大「悪いアリサ……適当にごまかしておいてくれ」

アリサ「わかったわよ……」

海鳴公園……

俺はなのはを連れて海鳴公園についた。移動中元凶……いやユーノに念話で連絡を取って来て貰っていた。

なのは「ねえ？貴大君どうして私だけを見てくれないの？」

貴大「そんなもん無理な相談だ」

なのは「……そうならちよつと頭冷やそうか……レイジングハート
セットアップ……」

レイ『……stand by ready setup』

なのははレイジングハートを起動させた。

なのはSide・・・

なのは「ねえ？ 貴大君どうして私だけを見てくれないの？」

貴大「そんなもん無理な相談だ」

見てくれないんだ……それじゃあ……。

なのは「……そうならちよつと頭冷やそうか……レイジングハート
セットアップ……」

動けなくすれば、誰とも会わなければ見てくれるようになるよね……。

レイ『……stand by ready setup』

貴大「まずい！ ユーノ、結界を頼む！」

ユーノ「！分かった！」

ユーノ君が結界を張ったけど関係ないの。

なのは「デイバイン……」

レイ『バスター』

私のはなった光が貴大君を包み込む……これで……。

『Henshin』

なのは「!」

煙が晴れ現れたのは変身した貴大君（仮面ライダーカマードへマスクドフォーム）でした。

ユーノSide・・・

なのは「デイバイン……」

レイ『バスター』

なのはのはなった光が貴大を包み込む……まさか……。

『Henshin』

なのは「!」

カマード「たくっ……ここまでやるか普通？」

煙が晴れ現れたのは貴大が変身した仮面ライダーカマードへマスクドフォームだった

なのは「な、なんで？」

なのははかなり驚いていた。

貴大「何でかって？そんなもん決まってる……お前にお仕置きするためだよ！」

なのは「う……う、うわーーーーー」

なのはは狂ったように魔法弾を撃ちまくる。貴大はそれを避けたり右腰にあるブレイガン（ガンモード）を手にとって撃ち落としたり。

貴大「キリが無いな……カマードゼクター、あれを試す」

（あれってなんだろう？）

そう考えているうちに貴大はエネルギー弾をなのはに向けて撃ちなのはは直撃し墜落していった。

貴大「おっとあぶねー」

貴大は走り出し墜落したなのはをキャッチした。

貴大Side……

貴大「おっとあぶねー」

俺は走り出し墜落したなのはをキャッチした。

ユーノ「さっきはなのはに何をしたの？」

貴大「ああ……あれは魔法弾を当てただけだ」

ユーノ「そんなこと出来たんだ！」

貴大「ああ……正直話だけしか聞いてなかったからやったの初めて
だけど……」

と俺たちの声でなのはは目を覚ましたようだ。俺はなのはを下ろす
と俺は変身を解除した。

なのは「わ、私……私……」

貴大「とりあえず落ち着け……んで何でこうなった？」

俺はなのはの頭を撫でながら訊いた。

なのは「私怖かったの……貴大君がいなくなるんじゃないかって……」

俺は震えているなのはを抱きしめ言う。

貴大「大丈夫だ俺は絶対にいなくなるらない」

なのは「ほんとに？」

貴大「ああ……」

なのは「グスっ……」

この後なのはは1時間は泣いていた。

翌日・・・

貴大「なのは動きにくいから離れてくれ……」

なのは「嫌なの♪」

あの事件以来なのはは四六時中くっついてくるようになりました。

第七話 『ヤンデレ回避のために……』貴大VSなのは』（後書き）

天「任務完了……どうも作者です！」

貴「やったのは俺だけだな！どうも貴大です」

天「いやあ、良かった良かった」

貴「良いのかあれで？」

天「良いんじゃない？」

天「ライ様感想ありがとうございます、そして矯正完了しました
がいかがだったでしょうか？」

貴「ご意見やご感想がありましたら言ってください」

二人「それでは」

第八話 『犬女と海鳴温泉』 (前書き)

今回もかなり強引です

それではどうぞ。

第八話 『犬女と海鳴温泉』

俺達は高町家と月村家＋アリサで旅行に出かけ現在は車の中だ。行き先は海鳴温泉なのだが……。

貴大「なんでお前は俺の膝の上に乗ってんだ？なのは」

そう、実はなのはが俺の膝に乗ってたりする。

なのは「特等席なの♪」

貴大「理由になってないし」

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんと三人で決めたの」

貴大「俺の意志は？」

なのは「関係ないの♪」

貴大「ひどっ！」

俺は車内でずっとなのはの椅子だった。

海鳴温泉……

なのは「貴大君！お風呂一緒にしろ！」

貴大「断る！」

なのは「却下なの！」

貴大「それを却下だ！」

なのは「許さないの」

貴大「更に拒否する！」

なのは「絶対認めないの！」

貴大「I Can Hly！」

俺はなのはから逃げるためだけにユーノを引っ掴み（理由はなんとなく）窓から飛び降りた。後ろから何か聞こえるが気にしない気にしない。

・・・

その後俺はロビーに靴をとりに行き、現在温泉街を散策中です。

ユーノ《逃げてきてよかったの？》

貴大《ならお前はあの場に留まったほうが良かったか？》

ユーノ《ごめんもう何も言わない……》

俺達が温泉街を散策していると……。

？「ここにもないなあ……」

茂みの方から声が聞こえた。

ユーノ《どうしたんだろ?》

貴大《訊いてみるか……》

ユーノ《そうだね》

貴大「おーい、どうかしたのか?」

俺が声をかけるとその声の主はフェイトだった。

フェイト「あっ!」

ユーノ「な、君は……ギニユっ」

俺は喋りだしたユーノを即座に握る。

貴大《人が多いのにしゃべんじゃねーよ! バカ野郎!》

ユーノ《ごめん、分かったから手を放して苦しい……》

見るとユーノは落ちる寸前だった。

貴大《あっ、わりい》

俺はユーノから手を放した。

貴大「んでお前の探し物はジュエルシードか?」

フェイト「！」

(やっぱりか……)

ユーノ《ボクはなのはに知らせてくるよ!》

貴大《好きにしろ》

そういうとユーノは一目散に走っていった。

貴大「はぁ……あいつも忙しい奴だな……」

フェイト「貴大……」

貴大「心配すんな俺はお前らが殺し合いを始めない限り戦わないさ……もちろん一方的な殺戮とかもダメだぞ」

フェイト「そんなことしないよ……」

貴大「なら良い……手伝おうか？」

フェイト「……いいや」

貴大「……そうか、んじゃ俺は戻って温泉にでも入るかね」

フェイト「じゃあね貴大」

貴大「おう……またなフェイト」

そう言って俺はその場を去った。

フェイトSide・・・

時間はもう夜……私はジュエルシードを回収しました。
？「やっぱり見事な手際だなフェイト」

私は驚いて振り向くとそこには貴大が立っていました。

貴大Side・・・

俺は夜の散歩をしていると突然

カマZ「おい！貴大この近くにジュエルシードがあるぜ！」

貴大「どこだ？案内しろ」

カマZ「こっちだ！」

俺はカマードゼクターについていくとそこにはフェイトが居てしかもジュエルシードの封印の真っ最中だった。

貴大「なんだフェイトがいるじゃねーか」

カマZ「良いのかよ？」

貴大「構わんが……イレギュラーがきても厄介だな待機しとくか……」

カマZ「了解だ」

フェイトが封印し終わり……。

貴大「やっぱり見事な手際だなフェイト」

俺が声をかけたら……。

？「！アンタ何者だい！」

ワン公（嗅覚で判断）に睨まりました。

フェイト「アルフ彼は……」

アルフ「ダメだよフェイト！コイツは人間じゃない！」

ほう……俺の正体を見破るとはさすが犬だ。

貴大「さすがワン公……においで分かるのか？」

アルフ「あたしは狼だよ！」

カマZ「コイツは使い魔だぞ」

ふ～ん使い魔ねえ……。

貴大「ふ～ん」

カマZ「興味なさそうだな」

貴大「無いな」

アルフ「それでアンタ！何者だい？」

最初に戻るのかよ……。

貴大「俺は小日向貴大だ！それで良いだろ……」

アルフ「良いわけないだろ！」

警戒心バリバリだな……。ここは……。

貴大「ガタガタうるせえな……。消すぞワン公……」

俺は感情を込めずに言い放つ。

フェ・アル「！」

貴大「なんてな……。俺はフェイトと話がしたいだけの唯のガキさ……」

フェイト「貴大……／＼／」

（フェイトは何で顔が赤くなってんだ？）

なのは「あゝ貴大君！その子誰！」

ん？どうやらなのは達も来てしまったらしい。

貴大「彼女はフェイト・テストロッサだ」

フェイト「……貴大その子誰？」

貴大「……コイツは俺の家族のなのはだ」

家族の時になのはに睨まれたが気にしない。

なのは「貴大君……フェイトちゃんと何してたの?」

貴大「いや別にな……」

アルフ「こいつはフェイトを襲おうとしてたんだよ!」

貴大「何言っちゃてんのお前? つーか俺は何もしていない」

嫌がらせのつもりかコイツ……。

な・ユ「……」

何疑いの眼差しで見ちゃってんの!

貴大「大体お前ら、コイツと俺どっちの言葉を信じるんだ?」

ユーノ「それは……」

こら! ユーノ目をそらすな!

なのは「襲うなら私を襲ってくれば良いのに……」

えっ何言ってるのお前?

フェイト「別に私は襲われても……」

第八話 『犬女と海鳴温泉』 (後書き)

天「どうも作者の天です」

貴大「カオスはもうヤダ……主人公の貴大だ……それ使うんだな」

天「ああ……こっちの方が使いやすいからな」

貴大「つーかなんだあのカオスは！」

天「ノリに決まってんだろ！」

貴大「『決まってんだろ！』じゃねー！ー！ー！」

天「俺くれましたがライ様ご感想ありがとうございます。」

貴大「無視すんな！……ご意見やご感想などがありましたらいただけると幸いです」

二人「それでは」

第九話 『眩くなのはと暴走するジュエルシード』 (前書き)

今回は台本書きではありません。

それではどうぞ。

第九話 『眩くのはと暴走するジュエルシード』

俺が寝ているとアリサに叩き起こされて……。

「ちょっと！あれを何とかしなさいよ！」

と言われた。アリサが指を指してる方を見ると……。

「ブツブツブツブツブツブツブツ……」

何かを呟いているのはが居た。えっ何あれ？

「無理」

「無理とか言ってんじゃないわよ！」

無理だって……あれ怖いもん。

「……こないだみたいにならないよね」

（すずか……。流石にそれはないだろ……。多分。……。まあ放置しておくわけにも行かないから何とかするか……）

俺は席を立ちなのはの前に立った。

「おいなのは……。考え事は良いが思考がダダ漏れなのは感心しないな」

つかプレゼント作戦って何だよ。

「あれ貴大君? ……もしかして襲ってくれるとか!」

ナニイツテンノコノコ? ……全員の視線が痛い……爆発まで3……
2……1……。

「小日向!」

やっぱりかー! しかし俺は周りが(特に男子)が暴徒と化す前に俺は自由への逃走をはかる。

「I Can Fly!」

俺はそのまま教室の窓から飛び降りる! その現場を先生に見られ大惨事になりました……。もちろん後でなのはとOHANASIはしましたよ。

夜……

俺は只今結界の中にいますそして目の前にはギンギンに光っている。ジュエルシードが完全に暴走しておりますな……。あっ二つの光がジュエルシードに当たった。光の色から言っただけなのはとフェイトか……。そして何度も二つの光が交差している……。戦ってるのか? 間隔を広げて音声拾ってみよう。

「フェイトちゃん! 話し合っただけじゃ……。言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど! だけど話さないと……。言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ! 奪い合ったり競い合ったりするのは仕方ないのかもしれないけど……。だけど何も分からないままぶつかり合うのは……。私嫌だ!」

これはなののか？

「私がジュエルシードを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから……ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で……ユーノ君はそれを元通り集めなおさないといけないから……私はそのお手伝いでだけど……お手伝いをするようになったのは偶然だけど……今は自分の意志でジュエルシードを集めてる……自分の大切な人たちに危険が降りかかったら嫌だから……これが私の理由！」

（なのは……お前は……）

「私は……」

「フェイト答えなくて良い！」

（この……ワン公！）

「優しくしてくれる人たちの……」

「黙れワン公！」

全員が驚いたように俺を見るが気にしない。

「これはなのとはフェイトのぶつかり合いだ！俺やユーノ……ましてやテメエが水を差して良い問題じゃねーんだよ！それでも手を出すってんなら俺はお前を潰す！」

俺はそう言ってワン公を睨み付ける。

「上等だよ！やれるもんならやってみな！」

ワン公が仕掛けてくるが俺はそれをかわす。かわす、かわす、かわす、それを何回も繰り返す。一回も当たってやらない、一度もかすってやらない。そうしているうちにワン公の攻撃が大振りになっていく。そろそろか……。。

「くそ！いい加減に！」

ワン公に大きな隙ができる……。それを見逃さない、見逃してやらない。俺はキツイのを一発ワン公に叩き込んでやる。

「なっ！ガッ……」

叩き込まれたワン公は崩れ落ちる。

「アルフ！」

「フェイト！アタシはいいから早くジュエルシードを！」

「う……うん！」

ワン公の声を聞きフェイトはジュエルシードに向っていった。

「なのは！早くジュエルシードを！」

「うん！わかった」

今度はなのはがユーノの声を聞きジュエルシードに向っていく。……その結果は同時。両者のデバイスはヒビが入りジュエルシードは

光を放ち二人を吹き飛ばした。そしてフェイトはすぐに体制を立て直しジュエルシードに向っていくが……俺の本能が警報を鳴らす……あれはマズイと……。

「来い！カマードゼクター！」

「おう！」

俺はカマードゼクターを手に取り……。

「変身！」

そのままライダーベルトに装着する。

『H e n s h i n』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身し更に……。

「キャストオフ」

俺はゼクターホーンを反対側に倒す。

『C a s t O f f C h a n g e M a n t i s』

装甲が弾け飛び俺はへライダーフォームへに変身した。

「間に合え！クロックアップ」

俺は腰の左側にあるスラップスイッチを押す。

『Clock Up』

俺は時間が止まったかのような空間に入り込みジュエルシードまで走り右手で掴み取る。

『Clock Over』

時間が元に戻りジュエルシードを掴んでいる俺を見たフェイトは驚いているが……。

「ぐっがががが……」

どうやらこの状態でもキツイ……。

「大丈夫か！」

「グッ大丈夫だ……それより魔力を流し込んで抑えるぞ！」

「分かった！」

俺はカマードゼクターに魔力を制御してもらいジュエルシードに魔力を流し込む……。しばらく流し込んでいるとジュエルシードの暴走が止まったようだ……。

「貴大……」

フェイトが心配そうに近づいてきた。

「はぁ……ほらよ」

俺はフェイトにジュエルシールドを投げ渡す。

「どうして……？」

「俺は今体力も魔力も無いから……攻撃されたらひとたまりも無いからだ……分かったか？」

「うん……ありがとう」

そう言いながらフェイトは去っていった。

・
・
・

「何やってんだ？」

俺は今部屋の前で扉を開けたところなのだが……。

「あっ貴大君！」

何と部屋にはリボンを巻いたのはがいた。

「貴大君にプレゼントなの！」

「返品は？」

「却下なの！」

俺のカオスは続く・・・。

第九話 『眩くなのはと暴走するジュエルシード』（後書き）

天「どーも、作者の天です！」

貴大「どーも、手がかなり痛い……主人公の貴大だ！」

天「今回は指摘されていた台本書きを変えてみましたがどうだったでしょうか？ご意見をいただけると幸いです」

貴大「でもここは台本書きなんだな」

天「まあ……後書きだしね」

貴大「それにしてもワン公はウザイな」

天「因みに貴大の『黙れワン公！』は作者が原作を見た時の感想でした」

貴大「作者は素人なので誤字や脱字、変な表現があるかもしれないそんなのは〇〇は××だと言う風に指摘していただけると幸いです」

天「ご指摘や感想をいただけると幸いです」

二人「それでは」

第十話 『黒い三人目と時空管理局』 (前書き)

内容が荒いかもしれませんが。

それではどうぞ

第十話 『黒い三人目と時空管理局』

突然だが俺は仮面ライダーカマードへライダーフォームへに変身してなのはとフェイトと共闘中だ。何故そうなっているのかと言うとジュエルシードを取り込んだ樹が予想以上に手強いので俺はフェイトに共闘を持ちかけた。フェイトは満面の笑みで、ワン公と何故かなのはは渋々了承してくれて今に至り……。

「打ち抜いて、ディバイン……」

『バスター』

なのはのレイジングハートのディバインバスターが……。

「貫け豪雷……」

『サンダースマッシュャー』

フェイトのバルディッシュのサンダースマッシュャーが……。

「ライダーチャージ！」

『R i d e r C h a r g e』

「はぁ！」

俺のブレイガンへガンモードへのライダーチャージが……。

ジュエルシードを取り込んだ樹を貫きジュエルシードが飛び出てき

た。

『『Sealing mode set up』』

レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードを封印するために姿を変える。

「ジュエルシードシリアル7！」

「封印！」

なのはとフェイトの言葉でジュエルシードは光を放ち封印される。そして……二人は構えをとる。

「ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ……」

「うん……昨夜みたいな事になったら私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

「だけど……譲れないから……ジュエルシードも貴大も……」

ん？あれ……？これなんか見たことある気が……。

「私はフェイトちゃんとOHANASIしたいだけなんだけどな……でも譲れないジュエルシードも貴大君も！」

はい、そうですね……温泉旅行の再来ですよ……帰って良いですか？えっ！ダメ？そんな殺生な！空にいる二人は俺が打ちひしがれているのにも構わずぶつかり合う

……はずだった。

「ストップだ！」

それは一人の少年によって阻止された。

「ここでの戦闘は危険すぎる」

俺は有事に備え。

《カマードゼクター……ブレイガンを魔力モードに切り替えろ》

《……了解だ》

ひそかに臨戦態勢をとっていた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ話を聞かせてもらおうか！」

（時空管理局……ん？なんかフェイトたちは捕まりたくなさそうだな……それなら）

「お前ら！離れろ！」

俺の声を聞いたのはとフェイトが離れたのを確認すると俺は右手のブレイガンでクロノとかいう奴を魔力弾で狙い打つ。

「な！」

いきなりのことに動揺したのか魔力弾はクロノに直撃する。その隙にフェイトとワン公に手で『さっさと行け』と合図を送るとその意図を読み取ったのか二人は去っていった。

「いきなり何をするんだ！」

「いきなりポツと出てきた奴を信用するほど俺はお人よしではないんでね。まだあのワン公のほうが1.1倍は信用できる」

「それってあんまり変わらないよね！」

うんユーノ、ナイス突っ込みだ！

「さっきも言っただろ！僕は時空管理局の……」

「そんな組織俺は知らん……。これ以上騒ぐならそれ相応の処置をさせてもらうが？」

俺は挑発するように言う。

「ぐっ！お前……」

「やめなさいクロノ」

いきなり空中にモニターが現れ、俺に食ってかかるようなクロノを緑の髪の女性が止める。

「……アンタは？」

「私は時空管理局所属アースラ艦長リンディ・ハラオウンです、事情を伺いたいでアースラまでお越しただけじゃないでしょうか？」

「……良いだろう」

「それじゃあクロノ……お連れして」

「はい……」

こうして俺達はアースラへ転送された。

「アースラ」

俺達はアースラに到着し……。

「君達、バリアジャケットとデバイスを解除して良いぞ」

とクロノが言うので……。

「は、はい」

「……」

なのはと俺はそれぞれの反応をしたのははバリアジャケットとデバイスを、俺は変身を解除した。

「！君は……」

クロノは驚いている……。まあ理由は大体検討が付くが……。

「ん？どうした？」

俺はクロノにニヤリとしながら問う。すると……。

「い、いや……なんでもない。そ、それより君は元の姿に戻っても良いんじゃないか？」

……ユーノでごまかしたな。

「あ！　そういえばそうですね、ずっとこの姿でいたから忘れてました」

そういったユーノは突然光だし俺と同年ぐらいの少年になる。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな、それと貴大には初めてだよ」

「ああ、そうだな」

ユーノと俺は口々に言うがなのはの様子がおかしい……。すると突然。

「……ふ、ふえええ………！！！」

なのはの絶叫しその声は艦内に響いた。

「な、なのは？」

「おいおい………どうしたんだよ」

俺達は驚きを隠せない。

「ユーノ君って、ユーノ君って、その、あの……なに！　え……と、だって、嘘、ふえええ………」

慌てふためくなのは

「君達の間に関が見解の相違でも？」

どうもそうらしいな。俺は静観していよう。

「えーっとなのは……僕たちが最初に出会ったときって僕はこの姿じゃ……」

「違う違う！最初っからフェレットだったよ」

「……あーそうだった、そうだったごめんごめんこの姿は見せてなかった……」

「だよねだよねそうだよね……ビックリした」

「その……ちょっと良いか？」

漫才（俺から見れば）をしていたのはとユーノをクロノが止める。

「ああ……スマンスマン……問題は解決した、さあ……行こうか」

「ああ……」

こうして俺達はリンディさんの待つ部屋へ向った。

・・・

「艦長……来て貰いました」

扉を抜けるとそこは……和室？（じゃないような気がする）だった。

「まあお疲れ様、3人ともどうぞどうぞ楽にして」

その後俺達はリンディさんとクロノに（ユーノが）事情を説明した。

「そうですか……あのロストロギア……ジュエルシードを発掘したのはあなただったのですね」

「それで僕が回収しようと……」

「立派だわ……」

リンディさんが褒め……。

「けど同時に無謀でもある！」

クロノが無謀だと言い……。

「同意だな……」

俺がそれに同意する……。

「あの……ロストロギアってなんですか？」

なのはが疑問を口にする。

「ああ、異質世界の遺産……って言っても分からないわね……」

それからリンディさんはロストロギアについて説明を始めた。

・・・

そして説明が終わり……。

「これよりロストログア……ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界で元どろりに暮らすと言い」

「でも……そんな……」

なのはが何か言いたそうだが……。

「次元干渉にかかわる事件だ、民間人に介入してもらえるレベルの話じゃない」

クロノがきっぱりと言い放つ。

「でも……」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう……今夜一晩ゆっくり考えて……」

「その必要はねーな……」

俺はリンディさんの言葉を遮る。

「どういふことかしら？」

「アンタ等の……いや、アンタの考えは大体見えてる……アンタは戦力が欲しいはずだ」

「何を根拠に……」

リンディさんの顔が歪んだ……あたりか……

「まず一つ目は最初の時だ……戦力が充実しているなら俺達やあい
つらの事も分かっていない状態で一人で来るなんてしない、普通は
正体不明の存在に対してはある程度の戦力で対応するはずだ……」

「……」

だんまりかよリンディさん……。

「そして二つ目だがもし戦力が充実しているのなら俺達と話し合い
なんてせずそちらで勝手に動けば良い、なんせ民間人が介入できな
いレベルなんだからな！さて……弁解はあるかな？」

俺はニヤリとする。するとリンディさんが……。

「……何が言いたいのかしら？」

「取引をしないか？」

俺の言葉にリンディさんは

「取引？」

と聞き返す。

「簡単に言えば条件を飲めば協力してやるって事だよ」

「な、何を……」

クロノは食って掛かろうとするが……。

「やめなさい……クロノ執務官……それで条件は？」

リンディさんはクロノを止めて聞いてくる。

「……条件一つ目は俺達是对等である事、二つ目はあいつ等（フェイトとワン公）は俺達に任せてもらう事、最後はこれは出来たらで良いがデバイスが欲しい」

「最後の条件は理由を聞いて良いかしら？」

「ああ……今まで人間相手でもあれを使ってたが……、人間相手だとあれはかなりやり難いんでな」

「分かりました……条件を飲みましょう」

こうして俺達と時空管理局の初の接触は終わりを告げた。

第十話 『黒い三人目と時空管理局』（後書き）

天「どーも作者です」

カマZ「どーもカマードゼクターだ、あいつ何処言ったんだ？」

天「知らん」

カマZ「まあ良いか……ライ様ご感想をいただきありがとうございます
ます今後もこの作品を読んでいただき感想などをいただけると幸いです」

天「他の読者様に関しまして感想やご意見をいただけると幸いです」

二人「それでは」

カマZ「ところでクロノは何で驚いたんだ？」

天「変身時と通常時の身長差だ」

第十一話

『無茶するフェイトと謎の影』

(前書き)

いつも道理グダグダかもしれません。

それではどうぞ。

第十一話 『無茶するフェイトと謎の影』

初めての接触の後俺達はアースラに滞在する事になって数日が過ぎた。因みに俺のデバイスは随時製作中である。順調にジュエルシードを集め現在残るジュエルシードは六つとなったのだが……。

「何があった!」

俺は今警報が鳴ったのでブリッジに来ていた……。アースラの通信主任であるエイミィさんの話ではフェイトが残り六つのジュエルシードを強制発動させたのだ……。

「すぐに助けに行かないと……」

なのはそう言って走り出そうとするが……。

「その必要は無い、放っておけばあの子は自滅する……仮に自滅しなかったとしても力を使い果たしたところを叩けば良い」

なのはを止め、そうクロノが言い放つ。

「確かに……組織としては正しいだろうな……」

「貴大君!」

「……しかし!俺達は組織としてではなく……人として動く!行くぞ!なのは、ユーノ!」

「「うん!」」

「待ちたまえ君達！」

「俺達是对等だ……それを破れば敵対する事になるが？」

そう、俺はあの取引の後に条件を破れば敵対すると言う事をねじ込んだのだ。

「分かりました、しかし一つだけ言っておきます」

「……なんだ？」

「必ず無事で帰ってくる事良いわね？」

「……了解した」

俺達は転送装置でフェイトたちの元に向った。

・・・

「レイジングハート！セットアップ！」

『stand by ready set up』

なのははバリアジャケットを纏い……。

「変身！キャストオフ！」

『Henshin Cast Off Change Mantis』

俺は一気に変身とキャストオフをし仮面ライダーカマードヘライダーフォームに変身した。

なのはとユーノは飛行魔法で俺は飛んできたカマードエクステンダーへエクスマードに乗りフェイトの元に急いだ……。そしてフェイトたちの下へたどり着いた。

「貴大！」

「あんた達！何しにきたんだい！」

ワン公が吠えているが気にしない。

「フェイト助けに来たぞ」

「ほんとに？」

「この状況で嘘をつく意味が分からん……。それよりなのは！お前はフェイトと共にジュエルシードの封印をしろ」

「分かったの！」

なのはの返事を聞き俺は続ける。

「ユーノとワン公は俺と共に二人を援護しろ」

「分かった」

「……しょうがないからやってやるよ！」

ユーノとワン公は二人を援護する体制に入る。

「フェイトちゃん二人でキッチリ半分こしよう！」

「……分かった」

ユーノとワン公はチェーンバインドで竜巻の動きを止め俺はそれでも止まらない奴をライダーキックで弾き返す。そして……。

「ディバイン……バスター！」

「サンダー……レイジ！」

二人の魔法によりジュエルシールドは全て封印された。

「フェイトちゃん……私分かったの、私はフェイトちゃんとお友達になりたいって……」

「……」

これで全てが終わったと思ったが……。

「そこまでだ！」

いきなりクロノが現れた。

「……管理局」

「やっぱりあんた達あたし達を……」

ワン公の言葉を遮ったのは俺のクロノに対する右手に持ったブレイガンへガンモードでの威嚇射撃だった。

「どういふつもりだ！」

クロノが吠えるが……。

「それはこっちの台詞だ……こいつらの事は俺達に任せるって約束だったはずだが？」

「そ、それは……」

「つまりこれは俺達と敵対するって考えて良いのか？」

「どういふことだい？」

ワン公の疑問に俺が答えることにする。

「つまりは今は味方でいてやるが何かあったら敵になるぞって事だよ」

俺とクロノはそのまま睨み合うがそう長くは続かなかった。その理由はアースラとこの空域に突如何者かの雷みたいな攻撃があったからだ。その一つはワン公の直撃コース。

「かわせ！ワン公！」

「！」

俺はワン公に直撃する雷に向かっていきフルスロットルスイッチを順番に押していく。

『one two three』

一度ゼクターホーンを戻し……。

「ライダーキック！」

そのまま反対側へ倒す。

『Rider Kick』

タキオン粒子が一度カマードホーンに溜まりそのまま下に流れていき今度は右足に溜まる。

「はあああああっ！」

俺はそのまま雷に向かって飛び回し蹴りを当てるが……。

「うおわ！」

何とか相殺できたがその反動は凄まじく体制を崩し墜落してしまう。

「フェイトちゃん！」

なのはの声を聞いてフェイトの方を向くと今度はフェイトが雷の直撃コースにいる……助けようとするが体が動かない……。

「フェイトー！ー！」

俺が叫んだ瞬間……。

『Hyper Clock Up』

と言う電子音が聞えあつという間に雷が打ち消される。

『Hyper Clock Over』

その電子音と共に現れた影を見た瞬間ダメージに耐えられなかったのか俺は意識を失った。その後俺が目覚めたのは全てが終わってからだった。

第十一話

『無茶するフェイトと謎の影』

(後書き)

天「この作品を読んでいただきありがとうございます！どーも作者の天です！」

カマZ「どもカマードゼクターだぜ！、しかし最後のはなんだったんだ？」

天「フラグだ！」

カマZ「これで関係ないほうがおかしいけどな！」

天「それはともかく」

二人「ご意見やご感想などがあればいただけると幸いです。それでは」

第十二話

『傷だらけのアルフと海での決戦』

(前書き)

貴大のキャラが多少崩壊しております。

それではどうぞ

第十二話 『傷だらけのアルフと海での決戦』

俺達はジュエルシード集めが一段落したところで一度家に帰り。そして俺達は今久々に学校に来ている。

「大きな犬を拾った？」

俺達（俺とアリサとすすかだ、なのはは用事があるらしい）は弁当を食べながら話をしていたのだがその話題はアリサが拾った大きな犬の事だった。

「そうなのよ、こんな子なんだけどね」

と写真を見せてもらってびっくり何とその犬はワン公だったのだ。

「どうしたの？ 貴大君？」

ふむ……すすかに心配させてしまったかな？

「いや……知り合いの犬に似ていてびっくりしたただけだ」

「そう……それじゃあ今日でも見に来る？」

「そうだな……そうさせてもらうか」

こうして俺はワン公の様子を見に行くことになった。

・・・

俺はアリサの家（つーかもはや城）に到着する。

「来たぞー、アリサ」

「ちょっと遅くない？」

「飼い主と連絡を取ってたんだよ」

「で、どうだったの？」

「おそらく間違いないが実際に確認して欲しいとさ」

「そう……じゃあこっちょ」

こうして俺達はワン公の元へ向った。

「どう？」

「ああ……間違いない」

「そう、なら良かったわ」

「ああ……コイツを飼い主に届けるから帰るわ」

「気をつけて帰りなさいよ！」

こうして俺はワン公を連れて帰ることになった。

帰り道……

《まさかお前の隣を歩くことになろうとはな……》

《それはこっちの台詞だよ》

《それで何があった？》

《……》

《言いたくないなら言わんで良いが……フェイトはどうした？》

《……あんたに頼みたいことがある》

《なんだ？》

《フェイトを……あの子を助けてやっておくれよアンタにこんなこと頼める義理じゃないのは分かってるんだけどあの子だけは……》

《分かったよ……》

《本当かい！》

《当たり前だ……》

この後ワン公……アルフをつれて帰った俺はなのは達と話し合いその結果なのはがジュエルシードを全てかけてフェイトと戦うことになった。

•
•
•

そして翌日俺達は海鳴公園でフェイトを待っていた。

「来たか……」

俺が顔を上げるとそこにはフェイトがいた。

「貴大……」

「フェイト……ジュエルシードを全てかけろ……あるいはこの身に届くかも知れんぞ？」

「何言ってるんだよ！」

流石ユーノ、うちの突っ込みだけはある。

「ユーノ一つ言っておく……」

「なんだよ……」

「今回はよほどの事が無い限り俺はシリアスにはならん！」

「「ええー！ー！ー！ー！」」

ふむ……アルフまで加わったか。

「フェイトちゃん……賭けよ……お互いのジュエルシードを全て！」

流石なのは！俺を無視して話を進めるとは……。

「うん……分かった賭けようジュエルシードと貴大を」

ヤッフーイ賭けられちゃったぜ!……俺、なんか見たことあるけど今日の俺は気にしないぜ!

※貴大は最近シリアスばかりだったのでテンションがおかしいです。

「「なんか変な電波きた!!」」

※ユーノ、アルフ気にしたら負けだ

「「気にするよ!!」」

「あっ、始まった」

「「貴大も気にしなよ!!」」

「あんまりうるさいとOHANASIしちゃうぞ?」

「「すいませんでしたー!!」」

※そうだぞ二人とも

「アンタも中に入ってるからな?」

※すいませんでしたー!!

たくっ……あっなのはがバインドに捕まった。

「あれはまずいよ……フェイトは本気だ!」

「なのは今サポートを」

「やめとけ……」

「「でも！」」

「お前らはなのはの覚悟を汚す気か？、そんなこととして勝ってもあいつに後悔が残るだけだ」

「なのはが心配じゃないの？」

「うーん、あんまり？」

「なんて薄情な奴なんだい！」

むっ……それは少し心外だな。

「……俺は信じてるだけだよ……なのはもフェイトもな」

「「……」」

ちよっとシリアスなっちゃったぜ、こいつらは後でOHANASHI決定だな。あっなのはがフェイトの攻撃を凌いだ。

「撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね、今度はこっちの！」

『ディバイン……バスター』

なのはがディバインバスターを撃つ、フェイトも魔力弾を投げるが

デイベインバスターに打ち消されそのまま直撃するがフェイトはシールドで防ぐが……。

「受けてみて……デイベインバスターのバリエーション！」

『スターライトブレイカー』

魔力がどんどん溜まっていく。フェイトが逃げようとするがバインドで動けない。

ちょ！おま！それは！

「おいおいおいおい！」

流石に俺でも焦るぞ……。

「カマードエクステンダー！」

「ちょっと貴大！」

「何するのさ！」

「あんなもん受けてその後飛べると思うか？」

「「思わない」」

「そのための準備だ」

「「な、成る程……」」

「これが私の全力全開！スターライト……ブレイカー！！」

ものすごい魔力砲がフェイトに直撃する。

「……行って来るわ」

「「……行ってらっしゃい」」

（これはなのはも後でOHANASHIだな……。）

そんなことを考えているうちにフェイトの落ちてくる地点に到着しフェイトを受け止める。

「おゝい、大丈夫か？」

「た、貴大／＼／！」

なんで顔が赤くなってるんだ？……まあいつか。

「あーーーー！！何やってるのフェイトちゃん！！」

「なのはお前は後でOHANASHIな」

「えー！！勝ったのはなのはなのに！」

「お前は手加減という言葉を知るべきだ」

「ぶー！」

「……はあ！なのは回避しろ！」

「!」

俺達は回避行動に移ると以前の雷が襲ってきた。その間にバルディッシュが吐き出したジュエルシードを回収して行った。

「……クロノどうだ？」

『ああ問題ない、位置はつかめたこちらに帰ってきてくれ』

「了解した」

俺達はアースラへ戻った。

第十二話

『傷だらけのアルフと海での決戦』

(後書き)

天「どーも作者の天です」

貴「主人公の貴大だ、まさに原作通りだな」

天「だってそうしないと後がつらい」

貴「切実な悩みだな……」

天「ああ……」

二人「ライ様！感想をいただきありがとうございます。これからも頑張っていくしますので他の皆様も感想や意見がございましたらいただけると幸いです、それでは」

貴「次回で無印も終わりか」

天「まだ分かん」

貴「えっ！」

第十三話

『親子の意味と進化する貴大』
(前書き)

それではどうぞ。

第十三話

『親子の意味と進化する貴大』

アースラに戻った俺達は主犯であるプレシア・テストロッサの逮捕する瞬間を見ていた。

《母親の逮捕を見せるのは忍びないわ……だからフェイトさんを別の部屋へ連れて行ってくれる？》

《あ、はい》

となのはが……。

《ああ》

と俺が返事をしフェイトを連れて行こうとしたが……。

「フェイトちゃん……良かったら私の部屋……」

「総員、玉座の間に進入！目標を発見！」

ふむ……どうやら遅かったようだ、武装局員がプレシアの元へたどり着いてしまった。

「プレシア・テストロッサ時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します！」

「武装を解除してこちらへ……」

武装局員達がプレシアを囲み……。

「な、なんだ！これは……」

どうやら局員の何人かが通路を見つけたようだ。そしてそこには……フェイトと瓜二つの女の子が入った生体ポッドがあった。

「！私のアリシアに近寄らないで！」

局員達はプレシアに攻撃を仕掛けるが全く効かず逆にプレシアが放った雷で全滅した。

「いけない！局員達の送還を！」

「了解です！」

リンディさんの言葉にエイミィさんは局員達を転送した。

「アリ……シア」

「もうだめね……時間が無いわ……たった9個のロストログアではアルハザードにたどり着けるかどうか分からないけど……でももう良いわ……終わりにするの……この子を亡くしてから暗鬱な時間を……この子の代わりの人形を娘扱いするのも……聞いていて貴女のことよフェイト……せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ……役立たずでちっとも使えない……私のお人形」

何を言い出すんだこのババア！

「はぁ……最初の事故の時にねプレシアは実の娘……アリシア・テ

スタロッサをなくしているの……彼女が彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる使い魔を越える人造生命の生成……そして死者蘇生の秘術……フェイトって名前は当時彼女の研究につけられた開発コードなの」

大体は分かったがそれは今言う事なのか？

「……よく調べたわね、そうよ……その通り、だけどダメねちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物……失ったものの代わりにはならないわ……アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ、アリシアは時々わがままも言ったけど……私の言う事をよく聞いてくれた……」

「やめて……」

なのはが搾り出すように言うが……。

「アリシアはいつでも私に優しくかった……フェイトやっぱり貴女はアリシアの偽者よ、せっかくあげたアリシアの記憶も貴女じゃダメだった」

「止めて……もう止めてよ……」

「アリシアを蘇らせるために慰みに使うだけのお人形……だから貴女はもういらないわ何処へなりとも消えなさい！」

「お願い！もうやめて！」

「……いい加減テメエの妄言は聞き飽きたぞ！」

ついに俺が口を挟む。

「妄言ですって！」

「だってそうだろ死んだ奴を蘇らせるとか……んなもんできるわけねーだろ……」

「そんなことは無い！アルハザードに……」

「テメエいい加減に妄想をダラダラもらすのをやめろ……それにテメエは一つ勘違いしてるぜ」

「な、何を……」

「フェイトは確かに創られたのかもしれない……だけどそれがどうした！フェイトは今を生きてる！たとえアリシアって奴のクローンであったとしてもフェイトは生きてるんだ！人形だの紛い物だの非難する資格はテメエにはねーんだよ！そんなことも分からずにテメエの妄想でフェイトを傷つけるなら……この俺がその妄想ごとテメエをぶっ倒す！」

「ふん！やれるものならやってみなさい！」

通信が切れた……どうやらプレシアはサーチチャーを破壊したようだ。

「さて……行くぞなのは、ユーノ、クロノ……あの妄言女を叩き潰す！」

俺は去り際に。

「フェイト……フェイトとして生きるかアリシアのクローンとして腐るかはお前が決める……だが俺としてはフェイトとして生きて欲しいがな……」

俺はフェイトの頭を撫でながらそう言い。プレシアが居るへ時の箱庭へと向った。

・・・

俺はカマードヘライダーフォームへに変身し、なのはとクロノはバリアジャケットを装着をし時の箱庭についた。そして俺達が最初に見たのは無数のダミーだった。

「イレギュラーまで飼ってやがったのか……」

「こいつらは？」

そーいやクロノは知らなかったか……。

「あいつらはイレギュラーって言って人の悪意を食って増殖や成長する奴らだ雑魚のダミーなら問題ないが成長体になられたら厄介だぞ！」

「了解した」

こうして俺達の戦いが始まり。そして暫くたち……。

「クソ……次々と湧いてくるぞ……」

「あのババアの悪意は底無しかよ150体は軽く倒してんぞ……し

かも成長体まで混じってるし」

無限に沸いてくるイレギュラーにクロノと俺がぼやく。

「みんな！あきらめちゃダメなの！」

「当たり前だ！絶対負けられないんだからな！」

それから暫くして……。

「サンダーレイジ！」

「フェイトちゃん！」

「あたしも居るよ！」

フェイトとアルフが合流した。

「くっ……クロノここは……」

「ああ……三手に分かれよう……なのはとユーノは駆動炉を僕とアルフはここで敵をひきつける、そして貴大君とフェイトはプレシアの元へ向え！」

「クロノ……お前……」

「あそこまで言ったんだ君が行かないとダメだろ？」

「ああ……そうだな！」

「フェイト！」

「ユーノ君！」

「「道は（俺・私）があける（の）」」

「クロックアップ！」

『Clock Up』

俺はクロックアップで……。

「ディバイン……バスター！」

なのはディバインバスターでそれぞれ道を空けた。そして俺達は
三手に分かれた。

・・・

エレベーターでの移動中にフェイトが話しかけてきた。

「……貴大」

「どうした？フェイト」

「私ね……母さんを助けたいと思ってる」

「……」

「貴大も来てくれる？」

「……プレシアがお前を受け入れたら考えてやる」

「そう……」

そうして俺達はプレシアの元へたどり着いた。

「……フェイトあなた何をしに来たの？消えなさい」

「私は確かにアリシアのクローンかもしれませんが……でも私は貴女の娘です！」

「私にそう思えとでも言うの……」

「はい……そう思ってくれるなら私は貴女を……母さんを守ります」

「……くだらないわ！消えなさい！フェイト」

「……それがアンタの答えか？」

「そうよ！私の娘はアリシアだけ貴女みたいな人形を娘と思うことなど無いわ！」

「そうか……なら」

俺は右手に持ったブレイガンへガンモードで生態ポッドに向けてエネルギー弾を撃つ。

「くっ……何を！」

プレシアはエネルギー弾を防いだようだが……。

「クロックアップ」

『Clock Up』

俺はクロックアップでプレシアの反対側に周り……

『Clock Over』

通常空間に戻りブレイガンを〈ブレイドモード〉に変え……。

「!まさか、やめなさい!」

俺は無言で生態ポッドをアリシアごと切り捨てる。どうやらアリシアはイレギュラーと同じだったようですぐに消滅した。

「ア……アリシアが私のアリシアが……」

「……」

フェイトは呆然としているようだ。

「許さない……貴様だけは……殺す……コロシテヤル……G A A A A A A A A A」

プレシアはジュエルシードを取り込みカブトムシのようなイレギュラー……〈ビートルイレギュラー〉（以降、ビートル）に変貌した。

「か、母さん？」

「ちっ……既にイレギュラーを取り込んでいたか……」

こうして俺達の最終決戦は始まった。

その戦いは一方的だった。流星はジュエルシードを9個も取り込んだだけの事はある……俺の一撃は全くダメージを与えられずしかも向こうは一撃が意識を失いかけるレベル……壁に押し付けられ引きずられ投げられる。何とか体制を整えるが戦えるかどうか正直微妙だった。

「貴大君、大丈夫！」

そこになのは組とクロノ組が現れた。

「なんなんだあれは一体……」

「あれはプレシアだ……俺が生態ポッドを破壊したらああなった」

「お前のせいだ！」

ユーノとアルフ……今は突っ込みはいらん……。

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
! ! !
」

「どうやらおしゃべりの暇は無いらしいな……」

俺達はビートルと向かい合った。

・・・

結果は分かりきっていたがこうも力量差があるとは……。今たって
いられるのは俺とクロノとフェイトのみで他の3人は既に戦闘でき
る状態じゃない……。ビートルは今度はフェイトに襲い掛かる。

「ぐっ……がっは……」

フェイトにビートルの攻撃がかすり吹き飛ばされる。

「フェイト！」

フェイトは壁に激突しもう戦える状態ではなさそうだ……。

（どうすれば……）

そう思ったとき俺はふと思い出した……雷を打ち消したあいつの姿
を……。

（やってみる価値はある！）

俺は心の中で呼ぶ……最強の存在をじかんもつ空間も越えることが
出来るあいつを！

「俺は……未来を！掴み取る！」

そうやって俺は手を掲げた瞬間空間を切り裂き銀色のカブトムシ……
「ハイパーゼクター」が現れた。それを腰の左側にセットし……。

「ハイパーキャストオフ！」

「危ない！」

フェイトが叫ぶが問題ない。俺は片手で受け止める。

「GA!!」

「！」

みんなが再び驚いているが気にしない

「はっ！せい！」

もう一方で殴り、よろめいた所に腹に蹴りを入れる。

「GU!!」

俺はそのままビートルに歩いていきアッパーカットで空中に突き上げる。そして……。

「ハイパークロックアップ！」

俺はハイパーゼクターのスラップスイッチを叩く。

『Hyper Clock Up』

カマードプロテクターが展開し、俺以外の時間がほとんど止まる。俺はそのままハイパーゼクターのゼクターホーンを倒し……。

『Maximum Rider Power』

そのままフルスロットルスイッチを順番に押していき……。

『one two three』

そのままカマードゼクターのゼクターホーンを一度戻し……。

「ハイパー……キック！」

そのまま反対側に倒す。

『Rider Kick』

ハイパーゼクターによって強化されたタキオン粒子が一度カマードホーンに集まりそのまま下がっていき今度は両足にたまる。

「はぁ！」

俺はそのまま飛び上がりビートルに飛び蹴りを喰らわす。

『Hyper Clock Over』

ハイパークロックアップが終わり時が動き出した瞬間。

「G A A A A A ! !」

と声を上げてビートルが消滅し。そこに残ったのは砕けたジュエルシードとボロボロのプレシアだった。その後プレシアは逮捕されこの事件は幕を閉じた。

第十三話 『親子の意味と進化する貴大』（後書き）

天「お前何やってんだよ……どーも作者の天です」

貴「だって許せなかったんだもん……どーも主人公の貴大だ」

天「次回で無印編は終わりです」

貴「やっとか……」

天「そこで疑問なんですが準備期間を入れたほうが良いでしょうか？」

貴「皆様の意見待ってます。」

二人「ライ様感想ありがとうございます！他の皆さんもご意見やご感想があればいただけると幸いです。」

二人「それでは」

追加設定・・・

仮面ライダーカマード ハイパーフォーム

カマードの第3形態。ハイパーゼクター使用し変身するカマードの強化形態。全身のアーマーが内部にタキオンプレートを収納した、以前の2倍以上の強度を持つカマードプロテクターに再構成されている。

通常形態とカマードプロテクターを展開し、大気中や真空中を自由に飛翔でき、従来のクロックアップ以上のスピードで過去や未来を自由に行き来する「ハイパークロックアップ」を使用可能な「ハイパークロックアップ形態」がある。

必殺技はHCUした状態から強化されたライダーキックを放つ「ハイパーライダーキック」。ハイパーゼクターのゼクターホーンを倒すことで、『Maximum Rider Power』の発声とともにハイパーゼクターからカマードゼクターにマキシマムライダーパワーが送り込まれた後、ライダーキックの手順を踏むことで発動する。以前と異なり従来のライダーキック同様の飛び蹴りである。

なお容姿はベルトと（ハイパーゼクターを除く）頭部と色以外カブトと共通。

ハイパーゼクターはTV本編と共通。

追加設定・・・（後書き）

この後も設定が増えればやります。

第十四話 『自分の道を歩くために・・・』 (前書き)

今回で無印終了です。

それではどうぞ。

第十四話 『自分の道を歩くために・・・』

PT事件・・・そう呼ばれるようになったジュエルシードをめぐる事件は終わりを告げた。それから俺達は家に帰りもとの生活に戻りつつあった。今日はなのはとフェイトが久しぶりに会うことが出来るそうだ。

「フェイトちゃん！」

「おいおい・・・あんまり急いでこけるなよ・・・」

「貴大君酷いの！」

俺となのはの会話に向こうからも笑い声が聞えてくる。それからなのはとフェイトを二人きりにするため俺達は少し離れた。

「向こうにじゃなくて良かったのか？」

クロノの疑問に。

「別に、俺はすぐにでも会うんだ・・・かまわねーよ」

俺はそう答える。

「えっそれってどう言うത്？」

「俺のデバイスはまだ出来てないんだよ」

「そうだったのか・・・」

「それよりユーノ……最初に言ったこと覚えてるか？」

「ああ……『全てが終わったら覚悟しとけ』って奴だろ」

「ああ……覚悟は良いか？」

「うん……分かってる」

「んじゃ元の姿に戻れ」

「分かった……」

そういうとユーノは元の少年の姿に戻った。

「これで良い？」

「ああ……んじゃ目を瞑れ」

俺がそういうとユーノは目を瞑る。

「んじゃ……行くぜ！」

俺はユーノの顔面を思いっきり殴る。

「ちょっとアンタ！何やってるのさ！」

「なのは巻き込んだ責任ってのをとってもらっただけだが？」

「それにしても殴ること無いじゃないか……」

「良いんだよアルフ、僕はむしろこうでもしないとスッキリしないから、それに初めは握り潰されかけたからね……」

「あの時はお前が憎くてしょうがなかった。」

「なんたって僕の最初の呼び名は元凶だったからね」

顔を引きつらせているアルフとクロノをよそに笑いあう俺とユーノ

「それにしてもお前には随分と苦労させられたなアルフ？」

俺は黒い笑みを浮かべる。

「ア、アンタそれはあの時に一発意識が飛びそうなのを貰ったからチャラだろ！」

「オイオイ………忘れたわけじゃあるまいな………温泉の時の事をよ………」

「ア、アハハハハ………いい男が昔の事を気にするんじゃないよ！」

「それになのはとフェイトの決戦の時のOHANASHIはまだしてないはずだよな！」

「ちょ、アンタそれは理不尽だよ………それにあれはユーノだって………」

「僕はあの後すっかりOHANASHIされたよ………」

「そういう事だ、さあ覚悟は良いか？アルフ！」

「アハハハ……あっ！フェイトがアンタを呼んでるよ！」

「……何故分かった？」

「あんな顔して手を振る相手はアンタしかいないよ……ってアンタ知ってたのかい！」

「……だって向こうの会話全部聞えてたしな」

※このときその場にいた全員は思っていた。

（小日向貴大って一体……）

「そろそろ言ってくるわ！」

俺は驚愕している奴らを放置しフェイトたちのところに向った。

「どうしたフェイト？」

「うん……あのね……貴大にお礼がしたくて」

「別にお礼されるような事をした覚えは無いが……」

「うん……それでもお礼がしたいんだ……」

「……分かったよ」

「それなら目を瞑って……」

「ん……こうか……」

俺はそうやって目を瞑る、このとき本能は警告を出していたのだが俺は無視してしまった……。再び悲劇が来る事も知らずに……。

「うん……それで良いよ……んっ……」

唇に何か柔らかいものが当たった……クチビルニヤワラカイモノ？
硬直する事3秒最初に動いたのはなのはだった。

「ああああああ あああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！！ フェイトちゃん！！！！何やってるの！」

「え／＼／＼／＼／＼／何って……その／＼／」

前世とかひっくるめて初めてだったんだけど……。

「フエイトちゃんがするなら私もするの！」

デンジヤー デンジヤー
警告、警告、ヤバイヤバイヤバイ！……奪われる……奪われる……
俺はお前に奪われる……。
なのは

「……三十六計逃げるに如かず！」

俺は逃走をはかるが……。

「逃がさないの！」

その後俺はバインドでこかされて、三十六重のバインドで縛られ、

なのはに唇を奪われ更に舌まで絡ませてきやがった……。

数日後……

俺はクロノに話があると聞いてアースラにやってきた。

『Hyper Clock Over』

「よう、来たぜ」

「全く……何と言う現れ方だ……」

「わりいわりい……それで話ってなんだ？」

「……これを見てくれ」

クロノはモニターに映像を出した。

「！これは……」

そこに映っていたのはイレギュラーだった。

「その顔を見るとやはりそうか……」

「どういう事だ？」

「これはとある管理世界の映像だ」

「つまり奴らがいるのは地球だけじゃ無いって事か？」

「そういうことになるな」

俺は新たな戦いがおこることを感じていた。

第十四話 『自分の道を歩くために・・・』 (後書き)

天「祝！無印完結！どーも作者の天です！」

貴「イエーイ！どーも主人公の貴大だぜ！」

天「次回からはA，S準備編に入るぞ！」

貴「準備って何をするんだ？」

天「戦力の補強」

貴「成る程な」

二人「ライ様感想ありがとうございます」

二人「ご意見やご感想などがございましたらいただければ幸いです」

二人「それでは」

第十五話 『狙われたワガママ令嬢と新たなゼクター』（前書き）

外国での話しですが作者は外国語とか無理なので日本語で行きます。

因みに貴大は外国語が出来ます。

この話は士郎以外オリキャラです。

それではどうぞ。

第十五話

『狙われたワガママ令嬢と新たなゼクター』

俺は今イギリスにいて走っている。その理由は一週間前の土郎さんとの会話まで遡る。

「イギリスへ行って来い？」

「ああ、そうだ」

「何でまた？」

「実は俺の知り合いの娘が命を狙われてな、俺は翠屋があるし、もう桃子に無茶はしらないと言ってしまっただけ……」

「なら俺は良いのかよ……」

「アリスちゃんやすすちゃんから聞いた話では三人を30秒で倒したそうじゃないか」

「まあ……出来なくも無いが……俺パスポートとか無いぜ」

「それは問題ない既に用意してある」

「確定事項だったのかよ……」

「行ってくれるか？」

「……分かったよ行けば良いんだろ」

そしてその夜問題が発生した。

「スマンが俺は用事があって無理だ」

「お前行けないのかよ！」

実はこのイギリス行きにカマードゼクターが来れないと言い出したのだ。

「なんかあったときはどうするんだよ……」

「お前クロノに簡易デバイスを貰って変身魔法も教えてもらったら？」

「まあ……確かにそうだが、しかしな」

「それに俺の代わりをお前につけとくから大丈夫だって」

「……まあしゃーないか、んでお前の用事ってなんなんだよ？」

「秘密だ」

こうして俺は次の日にイギリスへ向う事になった。そしてイギリスに着いて目的の屋敷に向かい着いたのだが……。

「何よ！こんなガキを連れてきて！何でシロウじゃないの！」

やってきて開口一番がこれだった。彼女はエリス・ローランと言いかなりのワガママらしくこの一週間でボディーガードを何人もクビにしたそうだ。

「帰って良いか？」

俺が帰ろうとすると……。

「お待ちくださいコヒナタ様！」

執事が俺を止める。

「なんだよ……俺はいらないんじゃないの？」

俺の言葉に考え込む執事、そして。

「……では、こういたしましたよう、我が屋敷が誇る一流のボディーガードと戦っていただきましようそれでよろしいでしょうかお嬢様？」

「……分かったわ」

「えー、面倒……」

そう言った瞬間俺はエリスに見ない速度のパンチを喰らい引きずられて連れて行かれた。つーか護衛いらねーんじゃない？そしてつれてこられたのは中庭だった。結果としては奇策を使って俺が勝った。戦ったおっさんは今まで（この世界に来て）戦った奴らと全く違うタイプだった。正直勝てたのが奇跡くらいだ。そして俺は認められた。そして一週間がたち冒頭通り走っている。なぜかと言うと変な男が数名追いかけてくるからだ。

「ツたくなんなんだあいつ等は！」

「……昔私がクビにしたやつらよ」

「おいおい……」

逃げていたのだが俺達は囲まれてしまった。

「チッ！」

俺はエリスの前に立つ。

「おい坊主……ナイト気取りか？」

「気をつけろそいつはあのおっさんに勝ったらしいからよ」

「マジかよ……ならあいつ等を使おうぜ」

「そうだな……お前等出て来い！」

一人の男が呼んだのは6体のダミーイレギュラーだった。

「やっちまえ！」

男の命令にダミーが従い俺達に襲い掛かってこようとした時上から何か降ってくる。

「お前は！」

俺の前に現れたのは蜘蛛型のゼクター……ヘスパイゼクターだっ
た。

「なんだこりゃ！」

「かまわねえ！やっちまえ！」

ダミーが向ってくるが……。

「おせえ！」

俺はスパイゼクターを手に取り……。

「変身！」

右の手首にいつの間にか巻いてあったライダーブレスに装着すると……。

『H e n s h i n C h a n g e S p i d e r』

電子音が鳴り、俺はヒビロノカネの鎧を纏い黄色の戦士仮面ライダースパイに変身した。

「な、なんだコイツは！」

「か、かまわねえ！やっちまえ！」

男達の命令にダミーは攻撃してくるが……。

「とろいな！」

俺は全てをかわし、ダミー達にパンチのラッシュを浴びせる。

「せい！せい！せい！せい！」

ダミーはだんだん弱っていく。

「これで終わりだ！ライダーネット！」

俺はスパイゼクターの脚を上げて下げると……。

『Rider Net』

電子音と共にスパイゼクターのゼクターニードルからダミーに向けてタキシオン粒子を纏ったエネルギーの網が射出されそのままダミーは捕まるそして俺は……。

「ライダースティング！」

そのままゼクターのフルスロットルスイッチを押すと……。

『Rider Sting』

電子音と共にゼクターニードルにタキオン粒子が集まっていき……。

「はぁ！」

俺はダミーにゼクターニードルを突き刺し全て消滅させる。

「ひ、ひいー！」

男達は逃げようとするが……。

「逃がさねーよ！」

俺はそのままエネルギーの網を出し犯人を捕獲する。そしてそのまま事件は解決し俺は日本に帰国する事になった。その当日。

「ちょっと待ちなさいよ！」

俺はエリスにとめられる。

「なんだよ……」

「仕事が終わったらいつでも来なさい雇ってあげるから！」

「へいへい……」

俺はエリスの言った本当の意味も分からず帰国するのだった。

第十五話 『狙われたワガママ令嬢と新たなゼクター』（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「本当の意味って何なんだ？主人公の貴大だ」

天「今回は仮面ライダースパイの簡単な説明をします」

貴「仮面ライダースパイ……NECS^{ネクス}が開発したマスクドライダー2号。同組織が量産を前提に開発された試作品だが資格者の選定を廃止したためのスペックの低下が著しくワームに対抗できないとして量産は中止された。なおこのタイプはスペックの向上のため資格者の選定機能はついている。装着者は主に小日向貴大だが状況によって代わる場合がある。

必殺技はタキオン粒子を纏ったエネルギーの網をゼクターニードルから射出するライダーネット、ゼクターニードルにタキオン粒子を纏わせ突き刺すライダースティング、なおスパイ及びスパイゼクターの容姿はスパイは頭部とゼクター以外はザビーで、頭部はザビーの頭部に蜘蛛の脚を重ねたようなバイザーをしている、スパイゼクターはザビーゼクターに長めの足をつけて羽を取ったような形で。また量産を前提としていたためマスクドフォームは存在しない。…ざっとこんな感じか」

天「因みにスパイゼクターの尻に針があるのは作者の妄想ですので気にしないでください」

貴「戦闘スタイルについては、カマードがカウンター狙いなのに対しスパイはボクシングタイプだ」

天「因みにエリスは今後でないと思います」

貴「でないのかよ……」

天「そんなことより……」

二人「ライ様、銃王 海様！ご感想ありがとうございます」

二人「ご意見やご感想などがありましたら言っていたただけると幸いです。それでは」

第十六話

『模擬戦と完成したデバイス』

(前書き)

今回はクロノがフルボツコになります。

それではどうぞ

第十六話

『模擬戦と完成したデバイス』

P.T事件から5ヶ月……やっと俺のデバイスが完成した。何故そんなに良かったのかと言うと5ヶ月前の俺の一言が原因だった。

「なーな、エイミーさん、クロックアップってデバイスに組み込まないかな？」

「いきなりどうしたの？」

「いやあ……俺って体術が基本だろ？だから複数相手にするにはクロックアップは有効かなって思ってたさ」

「うーん……クロックアップの理論があったら可能だけど……」

「あー、それは大丈夫……俺の頭に全部入ってるから」

「そうなの？それじゃあやってみようか」

「おう！」

こうして俺とエイミーさんの初の試みが始まった。試行錯誤を重ね五ヶ月ようやくテスト段階まで辿り着きクロノと模擬戦をする事になった。観客は……。

「頑張って、貴大！」

「負けるんじゃないよ！」

フェイトとアルフそして……。

「データが欲しいから思いっきりやっちゃってね！」

データ収集係のエイミーさんだ。

「残念だが魔導師としては素人の君に負ける気は無いよ」

「はっ、その台詞いつまで言ってられるかな？ 行くぜ！ ライトニングハート！ セットアップ！」

俺は愛機のライトニングハート（俺、命名）を起動させる。

『stand by ready』

俺は黒いズボンにフェイトを思わせるような所々に黄色の入った黒いコートにインナーはなのはを思わせるようなふちが青いカッターシャツのバリアジャケットを纏う。そしてデバイスはレイジングハートの姉弟機と言うのに相応しくピンクの部分は青く黄色のところは白銀、更に球体は黄色いレイジングハートだった。

「……えっ何これ？」

俺が驚いたのは特にバリアジャケット、所々に悪意を感じる。

「……フェイトこれ考えたのお前となのはだろ？」

「……うん、そうだけど」

「あとでOHANASHIするから覚えとけよ……」

フェイトが若干震えているが気にしない、後なのは……お前も帰ったらOHANASHIだ……。

「……もうはじめて良いか？」

暫く放置していたクロノが問いかけてきた。

「……ああ良いぞ」

こうして俺とクロノの模擬戦は始まった。

数分後……

正直に言えば俺は押されていた。当然といえば当然だ俺は魔導師に關しては素人、体術で何とか凌いではいるが魔導師の経験で勝るクロノに勝てるはずが無い。……だから俺は奥の手を出す事にした。

「ライ……あれはいけるか？」

『マスターの体感時間で1分間……またフルで使用情况30秒のインターバルが必要です』

「それだけあれば十分だ、行くぜ……クロックアップ！」

『Clock Up』

「な！それは……」

クロノが驚くがもう遅い俺はクロックアップを使用しクロノに回り込んで攻撃、回り込んで攻撃を繰り返しピンボール状態にする。そ

して1分後……。

『Clock Over』

俺が通常空間に戻るとそこにはボロボロになったクロノが倒れていた。

「お前……それは反則だろ……」

「それよりエイミーさん！どうだった？」

俺はクロノを無視してエイミーさんに聞いてみる。

「うーんやっぱり従来のバリアジャケットじゃこれが限界だね、これ以上はバリアジャケットがもたないよ……」

「ふむ……成る程な……」

やはりマスクドライダーシステムで無いとダメなのか……。少し課題が残るテストだった。

これは余談だがちゃんとフェイトとなのはとOHANASHIをしましたよ。

第十六話

『模擬戦と完成したデバイス』

（後書き）

天「デバイスにクロックアップって……どーも作者の天です!」

貴「課題が残ったか……どーも主人公の貴大だ」

天「いきなりですがネタが無いのでA' S準備編はこれで終わりの予定です」

貴「短いな!」

天「ネタを提供してくれるなら伸びるかも……」

貴「まあA' Sに必要な事はやったから良いんだけどな」

二人「銃王 海様! 感想ありがとうございます」

貴「銃王 海様からいただいた海苔は雑炊にして、いただきましたありがとうございます」

二人「ご意見やご感想をいただけたら幸いです、それでは」

第十七話

『再開！そして強襲……』

（前書き）

それではどうぞ。

第十七話 『再開!そして強襲……』

俺は今図書館に来ている。理由?暇つぶしに決まってるだろう、しかしここに来ると半年前に会ったあの車椅子の少女を思い出す。この感じが恋なのか!……絶対違う、それに理由は分かっている。あいつの瞳に宿る孤独……俺が気になる原因はそれなのだろう。なんて考えていると……。

「うーん、取れへん……」

半年前と同じ状況の彼女が居た。偶然か……必然か……まあそんなことはどうでも良い今は本を取ってやるとするか……。

「これで良いのか?」

「ありがとうございますって、あ!」

「その反応だと覚えてたみたいだな」

「当たり前やん!だって君は私の……王子様やねんから」

最後の言葉は聞えないように言ったつもりなんだろうが俺には聞えてしまった。耳が良いのも考え物だな……。つーか王子様って……。

「俺は小日向貴大だ、アンタの名前は?」

「私は八神はやてや、よろしくな貴大君!」

「ああ、こちらこそよろしくな」

それから俺達は色々話をした。はやては幼い頃に両親をなくし半年前まで一人で暮らしていたそうだ。しかし半年前のはやての誕生日に新たに四人の家族が出来たらしい。なんて話していると何者かの視線を感じた。その視線は何かを見定めるような……。そして俺が振り向くと一人の女性が立っていた。

「あ、シグナムどうしたん？」

「いえ、主はやてを迎えに……。彼は？」

「偶然ここで二回出会った小日向貴大だ……。アンタは？」

「私はシグナムだ」

「それよりシグナムもう帰らなアカンの？」

「はい、時間も時間ですので……」

「えー、もっと貴大君とお話したいー」

「そういわれましても……」

「そうや！貴大君がウチに来たらええやん！」

「主……流石にそれは……」

「俺は別にかまわねーけどな」

「ほんまに！やったー！」

こうして俺は一応桃子さんに許可を取りはやての家に向った。その
帰り道……。

「キミのとなり♪戦うたび♪生まれ変わる♪……この歌どう
よ？シグナム」

俺は独り言のように問いかける。

「何故分かった？」

観念したのか甲冑を着たシグナムが茂みから出てきた。

「何……俺は耳がすごく良くてね……アンタの足音は聞えていた」

「なんと……恐ろしい奴だ」

「よく言われるよ……何のようだ？もしかして惚れたか？」

俺はニヤリとしながら聞いてみる。

「……お前の魔力を貰う！」

（無視かよ！）

そう思いながら俺は襲い掛かるシグナムの攻撃をかわす。

「却下だ！ライトニングハート、セットアップ！」

『stand by ready』

俺はバリアジャケットを纏いデバイスを展開する。

「……炎の将シグナム、参る！」

「魔導師……小日向貴大、行くぜ！」

こうして俺とシグナムの戦いが幕を開けた。

「はぁ！」

シグナムが斬りかかってくるがそれを俺はかわす、かわす、かわす、かわす、そしてたまに受け流す。

「くっ、貴様！」

「怒っちゃダメだぜシグナム！」

『アクセルシューター』

俺は魔力弾を放つがシグナムのシールドに止められる。

「このままじゃジリ貧か……しゃーないあれを使うぞ……時間は？」

『バリアジャケットにダメージがあるため40秒が限界です』

「問題ない……クロックアップ！」

『Clock Up』

俺はクロックアップを使って、まずシグナムの腹に右ストレートを入れ、今度は背後に回って蹴りを喰らわす。その繰り返しで40秒が過ぎた。

『Clock Over』

元の空間に戻るとそこにはボロボロのシグナムが剣を杖に立っていた。

「……まさかあれで動けるとは……時間が足りなかったか？」

『いえ……クロックアップ中のダメージはこの間の模擬戦を越えていましたからおそらく彼と彼女の違いなのでしょう』

「……なんなんだあれは？」

「降参したら教えてやるよ」

と俺が言った時空に向ってピンクの砲撃……スターライトブレイカーが放たれ更にユーノから念話がいった。

《……やっと繋がった、貴大！大変だよなのはが！》

《なのはがどうした？》

《なのはがやられたんだ！》

《！……誰にだ？》

《紅い服の少女と青い服の男の人だった》

《分かった……なのはは任せる》

《えっ！ちょっと！》

俺はユーノを無視して念話を切った。

「なあ……シグナム、あかい服の少女と青い服の男はお前の仲間か？」

「ああ、そうだが」

「……そうか」

俺はその場から立ち去ろうとした。

「待て！何処へ行くつもりだ！」

「簡単な事だ……お前等は俺の大事な奴に手を出した……俺は今からお前等と同じ……いや、それ以上のことをする」

「ま、まさか！」

「お前等の大事な奴は八神はやてだろ？だからあいつを殺す事にした」

「や、やめろ！」

「精々あいつ等に手を出したことを後悔するんだな！クロックアツプ！」

『……Clock Up』

俺はクロックアップではやての元に向った。

シグナムSide……

まずい……かなりまずい、今からでは奴に追いつけないだろう……。とりあえず全員にこの事態を知らせておく。

《大変な事になったぞ》

《どうしたのシグナム？》

《実は私の相手をしていた少年がそちのターゲットに手を出したと知った瞬間……主はやてを殺すと宣言して去っていった》

《！シグナム、お前なんだ止めなかった！》

《……奴は奇術で姿を消された》

《ケンカしている場合ではないだろう！一刻も早く戻らねば！》

私達は急いで家に帰った。

第十七話

『再開！そして強襲……』

（後書き）

天「どーも天です」

カマZ「どーも本編では暫く出てこないカマードゼクターだぜ！」

天「さて次回はどのような事やら……」

カマZ「ある程度予想ついてる人もいるだろうけどな」

二人「ライ様、銃王 海様！ご感想ありがとうございます！」

二人「銃王 海様！小豆はやはりおしるこにしてくださいました！」

二人「ご意見やご感想をいただければ幸いです、それでは」

カマZ「因みに作者ははやてが大好きだ！」

天「何暴露しちゃってんの！お前！」

第十八話

『OHANASHIと意外な結論』

(前書き)

前回の続きです。

それではどうぞ。

第十八話

『OHANASHIと意外な結論』

シグナムSide・・・

「主はやて！無事ですか！」

私達は急いで自宅に戻った！そこで見たものは……

「おう意外に早かったな」

「あ、みんなお帰り、遅かったから夕飯先に食べてるで」

夕飯を食べている小日向貴大と主はやてだった。

貴大Side・・・

俺ははやての家に着く前に桃子さんに連絡を取った。

「あ、桃子さん、今日は帰れそうに無いから友達の家止まるわ」

『あらそう、迷惑かけないようにね』

「了解」

電話を切った俺ははやての家のインターホンを押すとはやてが出てきた。

「あつ、貴大君どうしたん？」

「帰ろうと思ったが時間も時間だし泊めてくれるとありがたいんだ

が……」

「ホンマに！大歓迎や！」

こうして俺ははやての家に泊まる事になり夕食を食べ始め。それから数分……。

「主はやて無事ですか！」

シグナムたちが帰ってきた。

「おう意外に早かったな」

「あ、お帰り、遅かったから夕飯先に食べてるで」

あ、全員固まってる。一番最初に動いたのは紅いちびっ子だった。

「テメエ！はやてから離れやがれ！」

「離れるかどうかははやてが決める事だおまえに指図される覚えは無い」

「殺すといっていたのは……」

シグナムがにらむように言う。

「嘘に決まってるだろ……そもそもはやてを殺してどうなる？何の関係もないはやてを殺すなんてお前等以下の下種がやる事だ、そんなもの俺のプライドが許さない、それに犯罪者になって家族に迷惑かけたくねーしな」

「じゃああんなことを言ったのは？」

緑色の女が聞いてくる。

「お前等に奪われる恐怖を味あわせる事とOHANASHIするた
めだよ！」

さあOHANASHIをはじめようか……。

数時間後……

俺はシグナムたち……〈ヴォルケンリッター〉から話を聞きだした。
……と言うか吐かせた。

「成る程な……それで俺やなのはを襲ったのか……」

「……それで私たちをどうする気だ？」

「……お前達にはある事を手伝ってもらう事を条件に見逃してやる」

「ふざけてんのかテメェ！」

紅いちびっ子……〈ヴィータ〉が吠える。

「俺はふざけている気は無いのだが……まあいいこれを見てくれ、
ライ」

『分かりました』

俺はライに指示してイレギュラーの映像を見せる。

「これは？」

緑の服の女……〈シャマル〉が聞いてくる。

「イレギュラーといって人の悪意を喰らい成長や増幅する俺の敵だ」

「こいつ等を倒せば良いのか？」

「ああ……それとこいつ等には悪意を魔力に変える力があるらしい事が最近分かってな」

「！、成る程！」

シグナムは理解したようだ。

「どういう事だよ？」

理解できていないヴィータにシャマルが説明する。

「つまり彼等から魔力を集めれば良いって事よね？」

「その通りだ、あいつ等から魔力を貰うなら管理局にも文句は言えんだろ」

「つまりお前は……」

「ああ、お前等の魔力集めを手伝ってやる！」

「信用できるかよ！」

「信用するしないは勝手だがこれを踏み倒した場合は俺はお前等の敵になる」

「お前が敵になったって……」

「因みに俺がシグナムと戦った時は全力の5%にも満たない」

「あれで5%……我々で勝てる相手ではないな……」

「そういう事だ」

「……しかし我等に付けばお前の妹を敵に回すかも知れんぞ」

「その時はその時だ、怪我をしないようにまいてやれば良い、それと管理局が手を出してきたら応戦して構わないが茶色の髪の少女と金髪の少女……なのはとフェイトって言うんだがそいつらには出来るだけ大怪我をしない程度でやってくれ」

「……了解した」

こうして俺達は行動を開始する。なのはやフェイトを敵に回すかもしれないがまあ……なるようになるだろう。

第十八話

『OHANASHIと意外な結論』

（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「予想通りと言うか何と言うか……主人公の貴大だ」

天「だってはやてを殺したら話が続かないじゃん」

貴「なら何故あいう風にやった？」

天「なんとなく？」

貴「おい！」

天「それはともかく、ライ様、銃王 海様ご感想ありがとうございます」

貴「いただいた無限弾ハンドガンは俺がちよくちよく使うかも」

二人「ご意見やご感想があれば言っていただければ幸いです、それでは」

第十九話 『対峙』 (前書き)

スパイはザビーの蜘蛛版、フライはドレイクの蝶々版、モードスはサソードの蛾版と考えてください。

それではどうぞ。

第十九話 『対峙』

暫くはやての家で過ごす事になった俺ははやての家に泊まった次の日の朝、俺は家に帰り桃子さん達に事情を説明し必要なものをもつてはやての家に戻ってきた。

「ただいま」

「お帰り、何処に言っていたんだ？」

出迎えてくれたのはシグナムだった。

「家に家族に説明して、あと着替えと必要な物とりに帰っただけだ」

「必要な物？」

「居間で話す、とりあえず入りたいんだが……」

「……スマン」

俺はシグナムに通してもらい今に入った。今に入って荷物を広げていると……。

「なーなー、なんだよこれ？」

ヴィータが白い銃のグリップ……ヘフライグリップを持って聞い
てきた。

「それはフライグリップって言って俺の主力武器の一つだ」

「こんなもんが役に立つのかよ？」

「んじゃ……少し見せてやろう」

そう俺が言って左手にフライグリップを持つと……蝶々型のゼクター……
「へフライゼクター」が姿をあらわした。

「行くぜ……変身」

フライゼクターがフライグリップにセットされ。

『H e n s h i n C h a n g e B u t t e r f l y』

電子音が鳴り白い装甲を纏い俺は仮面ライダーフライに変身した。

「こんなもんだがどうだ？」

俺は変身を解除しながら言った。

「……か、かけえ！次はこれ！」

ヴィータは目を輝かせながら今度は紫色の剣……へモードスヤイバー
「」を持ってくる。

「しゃーねーな」

俺はモードスヤイバーを右手で持ち起動させる。

『Standby』

電子音と共に蛾の形をしたゼクターへモードスゼクターが飛んでくる。

「変身」

『Henshin Change Moth』

電子音と共に俺は紫の装甲を纏い仮面ライダーモードスへと変身した。

「……これで良いか？」

俺は変身を解除しながらヴィータに聞く。

「次は……」

「後はまた今度見せてやるから勘弁してくれ……」

「……分かったよ」

ヴィータは渋々頷いた。そして夜……。

「さて行くか……」

俺はスパイゼクターを手に取り……。

「変身！」

そのままライダーブレスに装着すると。

『H e n s h i n C h a n g e S p i d e r』

俺は装甲を纏い仮面ライダースパイに変身する。

「おおゝすげゝ」

ヴィータが目を輝かせながら見ている。

「さて……それじゃあ三手に分かれるか……まずヴィータとザフィ
ーラそれからシャルとシグナムで最後に俺だ」

「一人で大丈夫？」

シャルの疑問に

「問題ない、各自見つけたら念話で全員と連絡を取るように特にヴィータとシグナム！」

「何でアタシなんだよ！」

「私もか！」

「お前等は一人で突っ込みそうだから釘を刺しておく、もし一人で突っ込んだら一晩中OHANASHIだからな！」

「「！……はい」」

うむ素直な良い子達だ。その後イレギュラーを発見しヴォルケンリ

ツターのコンビネーションと俺のライダーネットで捕獲し蒐集を終わらせた。

「さて……帰るか」

と俺が変身を解除し言ったその時捕縛用結界が作動する。

「これは！」

シャルが驚きの声を上げ。

「……管理局か」

シグナムがそう予想し

「……厄介な事になったな」

俺が脱力しながら言う。

「どうする？」

サフィーラが聞き。

「なるようになるだろ、ライティングハートセットアップ……」

『stand by ready』

俺はバリアジャケットを纏いデバイスを展開する。

「何故それなんだ？」

シグナムの疑問に。

「ライダーで行ったらかわいそうだろ？それに俺は無駄に力を誇示しない主義だ」

と俺が答える。

「あと無用な戦闘は避ける、この場から離れる事を考えろよ」

俺たちは管理局員達に向っていった。そしてそこにはクロノもいた。

「お前、何で！」

「俺はただイレギュラーを倒していただけたが？」

「何故彼女等と一緒にいる！」

「彼女等はイレギュラーを倒すために協力してもらっているだけだが？」

「嘘をつくな！なら何故彼女等はイレギュラーから魔力を蒐集している！」

「そんな物俺の知った事ではない」

「なんだと！」

「もう良いか？俺たちは早く帰りたいんだが……」

「良いわけないだろ！全員この場で逮捕する！」

「……無茶苦茶だなオイ」

俺は戦闘体制をとろうとするがやめる。そして俺の目線の先にはなのはとフェイトがいた。

「……随分早い復活だ」

「貴大君、なんで！」

「そのうち話すかもな……それよりこいつ等が言いたい事があるそうだ」

「本当にやるのかよ？」

ヴィータが不満げに聞いてくる。

「当たり前だ」

「はぁ、しゃーないか……」

ヴィータがあきらめたようになのはたちのほうを向き……。

「」「」「どうもすいませんでした！」「」「」

ヴォルケンリッターたちはなのはとフェイトに謝った。

「ふ、ふえ！」

「え、え？」

わけが分からないようだった。

「こいつ等は昨日、お前を襲った事を謝ってるんだよ」

「昨日はいきなりすまなかったな」

ヴィータが謝ると。

「だ、大丈夫だから頭を上げて！」

「う、うん私たちはもう気にしてないから」

なのはとフェイトもかしこまっている。

「ちゃんと謝ったっぞ！」

ヴィータが俺に向っていつてきたので。

「上出来だぞヴィータ」

俺はヴィータの頭を撫でる。

「ちょ、やめろよ／＼／＼」

「あー！ちよつとヴィータちゃん何やってるの！」

「貴大！ 私たちにも！」

照れるヴィータ、僻むなのは、求めてくるフェイト、カオスの予感が……。

「君たち良い加減にしないか！」

ちょうど良い具合にクロノが乱入。

「なんだまだいたのか？なのはとこいつ等の問題は解決したもうこいつ等に問題は無いはずだが……」

「闇の書を持っている時点で問題だ！」

「オイオイ……暴論過ぎないか？」

「闇の書は危険すぎる、こっちに渡せ！」

「断る！」

「なら敵対してでも奪うだけだ！ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！」

オイオイ！広域魔法か！流石に離れているのはやフェイトには当たらんがヴィータたちが危ない！

「ザファイラ！防いでろ！」

「承知！」

俺はフライグリップを取り出し。

「変身！」

飛んできたフライゼクターがグリップと合体し。

『Henshin Change Butterfly』

電子音と共に俺は装甲を纏い仮面ライダーフライに変身し、即座に着弾する物を計算しフライゼクターで打ち落とす。

「はぁ！」

撃って撃って撃ちまくる……。そして全てを打ち落とした。

「……クロノお前攻撃したな？後悔するなよ」

とカッコよく銃口をクロノに向けてみたのだが……。

「ヴィーちゃん！私が勝ったら貴大君の事色々教えてもらおうの！」

「上等だ！かかって来いよ！」

「なのは私も手伝うよ！」

「ならば私も加勢しよう！」

「「ユーノ（君）、アルフ（さん）！」」

「「シャマル、ザファイラ！」」

「「「手伝（え・って）！！」「」」」

締まりの無い状況に。

「なあ、本当に帰って良い？」

「僕も帰りたくなってきた……」

俺とクロノを巻き込みカオスは続く。

第十九話 『対峙』 (後書き)

天「こんなはずじゃなかったのに……どーも作者の天です」

貴「何故こうなった……主人公の貴大だ」

貴「マジで何故こうなった？」

天「なんか長くなってさもう良いかなって……」

貴「バカなのか？お前はバカなのか？馬に鹿って書いてバカなのか？」

天「ちょ、それ没台詞！」

二人「銃王 海様感想ありがとうございます」

天「銃王 海様からもらった貴大のポスターは秘密裏になのは達に渡しました」

貴「えっ何それ！」

天「ご意見やご感想がありましたらいただければ幸いです、それでは」

貴「オイ作者！」

追加設定その2・・・

仮面ライダーフライ

N E C S 《ネクス》が開発したマスクドライダー3号。同組織が量産を前提に開発された試作品だが資格者の選定を廃止したためのスペックの低下が著しくワームに対抗できないとして量産は中止された。なおこのタイプはスペックの向上のため資格者の選定機能はついている。装着者は主に小日向貴大だが状況によって代わる場合がある。

必殺技は、フライゼクターのゼクターウイングをたたんで広げる事により発動する、波動化されたタキオン粒子を光弾に変換し、狙いを定めて発射する「ライダーシューティング」。別のタキオン粒子の力によって軌道を変える事ができる。クロックアップ状態でも射てるが、非クロックアップ時に発射した場合光弾の速度は遅くなる。それを利用しての通常のライダーシューティングとクロックアップ状態のライダーシューティングで敵を挟み撃つ高等技も存在する。、なおフライ及びフライゼクターの容姿はフライは頭部とベルト以外はカブトで、頭部はドレイクのように蝶々を模したフォースアイをしていてベルトはザビーやドレイクとロゴ以外共通、フライゼクターはドレイクゼクターの羽を丸めたような形で全体がドレイクゼクターより小さくなっている、色はフライ及びフライゼクター共に白。また量産を前提としていたためマスクドフォームは存在しない。

仮面ライダーモードス……N E C S^{ネクス}が開発したマスクドライダー4号。同組織が量産を前提に開発された試作品だが資格者の選定を廃止したためのスペックの低下が著しくワームに対抗できないとして量産は中止された。なおこのタイプはスペックの向上のため資格者

の選定機能はついている。装着者は主に小日向貴大だが状況によって代わる場合がある。

必殺技は、モードスゼクターのゼクターウイングをたたんで広げる事により発動する、タキオン粒子を光子に変換、モードスヤイバーの刃先に集約させ光刃を形成し、衝撃波として放つ場合もしくは連続で直接敵に斬り付ける場合の2種類の「ライダースラッシュ」が存在する、なおモードス及びモードスゼクターの容姿はモードスは色以外フライと共通、モードスゼクターは変身機構と色以外フライと共通で変身機構はサソードゼクターと共通、色はモードス及びモードスゼクター共に紫。また量産を前提としていたためマスクドフォームは存在しない。

第二十話

『暗躍する陰』

(前書き)

どうぞ。

第二十話 『暗躍する陰』

あの夜何とか家に帰った俺達はその後、順調に魔力を蒐集していった。そして……俺とシグナムはとある世界の砂漠でイレギュラーを倒し蒐集していたのだが……。

「……フェイトか」

俺が視線を向けるとフェイトがいた。

「やっと見つけたよ貴大」

「俺たちを止めるのか？」

「うん……そうだよ」

「良いだろう……なら戦おう」

と俺が構えようとした瞬間。

「……ここは私が行こう」

シグナムが俺の前に立つ。

「……分かった」

俺は観戦する事にした。フェイトとシグナムは一進一退の攻防を繰り広げていた、このまま続くかと思われたがその戦いは次の一瞬で終わりを告げた。……フェイトを貫いた腕によって。

「なっ！」

「えっ？」

「フェイト！」

俺は駆け寄ろうとするが。

「邪魔はさせんぞ！異端分子！」

突然亀のようなイレギュラー……〈トータスイレギュラー〉（以後トータス）が襲い掛かってきた。

「くっ」

俺は右手のモースサイバーを起動させる。

『Standby』

電子音と共にモースゼクターが現れる。

「変身！」

モースサイバーにモースゼクターがセットされると俺は装甲を纏い仮面ライダーモースへと変身した。

「邪魔だ！」

俺はトータスに斬りかかるが……。

「無駄だ！」

トータスの硬い甲羅に阻まれる。

「くそっ！」

何度も攻撃するが……。

「無駄だといっているだろう」

全て甲羅に阻まれる。

「ぐっ……」

俺はトータスと対峙するので精一杯だった。

シグナムSide・・・

私はテストロッサと対峙していたのだが……それは奇妙な仮面の男によって阻まれていた。

「何者だ貴様！」

「そんな事はどうでも良い……それより蒐集しろ」

「な、何を……」

「彼女を助けたいんだろ？なら迷うな」

確かにそのリンカーコアを蒐集すればページは埋まるだろう……しかし。

「断る！」

やはり私は小日向との約束を破る事は出来ない！

「愚かな……」

「愚かなのはテメエだ！」

その時装甲を纏った貴大が仮面の男を殴った。

貴大Side・・・

トータスと対峙しているとある事に気付いた。

（別に倒さなくても良いんじゃないかね？）

奴は確かに防御力は凄まじいがそれ以外はたいした事は無い。なら……。

「はぁ！」

俺はトータスに突っ込む。

「無駄な事を……」

構えるトータスと接触する瞬間……。

「よつと！」

俺はジャンプしトータスを飛び越える。

「何！」

「じゃあな！」

俺は驚くトータスを無視しフェイトの元へ向った。そして……。

「断る！」

近づいていくとシグナムの声が聞こえた。

「愚かな……」

仮面の男の発言にイラッときたので……。

「愚かなのはテメエだ！」

俺は仮面の男をぶん殴った。

「ぐはっ……」

男は吹っ飛ぶがそれを無視して俺はフェイトを抱き上げる。

「オイ！大丈夫かフェイト！」

「うん……大丈夫」

「ぐっ……貴様等……後悔する事になるぞ!」

そう言って仮面の男は去っていった。後は……。

「俺を無視しやがって!」

トータスが攻撃してくる。

「あたらねーよ!」

俺はトータスの攻撃をかわしながらトータスを蹴る。

「フェイト、シグナム手伝ってくれ」

「うん、分かった」

「ああ、良いだろう」

俺たちは構え……。

「行くぞ……ライダーズラッシュ!」

俺はゼクターウイングを上げて再び下げると。

『R i d e r S l a s h 』

電子音と共にタキオン粒子が刀身に集まっていく。そして……。

「プラズマスマッシャー!」

フェイトのプラズマスマッシャーが……。

「飛竜一閃！」

シグナムの飛竜一閃が……。

「はぁ！」

俺のライダースラッシュが……。

トータスを飲み込み消滅させた。

「……帰るぞシグナム」

「ああ……」

俺達が帰ろうとするが……。

「貴大！」

フェイトが引き止める。

「なんだ？」

「貴大は敵なの？」

「さあ……」

俺は答えをはぐらかしその場を去った。

第二十話 『暗躍する陰』（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「どーも主人公の貴大だ」

天「いきなりだがA、Sは短くなるかも……」

貴「何故に？」

天「だって戦闘模写が少ないんだもん」

貴「確かに日常はなのは側だから使えんしな」

天「そういうこと」

二人「銃王 海様、ライ様ご感想ありがとうございます」

二人「ご意見やご感想などがあればいただけると幸いです、それでは」

天「因みに次回はヴォルケンの女性陣と貴大の日常を書く予定だ」

貴「カオスの予感が……」

第二十一話 『日常くそれぞれの休日く』 (前書き)

今回はほのぼの(かな?)です。

それではどうぞ。

第二十一話 『日常くそれぞれの休日く』

俺たちは順調に蒐集して行った。そして今日は一日休む事になった。

ヴィータとの午前中・・・

俺は今ヴィータとザフィーラと一緒に町内のゲートボールをする老人の集まりに来ている。のだが……。

「ねむ……」

俺は欠伸をしながらベンチに座っていた。

《もっとシャキツとしろ……》

ザフィー等の念話に。

《うん無理》

と即答する俺。

《お前……》

《だって考えても見ろよ、ゲートボールだぜ、しかも見る側。何処が面白いか是非お前に聞きたい》

《……》

《黙るなよ……》

《スマン……》

《謝るな……》

それから暫くするとヴィータが

「おーい！ 貴大もやらねーか！」

と聞いてきたので。

「良いのか？」

と聞き返すと。

「別にかまわねーよ、だってお前退屈そうにしてたろ」

見られてたのか……。

「それじゃあ、やらせてもらおうかな」

こうして俺はゲートボールをしながらヴィータと午前中を過ごした。

シグナムとの昼過ぎ・・・

シグナムSide・・・

昼食を食べた後、少し眠っていたらしい、そして膝元に違和感を感じ下を見るとそこには小日向が寝ていた。

（何故こんな事になっているのだ？）

私はどうしこうなったのか必死に考えるが……。

（全く分からん……、しかしこれがあの猛者の寝顔か……、歳相応で可愛い……／＼／＼）

私は暫く小日向の頭を撫でながら過ごした。

貴大Side・・・

目を開けてビックリ！何と俺の目の前にはシグナムの顔があった、……何故こうなった？

「どうなってんだこれ？」

「さあな、私にも分からん」

「なら何故お前は俺の頭を現在進行形で撫でているんだ？」

「……ついな」

「……そうか」

こうしてシグナムとの昼過ぎを過ごした。

シャルとの夕方・・・

俺が目覚まして少しするとシャルが。

「買い物に付き合ってくれない？」

といってきたので。

「また親子に間違えられるんじゃないか？」

と指摘したら。

「……背に腹は帰られないわ」

と言われた。あまりにもかわいそうなので。

「ライ……久々にあれやるぞ」

『あれですね……了解しました』

「？」

俺はあれを使う事にした。

シャルSide・・・

私は今男の人と一緒に歩いています。

「これで親子なんて言われないだろ？」

まあ正体は変身魔法（以後大人モード）を使った貴大君なんです。

「でもそんな服良く持ってたわね」

貴大君は今青いジーンパンに赤いシャツ、そして黒いコートを着ています。

「備えあれば憂い無しってな、これを使えるって知ってた時から用意しておいたんだ。これなら良くて恋人、悪くて兄弟だろ？」

「ふふふ……そうね」

私はそのちょっとした気遣いが嬉しかったりします……。そして買い物をしたその帰り……。

「うへへ、やっぱりこの時期は寒いな……」

「そうね……ほんとに寒いわね」

そう言っって私が手をこすっていると突然。

「ほら」

と貴大君が手お差し出しまして来ました。

「えっ」

私が驚いていると。

「……いや、だってよ……寒そうだったからよ……これが一番適って思っ
てよ……嫌なら別にいいが……」

貴大君は手を引っ込めようとしますが。

「それじゃあお言葉に甘えて」

と私は手を握ります。

「そうか……しかしシャルの手は冷たいな……知ってたか？手が冷たいと心が温かいらしいぞ」

「それじゃあ手の暖かい貴大君は心が冷たいと？」

「まあ、そうなるな」

そう貴大君は答えましたが。

「私はそれは間違ってると思うわ、だってはやてちゃんや私たちのために頑張ってくれる貴大君の心が冷たいはずないから……」

「そうだといいがな」

貴大君ははにかみながら答えました。こんな日が続けば良いのに……。そう思えてならない一日でした。

第二十一話 『日常くそれぞれの休日く』（後書き）

天「ほのぼの上手くやれてるかな？どーも作者の天です」

貴「今回はカオスは無かったな……どーも主人公の貴大だ」

天「いきなりだが次回は時を超えるライダーが出てくる予定だ（確立50%ぐらい）」

貴「電王か……しかしその低さどうにかならんのか？」

天「……お前言っちゃダメだろ」

貴「隠すほどの事でもないだろ……」

二人「銃王 海様、ライ様ご感想ありがとうございます！」

二人「銃王 海様からいただいた日向夏みかんはそのままいただき
ました！」

二人「ご意見やご感想があればいただけると幸いです。それでは」

第二十二話 『世界を超えて俺 参上!』 (前書き)

今回は予告どおり時を越えるライダーが登場です。(電王のキャラが微妙に違うかも)

それではどうぞ。

第二十二話 『世界を超えて俺 参上!』

俺は今なのはに呼ばれて海鳴公園にいるのだが……。

「ねえ貴大君？」

「なんだ？」

「どうしてヴィータちゃんとシグナムさんがいるのかな？」

「知らん、勝手についてきた」

「お前等に貴大は渡さねえ！」

「一人で行かせて拉致られても困るのでな」

拉致ってそれは流石に……。

「チッ」

舌打ちしちゃったよこの子！

「別に拉致とか考えてないの！ただ袋に入れて一緒に家に帰るだけなの！」

それを拉致と言うんじゃないでしょうか？にらみ合うのはとヴィー
ータ。

「にらみ合うなよ……んでなのは用件はなんだ？」

このまま放置しても仕方が無いので用件を聞くことにした。

「えっつとね……」

なのはが用件を聞こうとしたその時。

「ぎゃああああああ!!」

悲鳴が聞え現場に向うと。イレギュラーとは違う亀のような怪人が人を襲っていた。

「なんなんだあいつは!」

驚くヴィータに対し。

「放っておくわけにも行かないだろ!」

俺は走り出そうとするがその瞬間一台のバイクが怪人を轢く。そのバイクから赤いメッシュが入った青年が降りた。

「はっ、久々に暴れるぜ!」

青年は何処からかベルトを取りだし腰に巻きベルトの赤いスイッチを押すそして……。

「変身!」

電車のパスみたいなものをベルトに近づけると……。

『Sword Form』

電子音が鳴り青年は黒と灰色の装甲をまとい更に赤い装甲をまといて青年は仮面ライダーに変身した。

「俺、参上!!」

決めポーズと言わんばかりに決める仮面ライダー。

「なんだありゃ？」

俺の疑問に。

「あれは電王よ」

突然現れた少女が答えた。

「アンタは？」

「私はハナ、それより貴方たち逃げない！」

と会話していると。

「こいつ等!また分離しやがった！」

と聞いたので声の方をみると亀とウサギに分離していた。

「電王とやらは大丈夫なのか？」

「ちょっとまずいかも……」

「……しゃーない、行くぜ！」

俺は木から垂れ下がってきたスパイゼクターを掴み。

「変身！」

そのままライダーブレスにセットすると。

『Henshin Change Spider』

電子音が鳴り、俺は仮面ライダースパイに変身し怪人に向かって走る。

「まさか貴方が……」

少女の呟きが聞えたが俺は気にせずウサギの方をぶん殴る。

「なんだおめえは！」

電王の問いに。

「仮面ライダースパイとでも名乗っておこう」

「へっ邪魔すんじゃねーぞ！」

「それはこっちの台詞だ！」

そう言い合った後俺はウサギに、電王は亀の方（以後亀）に向っていった。

「なんだかしらねーが邪魔をするなら消えてもらおうぜ！」

「がたがたうるさいウサギだな！おとなしく檻で蹲っとけ！」

俺はウサギの攻撃を避けては殴る、避けては殴るを繰り返す。

「ぐはっ！」

繰り返してるうちにウサギがのけぞったので俺はそのまま殴る、殴る、殴る。殴る、殴る、殴る、一切の容赦も無く、一切の慈悲も無く殴り続ける。そのうちウサギが弱ってきたので。

「これで終わりだ！ライダースティング！」

俺はスパイゼクターのフルスロットルスイッチを押すと。

『R i d e r S t i n g 』

電子音が鳴りゼクターニードルにタキオン粒子が集まっていく。そして……。

「はぁ！」

俺はウサギにライダースティングをぶちかますとウサギは爆散した。

電王S i d e・・・

途中スパイって奴が乱入してきたが関係ねえ！俺は思いっきりかっこよく戦うだけだぜ！

「だりゃ！」

俺はトータスイマジンの本体（以後トータス（本））を右手のデングッシャーへソードモードで斬りつける。相手が仰け反った所を斬る、斬る、斬る、斬る、そして蹴る。すると。

（モモタロス！そろそろ決めるよ！）

と良太郎が言ってきたので……。

「へっ、行くぜ！」

俺はライダーパス（以後パス）をベルトに近づけると。

『Full Charge』

電子音が鳴りデングッシャーにフリーエネルギーが溜まっていき。

「必殺！俺の必殺技パート2！」

俺がデングッシャーを両手で持つとデングッシャーから先端が離れるそして。

「おりゃ！」

俺がデングッシャーを振り下ろすのと同時にオーラソードが勢い良く降下してトータスに当たり爆散した。

貴大Side・・・

怪人を倒し変身を解除した俺と電王はお互い向き合い。

「僕は野上良太郎よろしくね」

「俺は小日向貴大だ」

お互い手を取り合った。

第二十二話 『世界を超えて俺 参上!』 (後書き)

天「ちゃんとモモタロスを書けてるかな? どーも作者の天です!」

貴「説明するモモタロスに違和感がある……どーも主人公の貴大だ!」

天「まあそれはしょうがないと割り切っていただければ助かります」

貴「さて電王編はあと一話予定しているんだよね?」

天「ああ……次回は他のタロウズと電王のそれぞれのフォーム&デ
ンライナーが登場予定です」

貴「因みにNEW電王とゼロノスは出ませんのであしからず」

二人「銃王 海様ご感想ありがとうございます」

二人「銃王 海様より冷や汁をいただきました後で食べます」

二人「ご意見やご感想があればいただけると幸いです、それでは」

天「電王のタグと原作名って追加した方が良いのかな?」

貴「知らん」

第二十三話 『俺たちは最初からクライマックス!!』 (前書き)

電王編後編です。

ちよつと長いかも……。

ライ様から頂いたものも今回使用しております。

それではどうぞ！

第二十三話 『俺たちは最初からクライマックス!!』

あの後俺は野上と話をし今デンライナーにいるのだが……。

「ねえ？その赤い布何？」

と聞いてきたのは青い亀……へウラタロスだ。

「マグダラの聖骸布って言って男には絶対逃れられない布だ」

「親切な人がくれたの♪」

「俺にとっては悪魔に見えたがな……」

「貴大も大変だねえ、釣ったら今度は物理的に釣られるんだから」

「釣った覚えは微塵も無いんだがな……」

※このときウラタロスは思った。

（自覚が無いんじゃない彼女等も大変だね……）

「そろそろ良いですかね？」

と後ろからオッサン……へオーナーが話しかけてきた。

「ああ、かまわねーよ、そもそもなんであんた等の世界の怪人……
へイマジンがこの世界に居るんだ？」

「時間の流れから外れて別の世界辿り着くのはそう珍しい事ではありません、ただ問題なのはそのイマジンたちがこの世界の怪人……イレギュラーと手を組んだと言うのが問題なんです」

「成る程な、確かにそれは俺の分野だな……ところで……お前等一体何やってんだ？」

後ろを見ると4体のイマジンがじゃんけんをしていた。

「何ってじゃんけんに決まってんだろ」

「センパイ……そういう事じゃないって、貴大は何でじゃんけんをしてるかって事が聞きたいんだよ」

「なんだそれならそう言えよ」

「モモの字、それぐらい気付かなアカンな」

「やーいモモタロスのバーカ♪」

「うるせーぞ！クマに小僧！」

「んで……なんでじゃんけんやってんだ？」

「最初に誰が戦うかを決めてるんだよ」

俺の疑問にウラタロスが答えた。じゃんけんの結果はモモタロスが勝った。暫くすると俺の携帯が鳴る電話の相手はシャマルだった。

「どうしたシャマル？」

『それがサーチャーにイレギュラーの反応がすごく映って……』

「分かった、すぐ向う」

俺は場所を聞き携帯をきる。

「さて……お前等どうやら本命がかかったようだぜ」

「それじゃあ行こう！」

野上の言葉に。

「おう！」

全員が頷いた。そして現場に着き。

「戦力としてはこんなもんか？」

今集まった戦力は俺と野上、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、なのは、ヴィータ、シグナムそしてなのはに呼ばれたフェイトだ。因みに俺はカマードゼクターを呼び戻した。そして敵にはロバのようなヘドンキーイレギュラー、猫のようなヘキヤットイマジン、ニワトリのようなヘチキンイレギュラー、犬のようなヘドッグイマジン、後は大量のモールイマジンとダミーイレギュラーがいた。

「来い！相棒！」

「おう！」

俺がカマードゼクターを掴み。

「行くよ！モモタロス！」

「いつでも良いぜ！」

野上がベルトを巻き赤いボタンを押し。

「「変身」」

俺がカマードゼクターをライダーベルトに装着し、野上がベルトにパスをセタツチする。

『H e n s h i n』

『S w o r d F o r m』

俺はヒヒロノカネの装甲を野上がオーラアーマーを纏いそれぞれ仮面ライダーカマードへマスクドフォームと仮面ライダー電王へソードフォームに変身した。

「俺、参上！言つとくが俺は……」

モモタロスの台詞を……。

「最初からクライマックスだぜ！」

俺が横からかつさう。

「あー！お前！俺の台詞取りやがって！」

「だってウラタロスが……」

「カメ！お前の仕業か！」

「僕じゃないよ！確かに貴大にセンパイの決め台詞を教えてください……」

「貴大テメエ！」

「覚えてないな」

「後で覚えとけ！」

「うん無理」

「ふざけやがってお前等やっちゃまえ！」

痺れを切らしたのかイマジン、イレギュラー軍団が向かってきた。

「ほら遊んでないで行くぞ！」

俺の言葉に。

「原因はお前だろうが！」

ぶち切れるモモタロス。

「にやは……」

苦笑いするなのはに。

「センパイも貴大もいつまでも遊んでないで行くよ！」

締めに入ったウラタロス。

「しゃーねー行くか……」

「今日の俺はイライラしてんだ思いっきり行かせてもらうぜ！」

そう言っただけ俺はドッグイマジンとチキンイレギュラーに電王がキャットイマジンとドンキーイレギュラーに他は敵の量産型軍団（もう面倒なので）に向っていった。

カマードバトルSide・・・

「死ねえ！！！」

仕掛けて来たドッグイマジンに。

「お前がな！」

かわしてカウンターキックを入れる。

「コケっ……！」

叫びながら向ってくるチキンイレギュラーに。

「人語を喋れニワトリ野郎！」

ラリアットを喰らわす。

「さっさと終わらせる、キャストオフ！」

カマードはゼクターホーンを倒す。

『Cast Off Change Mantis』

装甲が弾けカマードは〈ライダーフォーム〉に変身完了する。

「殺す！」

「コケー！」

カマードは2体の攻撃をかわして殴る、かわして殴る、かわして殴るそれを繰り返す事50回2体は段々弱ってくる。

「そろそろ決める！」

カマードはフルスロットルスイッチを押していく。

『one two three』

そしてゼクターホーンを一度戻し。

「ライダーキック！」

そのまま倒すと。

『Rider Kick』

電子音と共にカマードの右足にタキオン粒子が集まっていく。

「はぁ！」

カマードはそのまま2体に向け飛び回し蹴りを食らわし2体は吹き飛んだ。

電王バトルSide・・・

「うりゃ！」

電王はデンガッシャーの〈ソードモード〉でキャットイマジンとドンキーイレギュラーを斬って斬って斬りまくる。すると……。

「モモの字交代や！」

「ちょっと待て！まだ早い……」

キンタロスが電王に入りモモとロスが追い出されると。

『Ax Form』

電子音が鳴り電王は〈アックスフォーム〉にフォームチェンジした。

「俺の強さにお前等泣いた！」

決め台詞と同時に紙吹雪が舞う。

「誰が泣くか！」

キャットイマジンが爪で電王に攻撃するが。

「なんやそんなもんか？」

電王には全く効いていない様子。

「これならどうだ！」

ドンキーイレギュラーが電王に蹴りを喰らわすが……。

「全然やな」

そのままデンガッシャーへアックスモードでドンキーイレギュラーを斬る。

「ぐおっ……」

ドンキーイレギュラーがのけぞった隙に。

「これで終わりや！」

電王がパスをベルトにセタタッチすると。

『Full Charge』

電子音が鳴りデンガッシャーにフリーエネルギーが集まっていき。

「ふん！」

電王はデンガシャーを放り投げ相撲のように構えその後飛んでデンガッシャーを掴み。

「ハア！」

一気にドンキーイレギュラーに振り下ろしドンキーイレギュラーは吹き飛んでいく。

「……ダイナミックチョップ」

「クソ！これならどうだ！」

キャットは素早い動きで電王をかく乱する。

「なっ、なんや！追いつかれへん……」

電王は動きについていけず混乱しているようだ。

「クマちゃん僕がやる！」

「ほな任せた出リュウタ！」

今度はリュウタロスが電王に入りキンタロスが出てくる。

『Gun Form』

電子音が鳴り電王は〈ガンフォーム〉にフォームチェンジした。

「お前倒すけど良いよね？ 答えは聞かないけど……」

そう言って電王はデングッシャーへガンモードでキャットを撃つが……。

「そんなもんは当たらん！」

軽快なステップで電王の銃撃を次々にかわしていく……。

「もー！ 何で当たらないの！」

電王は攻撃が当たらない事にイライラしている。

「どうやらリュウタやキンちゃんとは相性が悪いみたいだね……リュウタあいつは僕がやるよ」

「しょうがないな、カメちゃん後はよろしく」

そう言ってリュウタロスとウラタロスが交代する。

『R o d F o r m』

電子音が鳴り電王はへロッドフォームにフォームチェンジした。

「お前……僕に釣られてみる？」

「つれるもんなら釣ってみろ！」

キャットイマジンも素早い動きでロッドフォームに攻撃を仕掛ける。

「うわっ……」

電王が仰け反ると……。

「死ねい！」

追撃を仕掛けるが……。

「なんて……ね！」

攻撃を読んでいたかのようにデングッシャーへロッドモードで敵を突き刺す。

「ぐおっ！」

キャットイマジンは転がる、電王はそれを逃さず。

「やつ、はっ！」

デングッシャーで叩く、叩く、たまに突き刺すを繰り返しキャットイマジンを弱らせていく……。

「そろそろ三枚に下ろすか……」

パスをベルトにセタツチし

『Full Charge』

電子音が鳴りデングッシャーにフリーエネルギーが集まっていくそして……。

「ハッ！」

電王はデンガッシャーをキャットイマジンの投げるとキャットイマジンに入っていき亀の甲羅みたいなもの……へオーラキャストが現れキャットイマジンの動きを封じる、そしてそのまま……。

「やあ！」

電王はキャットイマジンに飛び蹴り……へデンライダーキックを喰らわすとキャットイマジンは吹き飛んだ。

バトルSide・・・

それぞれが敵を倒し集まると大ダメージを負った4体が。

「このままじゃやられちゃう……」

「やれをやるか？」

「そうだなあれしかないな」

「あれだなよーし！」

「」「四位一体!!」「」「」

4体が光だしそこに現れたのは胸に犬の顔がありロバの顔が左肩にニワトリの顔が右肩で頭部が猫の怪人……へブレイメンイマギユラ

ⅴが立っていた。

「……なんと言おうかすごいな」

苦笑いのカマードすると

「何あれ！てんこ盛りだ！」

はしゃぐリュウタロス。

「そっちがその気ならこっちもやりますか」

そう言うウラタロスに。

「本家の力見せてやろうぜ」

モモタロスが。

「いつでもいけるで！」

キンタロスが。

「わーい！こっちもてんこ盛り！」

リュウタロスがそれぞれ返す。

「それじゃ行くよ！」

電王が赤い携帯……へケータロスⅴを取りだしボタンを押していく。

『M o m o U r a K i n R y u』

そしてケータロスベルトに装着すると……。

『C l i m a x F o r m』

電子音が鳴りイメージンたちが電仮面に変わりそれぞれ胸と左右の肩に装着され最後に頭部の電仮面が剥けて電王はヘクライマックスフォームにフォームチェンジする。

「全く……お前等もかよ……」

カマードはそう言いながらハイパーゼクターをつかみ。

「ハイパーキャストオフ！」

腰の左側にセットしてハイパーゼクターのゼクターホーンを倒すと。

『H y p e r C a s t O f f C h a n g e H y p e r M a n t i s』

電子音と共に装甲はカマードプロテクターに変わり更にカマードホーンが巨大化しカマードはヘハイパーフォームにパワーアップした。

「行くぜ貴大！」

モモタロスの問いかけに。

「ああいつでも良いぞ」

とカマードが答える。

「それじゃあ行くぜ！必殺！」

『Charge And Up』

「俺たちの必殺技！」

『Rider Kick』

「Wライダーバージョン！！」

カマードのライダーキックと電王のポイスターズキックがブレーメンイマギュラーに直撃しブレーメンイマギュラーは爆散、消滅した。

貴大Side・・・

イマジンとイレギュラーの軍団を倒した俺たちは電王の面々と別れの挨拶をしていた。

「これで終わりか……」

「へっそんな顔すんなよ！俺達が必要ならいつでも呼びな！いつでも駆けつけて一緒に暴れてやるからよ！」

「お前達こそ必要なら俺を呼べ！いつでも駆けつけて一緒に暴れてやるからよ！」

俺たちはそういい合いながら別れた、それぞれの世界を守るために。

第二十三話 『俺たちは最初からクライマックス!!』 (後書き)

天「どーも作者の天です」

貴「主人公の貴大だ」

天「これからもライダーネタ（電王も含む）をちよくちよくやって行きたいと思います」

二人「ライ様、銃王 海様ご感想ありがとうございます!」

二人「ライ様よりマグダラの聖骸布、銃王 海様よりゴーグル頂ました!ありがとうございます」

二人「ご意見やご感想などがあればいただけると幸いです。それでは」

第二十四話

『完全なる力』

(前書き)

今回はグロイと思われる方もいるかもしれませんがご了承ください。

それではどうぞ。

第二十四話 『完全なる力』

電王と共に戦った日から数日後はやてが倒れ入院し更に数日がたち、シグナム達がなのは達と戦闘していると聞いて病院に駆け込んだのだが……。

「なんだこれは！」

そこにはバインドで縛られたヴィータ、シグナム、シャマル、なのは、フェイトと仮面の男が2人いた。

「テメエ等の仕業か！ 変身！」

フライグリップを左手で持つとフライゼクターが現れセットされる。

『H e n s h i n C h a n g e B u t t e r f l y 』

俺はすぐさまフライゼクターで仮面の男を迎撃しようとするが……。

「貴様の相手は私だ！」

いきなり背後からクワガタのようなイレギュラー……へスタッグイレギュラー（以後スタッグ）が攻撃を仕掛けてくる。

「グガッ……」

「貴様はおとなく見ている！」

俺はスタッグに壁に押し付けられ拘束されその際にフライゼクター

を落としてしまう。

「……さては始めるか」

そういう男の手には闇の書が現れそして。シグナム達が苦しみだしその胸からリンカーコアらしき物が現れる。

「最後のページは不要になった守護騎士自らが差し出す」

男がそういうとシャルシグナムの順に消えていく。

「シャル！シグナム！なんなんだ……何なんだテメエ等は！」

「消え行く貴様が知る必要はない……」

ヴィータも消えかけるが……。乱入したザフィーラによって阻止されるが。

「そういえばもう一匹いたな」

「テメエら良い加減に……しろ！変身！」

俺はフライの変身を解き、即座にモードスヤイバーにモードスゼクターをセットする。

『Henshin Change Moth』

「なに！」

驚いているスタッグにモードスゼクターによる連撃を喰らわし俺は

そのままヴィータの前に出る。

「コイツだけでも守ってみせる！」

と俺は構えるが。

「もはや目障りだ消えろ……」

俺の腹からスタッグの手が出てくる。その周りには赤い何かが……。

「ガッハッ……」

口からも赤いものが……そうかこれは俺の血なんだな……。その時腹から手を引き抜かれ俺は落下していく。

（俺死ぬのかな……）

俺は落ちていく中そんな事を思う。

（あいつ等を守れないのか……いやまだ終わっていないじゃないか
！）

俺はまぶたを開き。

「来い！カマードゼクター！」

俺が叫んだその時上空からカマードゼクターが降下してくる。

「大変な事になってるな！」

「いいから行くぞ！」

「おう！」

俺がベルトを出現させると俺の傷が一瞬で完治する。そしてカマードゼクターを掴み。

「変身！キャストオフ！」

『Henshin Cast Off Change Mantis』

俺はカマードに変身し、そのままハイパーゼクターを掴み。

「ハイパーキャストオフ！」

腰の左側にセットしハイパーゼクターのゼクターホーンを倒す。

『Hyper Cast Off Change Hyper Mantis』

装甲がカマードプロテクターに変わりカマードへハイパーフォームへにパワーアップし俺は地面すれすれのところで飛翔した。

・・・

病院の屋上に戻るとそこには銀髪の女、なのはとフェイト、そしてスタッグがにらみ合っていた。

「なのは！フェイト！」

「「貴大（君）！！」」

「どうなってんだこれは？」

「多分だけど闇の書の暴走」

俺の疑問にフェイトが答えてくれた。

「つまりあれははやてなのか？」

「うん」

「貴様に邪魔はさせん！」

スタッグが向ってくるが。

「お前等あいつを……はやてを止めてやってくれ」

「貴大は？」

「奴を潰してから行く」

「分かった気をつけてね」

「ああ……」

なのはとフェイトは銀髪の女に向かい俺はスタッグに向っていった。

「また殺してやるよ！」

「邪魔なんだよボケが！」

俺とスタッグの間で幾多の攻防が繰り広げられる。そして俺がスタッグの隙について蹴りをいれ距離を開ける。

「くそ……なんなんだ奴は……さっきと全然違う……」

「御託は良い……さっさとかかって来いよ！」

「ウォーーーーー！！！」

スタッグは向ってくるが……。

「遅い！」

俺はかわして回し蹴りを喰らわす。

「さあ……とつとと終わらせようか……」

そう言って俺が右手を上げると。空間を切り裂き黄金の剣のようなゼクター……へパーフェクトゼクターがやってくる。俺はそれを掴みそのまま緑のフルスロットルスイッチを押すと。

『kamard Power』

電子音が鳴りパーフェクトゼクターに緑色の雷が走る。そしてパーフェクトゼクターのトリガーを引くと。

『Hyper Blade』

電子音と共に光子の刃がパーフェクトゼクターを包む。

「ぐっ……あああああ!!」

スタッグが攻撃してくるが。

「ハッ！」

その攻撃は届くことなくパーフェクトゼクターに引き裂かれた。

「ぐああああああああああつあああああ!!!!」

スタッグは叫びながら消滅した。

「待ってろよ!はやて!」

俺はやての元に向った。

第二十四話

『完全なる力』

（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「主人公の貴大だ」

天「今回はパーフェクトゼクターの説明を」

貴「と言ってもカブトの奴とカマードの奴の違いだけだがな」

天「カマードのパーフェクトゼクターはフルスロットルスイッチ（刀身の根元の四つのスイッチ）が左上が緑、左下が黄色、右上が白、右下が紫だ」

貴「半分は同じ色なんだな」

天「ああ、それでカブトパワーがカマードパワーにザビーパワーがスパイパワーにドレイクパワーがフライパワーにサソードパワーがモードスパワーに該当するんだ」

貴「因みにスパイ、フライ、モードスはこのパーフェクトゼクターのために造られたと言っても過言ではない」

天「それぞれのライダーは登場直前に考えたからな」

二人「銃王 海様ご感想ありがとうございます」

二人「銃王 海様よりいただいたピーマンはそのうち使わせていただきます（舞台裏で）」

二人「ご意見ご感想などがありましたらいただけると幸いです、それでは」

第二十五話 『終焉』 (前書き)

ちよっといつもより長いかも。

それではどうぞ。

第二十五話 『終焉』

スタッグを倒した俺はなのはやフェイト、はやての元に向うとはやて……いや〈防衛プログラム〉となのは、アルフ、ユーノが戦っていた。

「なのは！」

「貴大君！」

「フェイトはどうした？」

「それが戦ってる最中に飲み込まれちゃったの」

「クソっ厄介な……」

俺は防衛プログラムとはやてに向って叫ぶ。

「やめろお前等！何でこんな事をする！」

「我が主はこの世界が……自分達の愛するものを奪った世界が悪い夢であって欲しいと願った。我はただそれを叶えるのみ主には穏やかな夢の内で永久に眠ってもらい、そして愛する騎士を奪ったものには永久の闇を！」

「……ふざけるなよ！」

「何？」

「ふざけるなっっていってんだよ！何が穏やかな夢だ！ふざけるな！あいつ等が望んだのはそんな事じゃない！あいつらが願ったのははやて……お前の笑顔だ！そんなあいつ等の願をテメエの身勝手に踏みにするなら……俺はお前をそこから引きずり出してその腐った根性叩きなおしてやるよ！」

「主の願を邪魔するのならお前とて排除する！」

「上等だ！なのは下がってろ！」

「わ、分かったの！」

そう言っただけなのはが離れていった。

「さて……こっちの準備は整った……はじめようぜ！」

俺は右手のパーフェクトゼクターをへガンモードにして防衛プログラムにエネルギー弾を撃つ。威嚇射撃などしない。最初から当てる気で撃つ！

「ブラッティダガー……」

黒いダガーみたいなのが飛んで来るが俺はそれを全て撃ち落とす。そんな攻防を繰り返すうちに防衛プログラムは俺から距離をとる。

「なんだ？」

俺が疑問に思っていると防衛プログラムの手の先に魔力が集まりだす。

(……この集まり方、やっべ！スターライトブレイカーかよ！)

俺は咄嗟にパーフェクトゼクターをソードモードに切り替え紫のフルスロットルスイッチを押す。

『M o r d s P o w e r』

電子音が鳴りパーフェクトゼクターにタキオン粒子が集まる。

「スターライトブレイカー……」

防衛プログラムからスターライトブレイカーが放たれた瞬間俺はパーフェクトゼクターのトリガーを引く。

『H y p e r S l a s h』

「はぁ！」

俺はそのままパーフェクトゼクターでスターライトブレイカーを切り裂く。そしてスターライトブレイカーは二つに割れ消滅した。

「！」

防衛プログラムが驚いている隙に俺は接近し斬撃を放つ。

「くっ！」

防衛プログラムが防御するが耐え切れず吹っ飛ぶ。

「よし！このまま……」

と俺が追撃をかけようとしたら。

《貴大君聞えるか?》

とはやてが念話を送ってきた。

《やっと起きたか、ねぼすけめ》

《おかげさまでなそれでお願いがあんねんけど……》

《なんだ?》

《もう一発ガツンときてくれへんか?》

《何お前そういう趣味だったの?》

《違うわ! もう少して管理権限を取り返せそうなんや! だから……》

《……分かった、それじゃあ一発ドデカイのぶち込んでやるぜ!》

《えっ……いややわ……そんな／＼／＼》

《変な意味じゃねーよ!》

《冗談やって》

《こんな時に冗談とか……》

《それじゃよろしく願いします》

《任せとけ!》

俺はパーフェクトゼクターの黄色のフルスロットルスイッチを押す。

『Spy Power』

パーフェクトゼクターの先端にタキオン粒子が集まる。そしてトリガーを引くと。

『Hyper Sting』

電子音になり俺は防衛プログラムに対しハイパーステイングを喰らわすと爆煙が起こりその中からフェイトとはやてそしてヴォルケンリッターが出てくる。

「フェイト! はやて! それに!」

「心配をかけたな小日向」

「全くだ、シグナム」

「貴大無事だったんだな!」

「当たり前だあの程度で俺は死なんぞヴィータ」

「貴大君……」

「無理に言葉にしなくてもいいさシャマル」

「貴大君！ホンマにありがとうな！」

「お前を助けるって決めてたからな当然の事をしただけだよ、はやて」

「札を言うぞ」

「もうちょっと柔軟に出来ないのか？ザフィーラ」

「水を差すようですまないが……」

「分かってるあれだろ？」

俺は黒い淀みを挿す。

「そうだそれでプランは二つあるんのだが……」

とクロノがカードを取り出して。

「一つ極めて強力な凍結魔法で停止させる、もう一つは軌道上に待機しているアースラの魔道砲アルカンシエルで消滅させるこれ以外に他にいい手は無いか？闇の書の主とその守護騎士のみんなに聞きたい」

クロノが言うのとシャルが手を上げ。

「ええっと最初のは多分難しいと思います、主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

次にシグナムが。

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん」

次にヴィータが腕でバツを作りながら。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんなところでアルカンシエル撃つ
たらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃなか！」

その言葉を聞いたのはが。

「そ、そんなにすごいのか？」

なのはの疑問にユーノが。

「発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔道砲って言ったら分かる？」

「そんなもん問題外だ！」

「なら他にプランあるのか？」

「簡単な話だお前等がコアをむき出しにさせた後俺がぶった切って
消滅させればいいだけだろ？」

「それは無茶苦茶すぎる！第一近づいたら侵食されるって聞いてなかったのか！」

「そこはコイツがあるから問題ない」

俺はハイパーゼクターを指す。

「そっか！その手があったか！」

どうやらユーノは気付いたようだ。

「そう、俺にはハイパークロックアップがある、だからそれを使えば」

「侵食される前にコアを破壊できるか……」

クロノも納得したようだが……。

「絶対ダメ（だ・や）！！」

アルフ以外の女性陣全員に止められた。

「なんで！」

思わず関西弁が入ってもうたがな。するとなのはが。

「だってまた貴大君は無茶するんでしょ！」

次はフェイトが

「貴大はいつだって無茶しすぎだよ！」

ヴィータが。

「お前また無茶して今度こそ死んじゃったらはやてもアタシも困るんだよ！」

シグナムが。

「お前に死なれたら主はやてが悲しむ……それに私もな」

シャマルが。

「貴大君はいつも無茶しすぎです！みんなの事も考えてください！」

最後にはやてが。

「無茶して貴大君に何かあったらみんな悲しむねんで！」

みんなの言葉に渋々。

「……んじゃコアだけ宇宙そらにあげてアルカンシエルで消滅させれば
？」

「それを先に言（え（よ）・ってよ・わな）！！」

今度は全員に突っ込まれました。

「それじゃあみんな行こう！」

クロノの掛け声に

「おう！」

全員が答える。すると黒い淀みから闇の書の闇が動き出す。そのあとすぐにエイミィさんが。

『みんな大変だよ！あれにはバリアが12枚張られてるの！』

「！」

全員（俺以外）が驚いている。

「どうするの？」

なのはの問いに。

「しゃーない俺が出来るだけやってみるから後は頼んだぜ！」

そうやって俺はパーフェクトゼクターをへガンモードへに変えハイパーゼクターのゼクターホーンを倒す。

『Maximum Rider Power』

そのままパーフェクトゼクターのフルスロットルスイッチを順番に押していく。

『kamard Power』

『Spy Power』

『Fly Power』

『Mords Power』

『All Zector Combine』

「マキシマムハイパーサイクロン！」

俺が引き金を引くと。

『Maximum Hyper Cyclone』

電子音が鳴り、竜巻状の超エネルギー波が発射され魔法障壁を1枚2枚3枚と次々に壊して行き6、7、8と勢いは止まらず10、11そして12枚全て破壊しそのまま本体に直撃しコア以外を消し飛ばした。

「……」

全員呆然と見ている。

「やっちゃたぜ！」

俺の言葉にクロノが

「僕が言った言葉覚えているか？」

「『それじゃあみんな行こう！』だっけ？」

「君にはみんなって言葉が分からないのか？」

「だから言ったじゃないか『やっちゃたぜ！』って、テヘ♪」

「君を完全凍結してやる！」

「やったぜ！」

「ああ！」

俺とクロノがハイタッチをすると微妙な空気が流れる。

「あ、あれ？」

困惑する俺とクロノに全員が。

「クロノ（君）、貴大（君）ちょっとOHANASHIしよう（か・ぜ）！！！！」

「す、すみませんでしたー！！！！」

このあと俺とクロノはキッチリOHANASHIされました。そして闇の書事件は終息に向っていく。

第二十五話 『終焉』（後書き）

天「どーも作者の天です！」

貴「……主人公の貴大だ」

天「貴大とクロノだけで倒しちゃうという展開どうでしょう」

貴「あれのせいでOHANASHIをされるハメになったんだぞ！」

天「実はあれ最初は貴大一人だったんですけど勢いとその場のノリでクロノも入れてみました」

貴「クロノ南無」

二人「ライ様、銃王 海様ご感想ありがとうございます」

二人「銃王 海様より鶏いただきました！裏で何かにして食べます」

二人「ご意見やご感想などがあればいただけると幸いです、それでは」

貴「次回でA' S編終わりか……」

天「残念だがもう少し続く予定だ！」

貴「マジ？」

天「当然」

第二十六話 『救える命と蘇る命』 (前書き)

今回はご都合主義全開です！

それではどうぞ。

第二十六話 『救える命と蘇る命』

闇の書の闇を倒したあと俺はリインフォースから相談を受けた。

「お前を消す手伝いをしろだど？」

「ああそうだ」

「何故だ？」

「私がいればいずれ闇の書の闇は復活してしまう」

「……はやてには？」

「主には言っていない」

「なら問題外だ」

「そうか……」

リインフォースは立ち去ろうとするが……。

「ちょっと付き合え」

「？」

俺はリインの肩を掴み。

「ハイパークロックアップ」

『Hyper Clock Up』

俺はハイパークロックアップを使いリインフォースをある場所に連れて行く。

????.

『Hyper Clock Over』

俺達がある場所につくといきなり。

「心臓に悪い現れ方をするんじゃないわい！」

爺（神）が文句を言ってきた。

「アンタに頼みたい事がある」

「無視するのか……っで何のようじゃ？」

「コイツを正常にして欲しい」

「！」

リインフォースは驚いているようだが爺は髭を撫でながら。

「随分と無茶なこと言いうの……」

「出来るんだな」

「何故そう思う？」

「しいて言うならアンタの余裕そうな顔だ」

「……まあちょうど探していたところだからいいがお」

「探していた？何をだ？」

「お前が持つスパイゼクター、フライゼクター、モードスゼクターの資格者になりえる人間じゃ」

「どういう事だ？」

「最近イレギュラーの動きも活発になりつつある……だから正直その三つを遊ばせておく余裕がなくなったのじゃよ」

「成る程な……」

「それでリインフォースよ、おぬしが仮面ライダーモードスとして戦うのであれば体を正常にしてやろう」

「……」

爺の問いかけには答えず黙ってしまうリインフォース

「どうした？」

「……本当にいいのだろうか？」

「何がだ？」

「私は存在していて本当にいいのだろうか？」

「良いんじゃないか」

「だが私は……」

「関係ねーよ」

「えっ？」

「過去つてのは所詮は歴史、もちろん忘れてはいけませんがそれと同時に縛られてもいけないものだ、未来つてのは目標、考えていないのもダメだがそれにとらわれすぎてもいけない」

「……」

「確かに過去も未来も大事だがそれよりも大事なものがある、それは現在^{いま}だ、だからお前は現在^{いま}を生きろ！過去でも未来でもなく現在^{いま}をだ、今後それを邪魔する奴がいるかもしれない……だが安心しろ俺がそいつ等からお前を……いや、お前等を守ってやる！」

「わ、私は……」

リインフォースは突然泣き出す。

「オ、オイ……な、泣くなよ……」

戸惑う俺に。

「ス、スマン……嬉しくて涙が止まりそうにない……」

リインフォースは暫く泣き続けた。そして泣き止んだ時に。

「そろそろいいかのお？」

と爺が聞いてきた。

「す、すまないそれでその話を受けよう」

「そうか……それじゃあ、ホイ！」

爺の杖が突然光りその光はリインフォースを包み暫くするとやんだ。

「何か変わったのか？」

「ああ……闇の書の闇がなくなっている」

「そうか、なら帰るか？」

「ああ」

俺たちは帰ろうとしたとき。

「ちょっと待ってくれんかの？」

爺が呼び止めた。

「なんだ？こっちの用はもう済んだぞ？」

「今度は僕から頼みがあるのじゃが……」

「なんだ？」

「とある少女を預かってくれんかの？」

「何でだ？」

「彼女はクイーンゼクターの資格者にしたんじゃがのなにぶん幼くてのお……」

「クイーンだと！……んで、そいつは何処にいる？」

「こちじゃよ……おーい！」

爺の声に現れたのは何と……

アリシア・テストロッサだった。

「……オイ爺」

「そんなに睨まんでくれ……お主の気持ちもわかるがクイーンには彼女が最良なんじゃよ……それに戦士として育てるにはお主の元が一番なんじゃ」

「しかし……」

俺が戸惑っていると。

「……私別に恨んでないよ」

「えっ？」

「私別に恨んでないよ、だってあれはフェイトのためにやったんだよね？なら恨む理由なんてないよ」

「そうか……なら爺、その話し受けよう」

「ふおっふおっふおっふお……それともう一つ儂からの最後のプレゼントじゃ」

「最後だと？」

「そうじゃ儂は干渉し過ぎたからのお……これ以上の干渉は正直厳しい……」

「そうか……で？プレゼントってなんだ？」

「ふむ……実はおぬし等の世界にあるゼクターを送っておいた」

「あるゼクター？」

「お主も知らんものじゃがそれは奴を相手にするうえでの切り札になるじゃろう」

「奴って誰だ？」

「……残念じゃが時間じゃ……それじゃあの！」

そういうと突然、爺の杖が光りだした。

「ちょ！お前！爺！」

俺はその言葉を最後に意識を失った。

・・・

俺は気付くと元いた場所にいた。

「くっ……ここは？」

「元の部屋だな……」

と確認したとき扉が開きフェイトが入ってきた。

「貴大！大変……」

フェイトが固まる……。俺はフェイトの視線を追ってみるとそこにはアリシアが居た。

（あっ、やべ……）

「……貴大ということなの？」

「……後で話すがまずはお前の用件が先だ」

「そうだった！はやてたちが！」

俺はフェイトからはやてたちが闇の書事件の犯人として逮捕されると聞いて飛び出した。

・・・

俺はアースラの司令室に入って。

「どういう事だ！」

と聞くと。クロノに

「何がだ？」

と返された。まあ当然か……。

「はやてたちが闇の書事件の犯人にされるって話だよ！」

「貴大君別にええんよこのこたちの罪は……」

「ちょっとはやては黙ってろ、悪いがクロノこの件はもみ消してもらうぞ」

「出来るわけがない！」

「いや！ やってもらうそれにこっちはお前等がもみ消さなきゃならない理由があるからな」

「どういう事かしら？」

リンディさんの疑問に俺は。

「一つ目は今回ヴォルケンリッターはなのは達以外は襲っていないしそのなのは達は謝罪に応じているので実質人は襲っていない、二つ目ヴォルケンリッターがイレギュラー討伐に貢献した事だ例えば闇の書蒐集のためとはいえイレギュラーどもを倒した事には変わりないからな、そして三つ目これは管理局員であるギル・グレアムとその使い魔がイレギュラーと手を結んでいた事そして最後……」

「まだあるのか！」

驚くようなクロノにとどめの一つを追加する。

「闇の書の暴走の原因が管理局にあるって事だ」

「なんだって！」

「証拠ならここにあるぞ、ほれ」

俺はクロノに証拠のディスクを渡す。

「……もみ消さない場合はどうなる？」

「管理世界全部にこれを流す」

「!、そんな事をすれば……」

「管理局は終わるだろうな……さあどうする?」

「……分かりました」

「艦長!」

「しょうがないわクロノ……しかしそんなもの何処で?」

「カマードゼクターに調べてもらった、んじゃそういうことであとはよろしく」

と俺ははやてを連れて司令室を出た。

・・・

俺ははやての車椅子を押しているとはやてが。

「ありがとうな貴大君」

「お前等を守るって約束したからな気にするな」

「うん……なあ貴大君」

「どうしたはやて?」

「私決めた!」

「何をだ？」

「私管理局に入る！」

「……なぜか聞いていいか？」

「私は自分みたいな境遇の人たちを助けたいんや！貴大君がしてくれたいに」

「……そうか」

俺たちはこのあと終始無言だった。

・
・
・

はやてを送った後自分の部屋に戻ると。

「あっ忘れてた」

アリシアの事について洗いざらい吐かされたのはまた別の話。

第二十六話

『救える命と蘇る命』（後書き）

天「祝！リインフォース生存&アリシア復活！どーも作者の天です！」

貴「本当に良いのか？どーも主人公の貴大だ」

天「今回は仮面ライダークイーンの説明だ！」

貴「仮面ライダークイーン……ネクスNECSが設計したマスクドライダーシステム5号の予定だったが様々な問題があり開発が中止されたライダー。必殺技はザビーと々手順で放つライダースティングモチーフはライダーフォームは女王蜂でマスクドフォームは蜂の巣。容姿はマスクドフォームはザビーと色以外同じでライダーフォームは色が違い首の周りにファー（モケモケ）がついている。基本カラーはピンク」

天「あと私の二作目仮面ライダーWと魔法先生ネギま！のクロスオーバー『魔法先生ネギま！〜翼を持つ勇者〜』を読んでいただければ幸いです」

天「更に全てを繋ぐ小説『闇遣いの守護者』も随時計画中です、更に只今真恋姫無双と仮面ライダー電王のクロスオーバー（名前未定）も計画中です」

天「ライ様感想ありがとうございます」

天「ご意見やご感想などがあればいただけると幸いです。それでは」

第二十七話

『神の領域』

(前書き)

最近スランプ気味です……。

それではどうぞ。

第二十七話 『神の領域』

アリシアの事を家族とフェイトたちに話し、納得してもらった俺はサーチャーに大量のイレギュラー反応が現れた場所にリインフォースと共に向った。

「オイオイ……」

今俺の目の前にはダミーやその他の成長体が数え切れないほど群がっている。

「いけるか？リインフォース？」

「問題ない！」

俺たちはイレギュラーの群れに向っていった。

・・・

今俺はカマードへハイパーフォームで、リインフォースはモードスで戦っている。初めに比べると三分の一ほどに減っているがそれでも数え切れないほど居る。

『Hyper Blade』

俺はハイパーブレイドで雑魚どもを切り裂く。

「まだ居るのか？」

「増えてないか！」

リインフォースの指摘通りものすごい勢いで増えている。

「よほどの悪意を持ったものが居るのか……それとも」

「大元が居るかだな……」

といった時いきなり大ダメージを受ける。

「がっ、ぐっあ……」

俺の目の前にはコーカサスオオカブトのようなイレギュラー……ヘ
コーカサスイレギュラー（以降コーカサス）が立っていた。

「何もんだ……テメエ！」

「我か？^{おれ}我は貴様等が言う大元……またの名をへマスターイレギュ
ラーだ、覚えておけ」

「マスターイレギュラー……つーことはテメエを倒せばこいつ等は
消えるんだな」

「そうだ人間、貴様は人間にしてはやるようだが……〈神の領域〉
を持ちし我ら^{おれ}には勝てん」

「神の領域……だと」

「冥土の土産に教えてやる、神の領域とは時間と言う概念を止める
技……貴様等のクロックアップやハイパークロックアップなど赤子

同然よ」

「成る程なあ……でも消えるのはお前だ……」

「何？」

「俺の進化は光よりも早い……故に俺の進化は誰にも追いつけない……ってな！」

「ほざけ人間が！」

「俺は未来を……何度でも……掴み取る！」

俺がそう言うとは何処からか紫色の剣のようなゼクター……へマスター
ーゼクターゝが現れ俺の手に収まる。

「マスター……キャストオフ！」

俺は持ち手の下側のレバー……へマスターレバーゝを捻ると。

『Master Cast Off』

カマードは色が紫に変わり背中に腰ぐらいまでのマントが二枚現われ更にカマードホーンが一回り大きくなり……。

『Change Master Mantis』

電子音が鳴りにカマードはへマスターフォームゝへパワーアップする。

「それがどうした！」

コーカサスが攻撃態勢をとるが。

「マスター……クロックアップ！」

俺がマスターゼクターのスラップスイッチを叩くと。

『Master Clock Up』

俺とコーカサスは神の領域へ入った。

「クソ！人間風情が何故神の領域に入れるのだ！」

「だから言っただろ、俺の進化は光りより早いってな！」

俺はマスターゼクターでコーカサスを斬り裂く。

「ぐお……」

コーカサスがひるんだ隙に。

「はぁ！」

俺は斬る、斬る、斬る、斬るそして回し蹴りで距離を開ける。

「これで終わりだ！」

俺はマスターゼクターを右腰にセットし更にマスターレバーを捻り。

『Master Rider Power』

カマードゼクターのフルスロットルスイッチを押していく。

『one two three』

一度カマードゼクターのゼクターホーンを元に戻し。

「マスター……キック！」

再び倒す。

『Rider Kick』

電子音が鳴りタキオン粒子が両足に集まり。

「はぁ！」

左足でコーカサスを蹴り上げ……。

「これで……終わりだ！」

飛び上がりコーカサスに右足で踵落としを喰らわしそのまま地面に叩きつける。

「人間風情が……だが覚えておけ……我^{おれ}以外にもマスターイレギュラーがあと4体いる事をな！……うおおおおお！！！」

コーカサスは耐え切れず爆散……消滅した。

『Master Clock Over』

俺は通常空間に戻った瞬間膝を付いてしまう。

「大丈夫か！」

リインフォースが慌てて駆け寄ってくる。

「大丈夫だ、少し疲れただけだよ」

「それならいいんだが……」

「早く帰るぞ」

「ああ！」

俺たちはマスターイレギュラーを倒し地球の脅威は去ったが俺たちの戦いは激しさを増しそうだ。

第二十七話

『神の領域』

(後書き)

天「どーも作者の天です！」

貴「主人公の貴大だ」

天「今回は『仮面ライダーカマードへマスターフォーム』と『マスターゼクター』と『神の領域』の説明です」

貴「仮面ライダーカマードへマスターフォーム」……カマードがマスターゼクターでパワーアップした最終形態。へカマードプロテクター」の十倍以上の強度を持つへマスタープロテクター」を持ち、カマードホーンが更に大きくなっている。容姿は前の部分がハイパーフォームと色は緑から紫に変わるが形状は同じ、しかしプロテクターは常に展開している、後ろは2枚のマントを着けている(色は緑)以外はハイパーフォームと同じだが背中の中の羽みたいな部分は展開しない。またマスターゼクターのスラップスイッチを叩く事によりマスタークロックアップを発動し神の領域に到達する事が可能。必殺技はマスターレバーを捻り、『マスターライダーパワー』を送り込み通常のライダーキックと通常の手順をふむ事で発動する『マスターキック』、もう一つはマスターレバーを捻り『マスターライダーパワー』を刀身にためトリガーを引く事で発動する『マスタースラッシュ』。

マスターゼクター……紫色の剣の形をしたゼクター。カマードをマスターキャストオフさせたりマスタークロックアップさせることが可能。容姿は仮面ライダーブレイドのキングラウザーのカードシステムの機構をなくしスピードのマークのところにハイパーゼクターと同じスラップスイッチを付け、持ち手の下側が捻れるようになってい

る。

神の領域……マスターイレギュラー、またはカマードへマスターフォームがマスタークロックアップする事によって到達できる次元。マスタークロックアップしたもの以外の時間が止まる。神の力であるため詳細は不明。

こんな感じか……」

天「ご苦労！しかしお前もチートの仲間入りだな」

貴「書いたのお前だけだな……」

二人「ライ様！ご感想ありがとうございます！」

二人「他の読者様もご意見ご感想などあればいただけると幸いです。それでは」

第二十八話

『毒料理殺人事件』

(前書き)

今回はかなりグダグダ気味ですが……。

それではどうぞ。

第二十八話 『毒料理殺人事件』

カマZ Side・・・

気だるい昼下がりにそれは起きた。

「おい！どうした貴大！」

貴大が突然テーブルの前で倒れたのだ。

「ブクブクブクブク……」

口から泡を吹き白目をむいて……。

「相棒！……！！！」

そのあと貴大はたまたま通りかかった桃子さんの手によって救急車を呼ばれ連れて行かれた。

「ゆ、許せねー、絶対俺が相棒を殺った犯人を見つけ出してやる！」

※貴大は死んでいません。

「よーし！待ってろよ！犯人！」

そう言って俺はある場所へ向った。

はやて家……

「つー事で犯人はお前だ！シャル！」

「一体何の話！」

「しらをきる気がテメエ！貴大を料理なんかで殺しやがって！」

※もう一度いいますが貴大は死んでません。

「わ、私そんなの知らないわ！」

「やった奴はみんなそう言うんだよ！」

迫る俺、たじろぐシャルしかしその時。

「なんや騒がしいな」

はやてが乱入してきた。

「はやてちゃん助けて！」

はやてに泣きつくシャル。

「どうしたんや一体……」

「シャルが相棒に『見た目は普通な（ここ重要）』毒料理を食わして殺したんだ！」

※だから死んでませんって……。

「それは犯人はシャルやないよ」

「何故そういえる？」

「だってシャルルは見た目も毒料理やもん！」

「はやてちゃん酷い！」

「ふむ……そう言えばそうだったな」

「な、納得するんですか！」

「……前に相棒から『もうシャルルに料理はさせん！』って聞いた事があるからな……、それなら誰が一体……」

「そうや！ええ事思いついた！」

こうして俺たちは全員を翠屋ハーレムメンバーに集めた。

翠屋……

俺は士郎さんから許可をもらい全員をハーレムメンバー集めた。

「なんなんだよ一体」

ヴィータの問いに俺は。

「今から『見た目は普通な（ここ重要）』毒料理殺人事件の犯人を捜すためお前等に料理を作ってもらおう！」

「僕は関係ないんじゃないか？それに何で縛られてるんだ！」

クロノの問いに。

「お前は試食係、あと逃げられると面倒」

「ちょっと待て！あいつで耐えられないものを僕が耐えられるわけないだろ！」

「使い捨てだから問題ない！」

「ひ、酷い！」

「因みに今回作るのはフェイト、シグナム、ヴィータ、リインフォースだ」

「私たちはいいの？」

なのはの問いに。

「なのは、はやては料理が出来るから問題ないしシャルは見た目がアウトだから除外だ。そしてアリシアはまず料理が出来ない」

「成る程……」

「さて……納得したところではじめようか」

こうして毒料理大会が始まった。

・・・

「さてみんな作り終った事だしクロノ、試食タイム逝ってみようか」

「！」

「おい！字が違うぞ！」

「ほら一人目はシグナムだほら食べ！」

俺はクロノの口に料理を突っ込む。

「ムグ！……あれ、美味しい……」

「チッ、次はヴィータだ」

「今の舌打ちはなんなんだ！、モグモグ……これも普通に美味しいんだが……」

「ケッ、次はフェイトだ」

「お前性格悪いぞ……、モグモグこれもなかなか……」

「ペッ……次は……」

「何やってんだ？」

翠屋に入ってきたのは貴大だった。

貴大Side・・・

俺が病院で目を覚まし帰ってみると誰もいなかった。そこで翠屋に来てみたんだが……。

「何やってんだ？」

そこには縛られたクロノとその目の前に並べられた料理の数々……。

「ちょうどいいところに来た相棒！お前を殺した犯人を……」

「勝手に殺すな！つーか別に誰だっていいじゃねーか……」

「なんだ？お前変なもんでも食ったか」

「昼飯が変なもん……ってそんな事はどうでもいい、別に犯人なんか探さんでもいいだろ？」

「何でだ？」

「故意にやったならそれなりの行動を取らせて貰うが、これは事故だ、失敗した上に責められたらたまったもんじゃないだろ？つー事でこの件は終わりだ！はーい解散！」

こうして毒料理殺人事件（死んでないが）は終わりを告げた。その後……。

「貴大……すまなかったな……」

今回の事件の原因であるリインフォースが話しかけてきた。

「別に故意じゃないから構わん、それとよければ料理を教えてやるか？」

「いいのか？」

「問題ない」

「それじゃあ頼む」

こうして俺は料理を教える事になりリインフォースは人並みの腕ま
で成長した。

第二十八話

『毒料理殺人事件』

（後書き）

天「どーも作者の天です！」

貴「主人公の貴大だ」

天「いきなりですがA，S編は今回で終わりです！」

貴「グダグダすぎるだろ！」

天「このまま続けてもグダグダいきそうなので次に進む！」

貴「オイオイ」

天「そういうわけで次回からはStrikerS準備編です！」

二人「ご意見やご感想などがありましたら言っていただければ幸いです！それでは」

第二十九話

『貴大と管理局』（前書き）

今回は読者の皆様の期待を（悪い意味で）裏切るかもしれません。
それではどうぞ。

第二十九話 『貴大と管理局』

俺はいつも通りにハイパーゼクターを使いイレギュラーを倒すためにミッドチルダに來たのだが……。そこにはイレギュラーと戦う管理局の局員達がいた。

「ちっ面倒な……相棒！」

「おうよ！」

俺はカマードゼクターを掴み。

「変身！キャストオフ！」

そのままベルトに装着しゼクターホーンを倒す。

『H e n s h i n C a s t O f f C h a n g e M a n t i
s』

俺は仮面ライダーカマードに変身してイレギュラーどもに突っ込んで蹴り倒す。

「おらっ！」

俺は右手のブレイガンへブレイドモードでイレギュラーを何体か斬り裂く。

「仮面ライダーだ！」

「ナカジマ准尉か？」

「いやあれは違うぞ！」

などと局員が口々に言っているがそれに構わずイレギュラーを倒している。

「お、おい……あれ、逃げるぞ！」

その言葉に周りを見回してみると。最後に残った鷲の様なイレギュラー……ヘイグルイレギュラー（以後イーグル）が空に逃げようとしている。

「逃がすか！」

俺は飛び上がろうとしたが……。

「はぁ！」

上から飛来してくる何かがイーグルに攻撃しイーグルと共に落ちてくる。

「あ、あれは！」

空から飛来してきたのは仮面ライダースパイだった。

「一気に決めるわよ仮面ライダーさん♪」

「お、おう……ライダーチャージ！」

俺はブレイガンのチャージレバーを引き。

『R i d e r C h a r g e』

電子音が鳴りブレイガンの刀身にタキオン粒子が集まっていく。

「ライダースティング！」

次にスパイがスパイゼクターのフルスロットルスイッチを押すと。

『R i d e r S t i n g』

電子音が鳴りスパイゼクターのゼクターニードルにタキオン粒子が集まっていく。

「はぁ！」

俺が斬り裂き……。

「やぁ！」

スパイが貫く。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！！！」

イーグルは叫びながら消滅した。

「さて……それじゃな！」

俺は手を振り立ち去ろうとしたが……。

「ちょっと待ってくれるかしら？」

「なんだ？」

俺は立ち止まりふりかえる。

「変身を解除して管理局の地上本部まで来てくれないかしら？」

「嫌だと言ったら？」

「力ずくでも……」

「やれるものならやってみろ……」

「そう……じゃあ行くわよ！」

「……来い！」

俺とスパイの戦闘は圧倒的……とはいかなかった。俺が優勢になれば周りの魔導師たちが魔力弾を撃ってくる。ダメージはないがスパイがその間に立て直し大ダメージを与えられない。

「鬱陶しい……な！」

「それが私たちのやり方よ！」

まるでゼクトのザビーとシャドウを思わせる戦い方に俺は翻弄されていた。

「これで終わりよ！ライダーステイング！」

スパイがフルスロットルスイッチを押し……。

『R i d e r S t i n g』

電子音が鳴りゼクターニードルにタキオン粒子が集まっていく。

「はぁ！」

「ちっ！」

俺は咄嗟に右腕にマスクドアーマーを纏わせ防ぐ。

「……やったの？」

「残念だが……」

俺はマスクドアーマーを外し左手でスパイの方を掴み右手でフルスロットルスイッチを押していく。

『o n e t w o t h r e e』

「なっ！」

スパイが驚いているのにも構わず俺はゼクターホーンを戻し……。

「安心しろ、手加減はしてやる……ライダーキック！」

ゼクターホーンを再び倒す。

『R i d e r K i c k』

電子音が鳴り俺の右足にタキオン粒子が集まっていく。そして俺はスパイを放して……。

「はっ！」

回し蹴りを喰らわす。

「きやああああああ!!」

スパイは転がりながら変身が解ける。

「ったく……厄介な奴等だったぜ」

俺は再び立ち去ろうとするが……。

「待って！」

スパイの女が再び俺を止める。

「もうアンタにはとめる術はないと思うが？」

「それでも……私は！」

スパイの女は生身で構える。

「……どうしてそこまでする？」

「大切な人を守りたいからよ……」

守りたいか……。

「はぁ……わかったよ、話だけは聞いてやる」

俺はそう言って変身を解除した。するとスパイの女は。

「えっ、子供？」

「……正真正銘10歳の子供だが？」

「えっでもさっき……」

「あれは変身魔法で18歳ぐらいまで成長した姿だ」

「子供に負けたなんて……」

「安心しろあんたが負けたのはシステムのスペックとシステムでの
戦闘経験の差だ」

「スペックってそんなに違うものなの？」

「魔導師ランクで言うとスパイはS、カマードはSSだな」

「貴方詳しいのね」

「俺はコイツの開発者であり元資格者だからな」

「……もう驚かないわ」

「んで、早く連れて行ってくれよ」

「そうだったわね私はクイント・ナカジマよ貴方は」

「小日向貴大だ」

「それじゃあ行きましようか」

「ああ……」

こうして俺は管理局の地上本部に行く事になった。

地上本部……

クイントに案内されて部屋に入ると髭面のオッサン……ヘレジマス・ゲイズ中将＜が居た。

「んで、管理局のお偉いさんが俺に何のようだ？」

「……単刀直入に言う、管理局に入らんか？」

「こっちの条件を飲むなら良いぜ」

「……言ってみろ」

「まず一つは俺の部隊を作らせろ、これは人選なんかも俺がする、二つ目は俺や俺の部隊は気に入らない命令には従わない、そして最後だこれは可能な限りでいいから俺の要求はなるべく聞いてくれ」

「……一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「これも簡単に了承する理由はなんだ？」

「一つはイレギュラーの情報集め、二つ目は俺の大切な奴等が管理局に入るって言い出したからな、あいつ等に管理局の暗部の魔の手が伸びる前に俺は暗部を叩き潰す！……これが俺の理由だ」

「儂が暗部の人間だったらどうするつもりだ？」

「ならアンタごと叩き潰すまでだ」

俺の回答にレジアスは突然。

「ククククク……ハッハッハッハッハッハ！！」

笑い出した。

「面白い……気に入ったぞ！貴様の条件全て飲んでやる！だから大いに暴れまわれ！」

「ああ……そうさせてもらうさ！」

こうして俺は管理局に入る事になった。この選択が吉と出るか凶と出るか今の俺にはまだ分からない。

第二十九話 『貴大と管理局』（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「指図されるのは嫌いだがするのは好きだどーも主人公の貴大だ」

天「今回は今更ながらイレギュラー及びライダーたちの力関係を魔導師ランクに置き換えてみようと思う」

貴「本当に今更だな」

天「うっさい……まずダミーイレギュラーはAランク、成長体やスパイ、フライモードスがSランクだ」

貴「えらく間が開いたな」

天「それぐらいの力量差って事だ……次にカマード〈MF、RF〉やクイーン〈MF、RF〉はSSランクでカマード〈HF〉はSSランクになる」

貴「因みに〈MF〉はマスクドフォーム、〈RF〉はライダーフォーム、〈HF〉はハイパーフォームの略だ」

天「んで最後にマスターイレギュラーとカマード〈マスターフォーム〉は測定不可能だ」

貴「この辺は〈神の領域〉に入れるからな、普通じゃどうしようもない」

天「まあ解説はこんな感じだ」

貴「これ見るとライダーってなのはの世界には不釣り合いだな」

天「今更言うなよ」

二人「ご意見やご感想などいただければ幸いです。それでは」

第三十話 『NECS結成!』 (前書き)

今回は駆け足気味です。

それではどうぞ。

第三十話 『NECS結成!』

俺が管理局に入って数日、俺はレジアスに呼びだされ地上本部に来ていた。

「なんの用だ？」

「今回は制服と階級の授与とお前が言っていた部隊の骨組みを決める為に呼んだんだ」

「成る程な……んじゃさっさと済ませてくれ」

「分かっておるそう急くな……ゴホン、小日向貴大、これより貴様を一等陸佐とする」

「オイオイいきなり一等陸佐って……いいのかよ？」

「構わん、お前の条件を飲もうとすればそれくらいの階級は必要だからな」

「なら遠慮無くいかせてもらうぜ」

「望む所だ!、それで次は部隊の方じゃが……」

「大体草案は出来ている」

俺はレジアスに草案を書いた企画書を渡す。

「こ、これは!」

「どうだ、それが俺の計画の要……ミッド製マスクドライダーシステム……〈仮面ライダービート〉だ」

「仮面ライダービート……」

「装甲はヒイロノカネのかわりにデバイスの素材を、エネルギーに関してはタキオン粒子のかわりに魔力素を使っている、更に動力にはカートリッジシステムを参考に設計した魔力バッテリーシステムを使い簡易AIを搭載しているから魔法の適正がない人間にでも使用できるようになっている」

「す、すごい！……すぐにこれを……！」

「既に契約してくれそうな企業はピックアップしている、後は人員だが……クイント・ナカジマと魔力の適正がある奴と無い奴両方募集時手くれないか？」

「ふむ……それはいいが何故クイント・ナカジマを？」

「理由は単純……彼女が仮面ライダーだからだ」

「しかしそれでは戦力の保持量オーバーで問題になるぞ？」

「俺達が相手にするのはイレギュラーだ、戦力が足りないってのはあるかもしれんが多すぎるって事はない」

「確かにそうじゃが……」

「それくらいアンタなら何とかできだろ？」

「全く……無茶を言いよる」

「俺を管理局に入れる自体無茶だと思うが？」

「まあ確かにその通りだったな……分かったそれはこっちで何とかしよう……ところで？」

「なんだ？」

「部隊名にNECSネクスと書いてあるが何か思い入れでもあるのか？」

「ああ……その名前は俺の父さんがトップにいた組織の名前だ」

「成る程……分かったそれではこの草案通りに事を運ぼう」

「んじゃよろしく頼むな」

俺はそう言って俺は地上本部を出た。その帰り……。

「隠れてないで出て来いよ！」

俺が振り返りながら言うときボディスーツを着た女が出てきた。

「何故分かった？」

「足音とアンタの異様なまでの殺気だ」

「まあいい……構えろ仮面ライダー！」

「はぁ……変身」

俺はカマードゼクターを掴みベルトに装着する。

『Henshin』

俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身し構える。

「行くぞ！仮面ライダー！」

「来いよ！」

俺は女を迎え撃が……正直全くと言っていいほど歯ごたえが無かった。

「ちょっと弱すぎないか？」

「くっこうなったら……ライドインパルス！」

女が高速で移動するが……。

「クロックアップに比べりゃ遅すぎる！」

俺は女に向って蹴りを入れる。

「がっ！」

女は面白いように転がった。そして俺は女に近づき。

「もうやめにしない？これ以上は虐めてるみたいで気乗りがせん」

だが……」

「くっ舐めた事を……」

『いやそこまでだよトーレ』

モニターが現れそこには広域犯罪者の〈ジェイル・スカリエッティ〉が映っていた。

「しかしドクター！」

「……ったく、それで広域犯罪者が俺に何のようだ？」

『全く酷い言い方だね……こうなった原因は管理局の暗部だという事を知っているだろうに……』

「まあ知ってるけどな……んで結局何のようなんだよ？」

『簡単な話だ、私たちと組まないか？』

「こっちにメリットは？」

『私の娘達を貸そう』

「……何が目的だ？」

『君と同じで娘達を守りたいんだ』

「……俺のいちぞんでは決められん」

『分かった……トーレに通信機を渡してあるから決まったらそれで連絡してくれ』

「分かった、んじゃまた後日」

『いい返事を期待しているよ』

俺はトーレから通信機を受け取り帰る事にした。

第三十話 『NECS結成!』 (後書き)

どーも作者の天です、突然ですが読者の皆様に聞いてみたい事があるんです。感想で答えてくれると幸いです。

さてこの小説の今後ですが皆様どうすればいいと思いますか? 2つの内で答えてください。

1『Strikersで本編を終わらせ後はほのぼの話を作者の思いつきor読者の皆様のリクエストでダラダラ書き続ける』

2『Strikers後も本編を続けVivid編かForce編またはオリジナル編を書く』

因みに2の場合は三つのうちどれがいいかも書いていただけると幸いです。

※このアンケートの結果が必ず反映されるとは限りません。

この例外のご意見やご感想をいただけると幸いです。それでは。

第三十二話

『集まる戦力と貴大の悩み』 (前書き)

今回は駆け足……と言うか全力疾走気味です。

それではどうぞ

・
・
・

あれから2年の月日経ちビートの試作品が完成し部隊に31体配備され人員もそれなりに集まり順調だったのだが……。なのはが任務中にイレギュラーと遭遇し大怪我を負ったのだ、そして俺は今なのはが入院している病院の屋上にいたりする。

「探したよ貴大……」

どうやらフェイトが屋上に上がってきたようだ。

「どうしたフェイト？」

「なんか貴大元気が無くなって……」

「そりゃな……家族が怪我して元気な奴なんていないと思うが……」

「まあそうなんだけどね……でもそうじゃなくてなんか悩んでるみ

「たいだったから……」

「……フェイトには敵わないよ……俺はふと思ってしまったんだ、もしなのはがこのまま飛べなくなればいい……そうすればなのはが無茶をする事はなくなるってな……」

「そんな……」

「分かってるさ、今の考えが最低だって事ぐらいな……」

俺は立ち去ろうとするが。

「待って！」

フェイトが俺に後ろから抱きついてくる。

「フェイト？」

「無茶しないで……」

「……」

「貴大は何時も無茶してる……なのはとは比べ物にならないくらい……だから心配なんだ」

「フェイト……」

「だから私にも……ううん、私達にも何か手伝いをさせて」

「……ハア、分かったよ」

「じゃあ！」

「……まあ今は特に手伝ってもらえる事は無いんだけどな」

「そんな……」

「だから今は自分の事をしろ、お前は執務官を目指してるんだろ？」

「うん……試験には落ちちゃったけどね」

「大丈夫だ！お前ならやれるさ」

「うん！私頑張るよ！」

「その意気だ！応援してるからな……それじゃあ戻るか」

「うん、そうだね」

俺達は屋上から立ち去った。病室に戻るとクロノが居たのである事の話をするためにクロノと再び屋上に出た。

「話ってなんだ？」

「ああ……まずはこれを見てくれ」

俺はクロノに管理局の不正データを見せた。

「これは……闇の書事件のときの……」

「ああそうだ……」

「……これに僕に見せてどうする気だ？」

「……お前に手伝ってもらいたい事がある」

「……まさか！」

「ああそうだ俺は暗部を潰すためにクーデターを起こそうとしている」

「そのクーデターに協力しろと？」

「ああ……そうだ」

「成功するのか？」

「するしないじゃない……させるんだ、そのためのNECS^{ネクス}だ」

「……僕はどうすればいい？」

「本局で仲間を集めてくれ、言っておくがリンディさんとレティさん以外の上層部はほとんど黒だからな」

「……全く、無茶を言ってくれる」

「何を今更、ああとなのは達にはまだ言うなよ」

「どうしてだ？」

「あいつ等は真っ直ぐ過ぎるからな……ギリギリまで巻き込みたくない」

「それじゃあ僕が曲がってるみたいじゃないか！」

「……」

「なんか言えよ！」

「何を今更（笑）」

「オイ！」

「あと忘れそうになったけど暗部はイレギュラーと手を組んでるかな気をつけろよ」

「大事な事を忘れるな！」

「ああ因みにスカリエッティとも手を組んだから」

「へえ……って何重大な事をサラッと言ってるんだ君は！」

「後でゴチャゴチャ言われると面倒だし今ゴチャゴチャても面倒だからサラッと流れるかなと思ってさ」

「大事な事を面倒で片付けるな！」

このあと俺とクロノがギャーギャー騒いでたら看護師さんに怒られました。俺選択間違えたかな？

第三十二話 『集まる戦力と貴大の悩み』（後書き）

天「どーも作者の天です」

貴「病院で騒いではいけません主人公の貴大だ、つーかお前は前回と今回の話の切り際を間違えたな」

天「ごめんねーごめんねー（某栃木県出身の芸人風）」

貴「まあいい……次の次ぐらい（伸びる可能性あり）には世界の破壊者が登場予定だ」

天「今回は前回のアンケートのほかにカマードのファイナルフォームライドを募集します」

貴「こんなのどうよ！ってのがあったら送ってくれると助かる」

二人「銃王 海様ご感想ありがとうございます！」

天「前回のアンケートはストライカーズが始まるまで募集しますので意見があったら言うてください、それとアンケート以外にも感想や意見などがあれば言うただけると幸いです」

貴「それでは」

天「オラに^{やるき}元気を分けてくれー！！」

貴「うるさいよお前！」

第33話

『それはバレンタインと言う名の戦争……』

N O S i d e . . .

貴大はNECS^{ネクス}の部隊長室で黙々と仕事をしていた。まるで今日と言う日を潰す勢いで……。

「隊長、今日はバレンタイ……」

部下（一般兵）の言葉に貴大は。

「あーあー聞えないーい」

耳をふさいで声を遮るように叫ぶ。

「バレン……」

「あーあーあーあー」

「バ……」

『Maximum Rider Power』

「なんか物騒な音聞えた！」

「次は無いぞ……」

「りよ、了解っス……それにしても何かあるんっスか？」

「……無駄な血を流させないためだ」

「そんな大げさな……」

「……」

「ちょ！黙らないでくださいよ！」

「お前知ってるか女性局員のリンチ事件を……」

「確かこの時期に起こるじけんっスよね？」

「ああ……しかもその局員は全員俺のチョコをくれたんだ」

「……まさか」

「そして被害者は昏睡状態のときに『白い悪魔達が』って呟いてるって話だ」

「……隊長のご家族よく捕まらないっスね」

「それは俺が被害者に被害届けを出さないように謝って回ってるかな」

「隊長にはプライドが無いんっスか？」

「プライド？何それ、美味しいの？」

「大体分かったっスよ」

と貴大が部下と話していると貴大は突然何かを感じ。

「I Can Fly!」

窓から飛び降りた。そのあとすぐに。

「貴大君! チョコレー……ってあれ?」

「隊長なら窓から出て行きましたけど……」

「ありがとうなの!」

となのはは部屋から出て行った。

「隊長……頑張ってください……」

部下は一人でそう呟いた。

貴大Side・・・

えゝ只今私は逃げ回っております原因はフェイトが殺気を振り撒いて追っかけて来るんだもん。

「だーーーー! フェイトお前何か俺に恨みでもあるのか!」

「恨みは無いけど愛ならあるよ!」

「なら何故! 殺気を振り撒きながら追っかけてくる!」

「だって貴大に変な虫が寄ってくるのを防がなきゃいけないからね……残念だけど今日は家で大人しくしてもらおうから!」

全力疾走している中、死神がじりじりと距離を詰めてくる。流石はスピード重視……速さが尋常じゃねーな……。と考える暇も無く頭を下げると死神の鎌が俺のすれすれを通る。
バルディッシュ

「ちょ、おま！絶対殺す気だろ！」

「大丈夫、非殺傷設定だから！」

「そんな問題じゃねーー！」

俺が全力で走っているとシグナムとヴィータが居た……つかレヴアンティンの弓モード（フォーム名？んなもん忘れた）とでっかいグラーフアイゼン（フォーム名？以下略）をそれぞれ構えている。えっ何？お前等も？

「今日はおとなしく寝てもらおうぞ！駆けよ隼！」

「貴大のハートをぶち抜け！轟天爆碎！ギガントシュラーク！！」

かわせない大技二つが俺に迫ってきた。

フェイトSide・・・

「ちょっとやりすぎたかな……」

私は貴大から離れてちよっと反省しながら見ていたのですが……。

「フフフフ、ハハハハハハ……ハッハッハッハッハッハ
……そうか……そういう事か……」

「た、貴大？」

ちょっと様子がおかしいので三人で近づいてみると。

「……お前達は俺を殺したかったんだな……」

「ち、ちが……！」

「いいだろう……ならば戦争だ！変身」

そう言って貴大はカマードゼクターを掴みそのままベルトに装着する。

『H e n s h i n』

貴大が装甲を纏い仮面ライダーカマードへマスクドフォームに変身する。

「ちょっと待って……」

「さあ……地獄を楽しみな！」

このあとOHANASHIとは比べ物にならない恐怖を味わいました。教訓……貴大は絶対怒らしてはいけない……結局今年はチョコレートを渡せませんでした。

第33話

『それはバレンタインと言う名の戦争……』

(後書き)

天「どーも作者の天です！」

貴「どーも主人公の貴大だ」

天「お前チョコいくつもらったよ？」

貴「えーっとなのはだろ、はやてにシヤマル、リインフォースにアリシア、後はチンクとクイントからも貰ったな」

天「ケッ」

貴「自分で書いという舌打ちするなよ……」

天「当初は全員からもらえない予定だったんだけどな（チンクとクイント以外）……パソコンがフリーズして面倒になってこうなった」

貴「（・皿・）！！」

天「泣きそうになったり企画自体やめようかなって思ったりしたさ……」

貴「お、お疲れさん……」

二人「ご意見やご感想がありましたら言っていただけると幸いです」

天「因みにカマードのFFRは今回で締め切ります！」

貴「全くこなかったけどな」

天「orz……」

貴「落ち込むなよ……」

天「……オラに^{かんそう}元気を分けてくれ！」

貴「引っ張るな！」

第34話 『通りすがりの仮面ライダー』 (前書き)

他の作品に浮気して遅れました事をお詫びします。

今回は世界の破壊者の登場です。

第34話 『通りすがりの仮面ライダー』

俺は最近配属した新人の名簿を見ていたのだが……。

「なんだこれ？」 もやし” か？」

その名簿には何故か地球の言葉（って言うか日本語で）” 門矢士” と書かれた名簿があった俺は不審に思い朝礼を使って確認する事にした。

・・・

「オイ！この中で” もやし” って名前のやつ出て来い！」

俺はNECS隊員の前であえて名指しする、すると。

「俺は” もやし” じゃない！」 かどやつかさ” だ！覚えておけ！」
なるほど” かどやつかさ” か……って。

「ディケイドかよ……」

「この世界でも俺は有名らしいな」

「世界の破壊者ディケイド！お前にこの世界は破壊させねえ！」

俺はカマードゼクターを構え。

「成る程、そういうことか……」

門矢士もドライバーを構え。

「「変身!!」」

『Henshin』

『KAMEN RIDE DECADE』

二つの電子音が鳴り俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォーム
へに門矢士は仮面ライダーディケイドに変身した。

「「はぁ!」」

俺のカマードブレイガンへブレイドモードへディケイドのカード
ケースのような剣がぶつかり合う、一回、二回、三回……幾度とな
くぶつかり合うそして僅かにできた隙を突いて俺はディケイドに蹴
りを入れ俺はゼクターホーンに手をかける、するとディケイドもカ
ードケースからカードを取り出し。

「キャストオフ!」

「それならコイツだ!」

俺はゼクターホーンを倒しディケイドはドライバーにカードを挿入
する。

『Cast Off Change Mantis』

『KAMEN RIDE KABUTO』

俺はヘライダーフォームにディケイドは仮面ライダーカブトヘライダーフォームに変わる。

「ついて来い！」

俺はディケイドにそういうと。

「上等だ！」

ディケイドはカードを取り出し。

「クロックアップ！」

俺は腰のスラップスイッチを叩くと同時にディケイドもドライバーにカードを挿入する。

『Clock Up』

『ATTACK RIDE Clock Up』

俺とディケイドはクロックアップした。

??? SIDE・・・

カマードとがぶつかり合う、一回、二回、三回……幾度となくぶつかり合うそして僅かにできた隙を突いてカマードはディケイドに蹴りを入れカマードはゼクターホーンに手をかける、するとディケイドもカードケースからカードを取り出し。

「キャストオフ！」

「それならコイツだ！」

カマードはゼクターホーンを倒し、ディケイドはドライバーにカードを挿入する。

『Cast Off Change Mantis』

『KAMEN RIDE KABUTO』

カマードは〈ライダーフォーム〉に、ディケイドは仮面ライダーカブト〈ライダーフォーム〉に変わる。

「ついて来い！」

カマードはディケイドにそういうと。

「上等だ！」

ディケイドはカードを取り出し。

「クロックアップ！」

カマードは腰のスラップスイッチを叩くと同時に、ディケイドもドライバーにカードを挿入する。

『Clock Up』

『ATTACK RIDE Clock Up』

カマードとディケイドはクロックアップした。

「……」

俺は無言のまま心で笑う、そうだ！その調子だ！潰し合え！そして。

『Clock Over』

カマードと姿が戻ったディケイドは膝を突くその隙を狙って俺はサリスワームへと変化し襲い掛かるが。

「「そいつを待ってたぜ！」」

カマードとディケイドは同時に俺に斬りかかって来る。何故だ！何故！

貴大SIDE・・・

俺はクロックアップしてすぐディケイドに話しかける。

「おい、ディケイド！」

「なんだ？」

「局員の中にワームが混じってやがる」

「なに？」

「他の局員から引き離したい、手伝え」

「俺は破壊者なんだろう？」

「あんなモンワームを欺くための嘘だよ」

「嘘も方便ってか？」

「そういう事だ」

「いいぜ、手伝ってやる」

『Clock Over』

そして俺達はクロックアップを解除しあえて膝を突く、すると一人の男がサリスワームに変化し襲い掛かってくる。

「「そいつを待ってたぜ！」」

そう言いつつ俺とディケイド……いや士はお互いの武器で襲ってきたワームを斬り裂く。

「なっ……何故？何故だ！」

ワームの疑問に俺は。

「テメエがワームだってことは最初ッから分かってたんだよ！」
と答え。

「俺を騙したって事か！」

怒り狂っているワームに。

「まっ、そういう事だ」

士がそう言い放つ。

「貴様等ふざけやがって！」

ワームがそう言うのとワームが20体ぐらい集まってくる。

「まさか、この世界でもワームを相手にすることになるとはな……」

俺が愚痴っていると。

「愚痴ってないで行くぞ！」

「へいへい……分かってますよ！」

そう言いながら俺と士はそれぞれ10体ずつ相手をしていく。

「はぁ！」

俺はブレイガンでワームを順番に斬り裂き。

「ライダーチャージ！」

俺はチャージレバーを引き。

『Rider Charge』

電子音が鳴りブレイガンにタキオン粒子が集まっていき。

「はぁっ！」

10体まとめて斬り裂く、どうやら士も倒し終えたらしく残るは最初のワームだけになった。

「さあ、後はお前だけだぜ！」

俺がそういうとワームは。

「うおおおおおおお！！！」

突然唸り声を上げて体が真っ赤になる。

「まずい！」

俺と士は急いで武器をガンモードにしワームを攻撃するがワームは脱皮しフィロキセラワームに変化した。

「我等の計画を邪魔しやがって！貴様何者だ！」

フィロキセラワームが士に向かって問うと士は。

「俺か？俺は……」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

俺が士の台詞を掻っ攫う。

「人の台詞を取るなーーーーー！くっ……まあいい、通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

「二番煎じは締まらないな」

「で誰の所為だ！誰の！」

「記憶にございませんー」

「しかもお前は通りすがりじゃないだろ！」

「……てへ♪」

俺達が漫才もどきをしていると。

「貴様等！いい加減にしろ！」

痺れを切らしたフィロキセラワームが攻撃してくるそれを回避しながら俺は。

「お前がふざけてるから敵さん怒っちゃたじゃないか！」

「明らかにお前の所為だろ！」

「お前が決め台詞取られるから悪い！」

「……もういい、お前と話していると疲れる」

「体力ないな」

「うっさい、もうお前とは喋らん……」

「ちえ……根性なし」

漫才もどきを続けながら俺と士はお互いの武器でフィロキセラワームを攻撃する。

「ぐおっ！」

フィロキセラワームが転がるのと士がカードを出しドライバーに挿入する。

『FINAL FORM RIDE KA・KA・KA・KAMA
RD』

「ちょっとくすぐったいぞ！」

そう言って士は俺の背中に手を突き刺してきた。

「おぶー！」

俺は変形していき、まるで大きなライトニングハートのような姿……
：へカマードデバイスへと変化した。

「な、なんじゃごりゃー……！！！」

俺の叫びに士は。

「うるさい、さっさと決めるぞ！」

もう一枚カードを取り出しドライバーに入れる。

『FINAL ATTACK RIDE KA・KA・KA・KA
MARD』

士は俺を持ったまま浮かび上がり。

「はぁ!!」

そのまま収束砲……〈ディケイドバスター〉を放つ。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ディケイドバスターはフィロキセラワームに直撃し爆散した。そして俺は元の姿に戻り。

「はぁー……肩凝るわ……」

なんて呟いていると突然銀色のオーロラが現れる。

「お迎えか」

士の呟きに俺は。

「気が向いたらいつでも来いよ」

そういうと。

「今度は決め台詞を取るなよ？」

「保障はできんな！」

「はあ、それじゃあな」

「おう！」

そういう会話をし士はオーロラの中に消えていった。

第34話 『通りすがりの仮面ライダー』（後書き）

どーも天です！

今回はディケイドが登場しましたがいかがだったでしょうか？満足していただければ幸いです。

今更ですがライ様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていただけると幸いです。それでは！

第35話

『散る者と残される者』 (前書き)

かなり月日がたちましたがようやく完成です！

それではどうぞ。

第35話 『散る者と残される者』

俺はイレギュラーの出現の報告を受けクイントとリインフォースと共に現場に向かうとそこには一人の魔導師が血だらけになりながらも闘っていた。

「クイントはダミーの一掃、リインフォースは彼の保護を！成長体は俺がやる！」

「「了解！！」」

「それじゃあ行くぞ！」

俺がカマードゼクター、クイントがスパイゼクター、リインフォースがモードスゼクターを構え。

「「変身！！」」

「変身、キャストオフ！」

『Henshin Change Moth』

『Henshin Change Spider』

『Henshin Cast Off Change Mantis』

俺が仮面ライダーカマードヘライダーフォームに、クイントが仮面ライダースパイに、リインフォースが仮面ライダーモードスにそ

れぞれ変身し更に俺はハイパーゼクターを腰に装着しマスターゼクターを掴み。

「マスターキャストオフ！」

マスターレバーを捻る。

『Master Cast Off Change Master
Mantis』

俺はカマードへマスターフォームへに変身しマスターゼクターでイレギュラーを切り裂いていくとそこに他とは違う感覚を持ったイレギュラーが姿を現す。

「貴方がカマードね？」

バラの様なヘローズイレギュラーへに問われ俺は。

「そういうお前はマスターイレギュラーだな？」

と聞き返すと。

「質問に質問で答えるなんて無粋な人ね」

と返されたので。

「テメエと問答する気は一切なかったんでな」

俺はそう言いながら斬りかかるとローズイレギュラーはバラの模様が入った剣で受け止める。

「本当に無粋な人……」

「黙れ！ マスタークロックアップ！」

俺はマスターゼクターのスラップスイッチを叩く。

『Master Clock Up』

「せっかちなっ！」

俺とローズイレギュラーは神の領域に入る。

「はっ、せい！」

時が止まった空間で俺とローズイレギュラーは攻防を繰り返す。そして俺がローズイレギュラーの剣を受け鏢迫り合いになる。

「あらあら、さっきの威勢はどうしたの？」

「はっ、本番はここからだ」

俺は左手にパーフェクトゼクターを召喚しローズイレギュラーを斬る。

「ぐっ」

ローズイレギュラーが怯んだ隙に俺はパーフェクトゼクターとマスターゼクターを使い連続で斬る。

「コイツで終わりだ」

俺はパーフェクトゼクターを横に投げ捨てマスターゼクターを両手で握りマスターレバーを捻る。

『Master Rider Power』

「マスタースラッシュ！」

そう言いながら俺はマスターゼクターの剣の鏢に当たる部分の根元にあるトリガーを引く。

『Master Slash』

電子音が鳴りマスターライダーパワーとタキオン粒子が刀身に流れる。

「はあああああ、はあっ！」

俺はローズイレギュラーに向かって走りすれ違いざまに横に一闪、そして振り向き左斜め上から一太刀入れる。

「そんな……あああああああ！！！」

ローズイレギュラーは爆散し消滅した。

『Master Clock Over』

俺は通常空間に戻ると残りのイレギュラーを一掃し始めた。

・・・

結果だけ言うと保護した魔導師……ヘティーダ・ランスターは俺達が到着した時には既に手遅れで助からなかった。そして俺は今彼の墓に向かっていたのだがその墓の前にはオレンジ色の髪をした少女がいた。

「……君は？」

俺の問いかけに少女は。

「……ティアナ・ランスターです、貴方は？」

ランスター……彼の妹か。そう思いながら質問に答える。

「俺は小日向貴大……君のお兄さんの最後を看取ったものだ」

「そうですか……」

2人はしばらく沈黙し、そして。

「あの……」

「ん？ なんだい？」

「兄さんは、兄さんは役立たずだったんですか？」

ティアナの予想外の言葉に俺は驚きを隠せない。

「……何故そう思う？」

「だって……兄さんの上司の人が兄さんは役立たずだって……っ！」
泣きながら俺に訴えてくるティアナに。

「そんな事はない、君のお兄さんは立派だった役立たずだなんて事は絶対にない」

俺はティアナを抱きしめながら言う。

「本当っ……ですか？」

「ああ、本当だ」

俺は泣きじゃくるティアナが落ち着くまで抱きしめていた。

・・・

ティアナと出会って数日が経過した。まあ報告する事といえばティ
ーダ・ランスター役立たず呼ばわりしたバカはあの手この手を使っ
て潰した……権力最高！そしてティアナ自身の事だが身寄りが無
いとのことで俺が預かる事になった。彼女の兄を救えなかった事に
罪悪感が無いとは言いきれないがそれだけではないと思う……思う
というのは自分でも良く分からないのだ。そして今俺は管理局本局
の医務室に居る。

「なあシャマル、健康診断なんてメンドイよー」

「駄目よ、貴大君はただでさえ無茶するんだからこまめに体の状態

をチェックしなくちゃ」

俺は今健康診断に来ている……と言うか連れて来られた。

「なあなあ検査なんて辞めて食事でも行こうぜ」

「嬉しい提案だけどそれは検査が終わってからね」

「自分の身体ぐらい自分でわかるっつーの」

「倒れる人はみんなそう言うのよ」

「あと3回はもつから大丈夫だって」

「え？」

シャルマルは固まるが俺は続ける。

「だーから、少なく見積もってあと3回はマスタークロックアップに耐えられるって言ってんだよ」

人が神に近づく代償といった所か……マスタークロックアップは使うと使用者の身体を修復できないレベルまでダメージを負わす、これがマスターイレギュラーなら問題ないが生憎俺は人間なのでそれ相応のダメージを受ける……まあ半分がワームであるためある程度は軽減させられるが。

「あと3回……」

シャルマルが呟くが。

「まあ、あとマスターイレギュラーは3体だから一体につき1回で倒せば問題ないさ」

俺は医務室を出るがシャマルがなかなか出てこないなので食事に行かないのかと思いい医務室を覗いてみるとわれに返ったシャマルは俺の後を追って来た。

第35話 『散る者と残される者』（後書き）

天「どーも天です！」

貴「どーも貴大だ……全く今まで他の作品にかまけやがって」

天「それは申し訳ない」

貴「たくもう更新されないのかと思ったぞ」

天「多分これから更新していくと思う」

貴「根拠は？」

天「まどかマジカの小説がやりたい」

貴「このの更新とどういう関係が？」

天「理由は簡単！ 今考えてるのがこれの続編だから！」

貴「お前なあ完結前に続編発表とか……」

天「まあ直接の続編じゃないからこれのキャラはお前（特別出演）以外でないけどね」

貴「それを続編と言うのか？」

天「さあ？」

龍影様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていただけると幸いです。それでは！

第36話 『帰還』 (前書き)

前回のお詫び・・・前回見直したところ後半部分がごっそり抜けていましたので追加しました、お手数ですが前回を読み直していただけると幸いです。

それではどうぞ。

第36話 『帰還』

あれから二年がたったある日俺はいつも通りイレギュラーを駆逐し
帰還しようとしていたのだが突然ハイパーゼクターに電気が走り…
…。

『Hyper Clock Up』

俺はこの世界から姿を消した。

・・・

『Hyper Clock Over』

気がつけば俺は廃墟に立っていた……いや周りは廃墟なのだが少し
遠くを見ると高層ビルが立ち並ぶと言う奇妙な光景……だが俺はそ
れを知っている、なぜなら……。

「渋谷隕石……」

俺が本来いた筈の世界……まあ本当に俺の世界とは限らないが。

「どうなってやがる……?」

考える事数秒、俺は情報を得る事を優先し考えるのを止めて歩き出
す。しばらく歩き廃墟を抜けると俺がいた頃と変わらない町並み、
俺は情報を得るために落ちている新聞を手に取り驚愕する。

「2007年1月だと……」

俺が消滅してから一ヶ月も立ってない………どういふ事かと思考を再び張り巡らせるがそれは中断される………何故なら通り過ぎた少女………いや周りを見渡すと周りの人間は全員が緑の石をつけたペンダントをしていたからだ。

ペンダントだけなら特に問題は無い………問題なのは緑の石、あれはワームに反応すると言ふものだがそれは副産物にしか過ぎないその本当の効果は人間をワームの亜種であるネイティブに代える事、俺は通行人からペンダントを何処で手に入れたかを聞き出しその場所に向かうとZECT^{ゼクト}の隊員であるゼクトルーパーと加賀美新がペンダントを配っていた。

「お前達何をしている！」

俺の声を聞き振り向いたゼクトルーパーたち………特に加賀美は信じられないという顔をする。

「小日向………お前！」

「加賀美………お前それが何だか知っているのか？　それは………」

俺が石の正体を言いかけたときゼクトルーパーの一人が発砲、俺は回避するが他のゼクトルーパーに囲まれる。

「ちっ、そういう事か………よ！」

俺はゼクトルーパーの一人に接近し強烈なアッパーを顎に叩き込む。

「っ！　各員油断するな！」

俺は指示を出した隊長と思わしきゼクトルーパーに接近し蹴りを入れようとするがそのゼクトルーパー……いや他のゼクトルーパーもネイティブに変化し受け止められる。

「面倒だな！」

俺は反対の足でネイティブの腹を蹴り距離を開け丁度飛んできたカマードゼクターを掴む。

「変身！」

俺はカマードゼクターをライダーベルトに装着する。

『H e n s h i n 』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーカマードへマスクドフォームへと変身する。

「はぁ！」

俺は向かってくるネイティブにカマードブレイガンへブレードモードで一太刀入れるとすぐさま標的を変え蹴りを叩き込む。

「そらっ！」

俺は更に標的を変えブレイガンへガンモードに変えネイティブを撃つ。

「やめろおぉーーーーー！！！」

そこに加賀美が俺とネイティブとの戦闘に割り込んでくる。

「変身!!」

『Henshin』

「うおおおおお!!」

加賀美は仮面ライダーガタックへマスクドフォームに変身し俺に飛び掛ってくる。

「っ!このバカが!」

俺とガタックは取っ組み合いになりながら転がる。

「ようやくワームを殲滅し人とネイティブが共存できる世の中に変わってるんだ、小日向例えお前でも邪魔をするなら許さない!」

俺はガタックにマウントポジションを取られ殴られる。

「他人の言葉に踊らされやがってこのバカが!」

「黙れ!!」

「お前がな!!」

俺はガタックにブレイガンへガンモードをガタックに撃ち怯ませそのまま蹴り飛ばすしその反動を利用して立ち上がりカマードゼクターのゼクターホーンに手をかける。

「くそっ！」

ガタックも転がったあと体勢を立て直し立ち上がりガタックゼクターのゼクターホーンに手をかける。

「「キャストオフ!!」」

『「Cast Off」』

『Change Mantis』

『Change Stag Beetle』

俺とガタックは装甲を弾き飛ばしヘライダーフォームに変わる。

「うおりゃっ！」

「はぁ！」

ガタックは両肩のガタックダブルカリバーを両手に持って斬りかかって来るが俺はそれを片方をカマードブレイガンへブレードモードで受け止めもう片方は一歩踏み込み柄の部分を腕で受け止めながらガタックダブルカリバーを弾きカマードブレイガンでガタックを斬りつける。

「ぐわっ！」

俺はガタックが仰け反ったのを見逃さずカマードブレイガンをヘガンモードに変形させガタックを撃つ。

「うわっ！」

ガタツクは直撃し転がる。

「この程度か加賀美！！」

「まだまだあ！」

俺とガタツクは対峙し構えるが。

「ギョルルル！！」

突如乱入してきたネイティブによって遮られる。

「クソ、邪魔だ！」

俺はネイティブを2〜3体殴り飛ばすが次々と押し寄せてくる。

「ちっ、分が悪いか……加賀美これだけは言っておく！ 真実ってのはな、自分の目でしか見れないもんだぜ！」

俺はガタツクにそう言いつつ腰にあるスラップスイッチを叩く。

『Clock Up』

俺はクロックアップ空間に入り撤退した。

第36話 『帰還』（後書き）

天「どーも前回後半がごっそり抜けてマジビビリした天です！」

貴「とか言いつつ今回も前半ごっそり抜けかけたじゃねーか！ どーも主人公の貴大だ」

天「気付いてよかったと思っている」

貴「さて今回はカブトの世界帰還編と言う事だが何故入れた？」

天「必要だからとしか言えないよ」

貴「まあそりゃそうか」

天「これは予断だが初期のサブタイは『カブトの世界よ！私は帰ってきた！』だ」

貴「いや別に言わんでも……」

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

天「オラに^{かんそう}元気を分けてくれ！！」

貴「まだやるのかよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0889q/>

魔法少女リリカルなのは～よみがえりし大地の神～

2011年10月3日02時25分発行